
さながらそれは竜の道

鳥のジョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さながらそれは竜の道

【Nコード】

N7359Y

【作者名】

鳥のジョン

【あらすじ】

2012年 ネット上での人種差別問題をきっかけとして、第2次日清戦争が始まってしまふ。

普通の高校生、大学生として過ごしていた「蜂谷大智」は、戦争の火種となるテロに巻き込まれる。

幼馴染の才崎愛、そして部活の友人、吉本信弘と武田古もまた彼と場所同じく巻き込まれた。

その時学校で一番の捻くれ者であり、部活の友人「武田古」が奮闘、彼は戦士としての才覚を開花させるも負傷、そして病院から行方を

眩ませた。

しばらく後に、大智はハプニングから海外の特殊部隊の極秘作戦に出くわし、武田の行方を知る。

天才兵士として戦争に身を投じた武田を追うべく、大智は自衛隊へと志願した。

序章 第1話（前書き）

戦争ものですが、自分の独断と偏見で構成されています。

ある程度他のゲームや映画などの影響や発想を受けていますが、内容はオリジナルですので著作権には当たりません。

一人でひっそり執筆する方針なので、更新速度などのご愛嬌。

高校3年生の時から書き始めた子供の駄文なので、誤字脱字はご了承ください。

序章 第1話

静かにコツコツと鳴る時計の秒針の音が、私の頭でグルグルとめぐる。

窓から差し掛かる日光が、オレンジ色になり始めた。

私は正座して、母の様子を伺いながら時計をチラチラと覗く。

5時36分・・・まだ15分しか経っていないのか。もう1時間以上も居る気分だ。

視界に移る母は、距離が変わっていないのに遠く感じる。

「期末テスト、頑張るって言ったわよね？」

「は、はい・・・」

時計に気を取られた瞬間に母が口を開いた。

気づかれたと思った私は、恐怖と焦りでどぎまぎしながら答える。

「順位は真ん中より少し上・・・これで頑張ったの？」

「・・・はい。」

パンツ！

恐怖で目を逸らした瞬間、私の視界がぶれて、左頬に痛みが走った。

「努力が足りないのよ！勉強してないんじゃないの！学校で何してるのよアンタ！」

母の怒鳴り声が、虚しく夕焼けの部屋に響き渡る。

私は答えたかった。

私なりに努力はしている、と。

テレビ番組で見飽きた。

有名人の男女が、お互いに感動で泣きあう姿を。

私も将来そんな風に結婚式の披露宴で泣けるのだろうか？

今の私と同じように、彼らも一刻も早く外へ逃げ出したい気持ちしか、そのときは沸かなかったんじゃないだろうか。

もう、気絶してしまいたい。

自分自身で首を絞め、自ら失神してしまいたい。

しかし、怒鳴り声は私を、私の意志を許さない。

苦行と言つに等しく、私はこれを受け入れろ、と言わんばかりに・

2007年7月9日、

今日は私の16歳の誕生日だ。

去年の日記を見てみると、期末テストで叱られた記録だけが残っている。

祝われなかった誕生日。初めての経験であつた気がする。

今年の期末テストはまだ帰ってきていないが、先生の機嫌が良かったから、いい点数なのだろう。

もっとも、私の母は優劣を激しく気にするので、クラス順位が低ければ全教科80点を超えていても、きつと私を怒鳴り散らすのだろう。

皆、テストの返却で怖がる。結果に怯える気持ちは判らないでもないが、なんで順位が出た後も、皆は笑顔で登校できるのだろうか？

今日の体育の授業で、ボールが顔に当たって泣いた男子が居た。痛くて泣くのは、誰しも幼稚園頃で経験するだろう。だが格闘技をやれば、きつともつと痛い。きつと痛みというのは慣れるものなのだろう。

だが、慣れて楽しいものではないと、私は思う。

夜が明ける。

今までであったことは、凄く短く感じた。

中学校の卒業も、できるかどうか不安になりながらも、いつの間にか俺はしていた・・・

カチッ。

ジリリリリリリ！

「もう朝か・・・つい5分前に寝た気のような気分だ・・・」
私はそういつて、やかましく鳴り響く時計を止める。
疲れの取れない体を起こして、半開きの視界で着替えを取り、バッグを持って階段を下りた。

朝食をとって歯を磨き、髪型を整えて自転車に乗り、音楽プレイヤーを聞きながら高校へと向かう。

学校へ着けば即授業。

退屈な授業を半分寝て過ごし、中学から続けているソフトテニスを日が暮れるまで続ける。

毎日がその繰り返しで、週末が恋しい、当たり前前の高校生活が続く。

そんな高校1年生のある時。 あれは5月の終わりの土曜だった。

『今にして思えば、あれはフラグというものの1つだったのかも知れない。』

同じ部活の自由奔放な友達と話しているときだった。

「全く・・・人生エロゲみたいに行けばいいんだけどよ」

「エロゲの主人公だって、それなりに努力してるんじゃないかね？ やったこと無いけどさ。」

「んじゃお前は努力をすればハーレムになれると思うけ？」

「いや、無理だろ。」

「だったらそんなこというんじゃないかねえええ」

友達の武田が変顔をして奇声を上げながら答える。

変なことばかり言う奴だから、とても面白い、俺はこいつのそういうところが好きだ。

「エロゲって・・・エッチなゲームのこと？」

いつの間にか側立っていた女子。 なにやら興味津々の様子だ・・・

「あ・・・」

「お、才崎。」

中学生から同じ学校の、才崎愛が珍しく話しかけてきた。

「いや！何でもねえ！あ、大智！俺等の番じゃね！？」

「あ、ヤベ。行ってくら。」

私はラケットを持ってコートに走り入り、後輩と乱打を続けた。

5分して、合図と共に乱打のメンバーが交代になる。

「暑いな、5月下旬でこれとか、地球温暖化だぜ。」

うちわを扇いで、元居た場所に戻ると、そこには才崎の姿があった。

「お疲れ、蜂屋君。」

「珍しいね。君がこつち来るなんて。」

「うん、今日パートナーが休んでて、話し相手が居なくて・・・」

「あ、判るわ、アウエー感ヤバイよな。」

ジュースを飲みながらコートを見渡す。

3面のコートに、さつき居た友達がまだ練習していた。

「ねえ蜂屋君、久々に一緒に打たない？」

「あ、空気に勘弁して欲しいな。」

空いているとはいえ、女子の中に男子が混ざるのとは明らかに浮く。

柄じゃない事するのは控えたい。

「じゃ、練習後とかどう？」

「ああ、いいけど・・・別に・・・」

「へっへへ、有難。そういえば、蜂屋君、体大丈夫なの？」

「え？体？」

言っていることが理解できなかったが、彼女の顔は真顔で、逆に私
が知らない病気を持っているのかと思うぐらいだ。

「母さんが蜂谷君のお母さんと知り合いつて知ってたよね？」

「ああ、まあ学校一緒だったしね。」

「母さんから聞いたんだけど、中3の頃、朝みたら頬にアザだらけ
で登校してたとか・・・」

「・・・・・・・・」

受験に受かってから母の激情は落ち着いて、帰宅時間も遅くなつた。クラスは腹立たしい奴が多いが、何より家にいる時間が少ないのは、解放的でならなかった。

「世間って人の面よく見てるよな。俺の顔なんて見ても金なんてこないのにさ」

「随分荒いよね。愛の鞭っていうのかなあ」

はぐらかしたつもりなのだが、彼女はどうかやら家で俺が何をされてるのか。知っているようだった。

「止めてやめて。もう過ぎた話なんだ。」

俺は格好をつけたのか、それともマジに言ったのか。自然と口からそうでてきた。

再びブザーが鳴ると、今度はまた俺の番らしい。

才崎も先輩に呼ばれて女子の方へ戻ってしまった。

...

「おいおい。硬式の奴等、今日練習あつたのかよ。」

「うん、残念。また今度にしようか。ゴメンね、時間無駄にしちゃって。」

「いや、これから一人でぶらつくんだけど、一緒にどうだい？」

家に帰りたくない俺は、なぜだかこんなことを口走っていた。

「あ、ゴメン。一応予定もあるから」

彼女はそそくさと帰ろうとしたが、身勝手さに僅かな不快感を覚えた俺は彼女を引き止める。

「待った！練習後誘っておいで用事があるってどういうこと？」

「ゴメンね。家庭教師なの。用も無いのに待たせると悪いから。それじゃ！」

逃げるようにして彼女は走り去ってしまふ。

「ハア・・・面白くない・・・」

俺は自転車に乗って、最寄のゲーセンへ行つてはメダルゲームで荒稼ぎ。

いつも20枚はキープして帰るので、金の心配は無かつた。

スロットをやっている途中でケータイが震えだした。

メールを確認すると、あの自由奔放な友達からのメールだった。

『件名：リア充乙

from：武田 古

本文：お前、エロゲやったこ

とないんだっけ？PSP

で出来るようになった

から今度入れてやろう

か？

それとリア充爆発しろ。』

誰でもゲームはするだろうが、私も高校の時期から、美少女ものに手を出し始めた。

いわゆるオタクの仲間入りではあるが、楽しめるんだつたら私はそれで良かったと今でも信じている。

当時、リア充の意味がわからなかったが、高2になった辺りで判つた。

どうやらリアルが充実している奴。現実に満足している奴を示して大衆の想像にあるオタクには無い『彼女の存在』や高い学歴を持つ事。

・・・リアルで充実してないのなら、私も十分不幸自慢はある。

まあ、それもこれもどれも、過ぎた話に過ぎないが、悔やまれるこ

とが1つだけある。

『生まれる場所が違ったのなら、きっと今は何か違ったのだろう。』

.....

2010年、8月9日。

気がつけばもう高3だ。

受験については努力するつもりだが、政治が非常に悪いらしい。
実際、受かるかどうか高校の時以上心配でならない。

『はちやたいち蜂屋大智 18歳。』

夏休みも中盤に差し掛かり、いよいよもってまずくなってきた。
勉強はしてるが、やる気にならない上に集中できない。
こんなので受かるのかどうか心配になるばかりだ。

「AO入試も近いし・・・受かってくれればなあ・・・」
願書をまとめ、ダラダラと冷房の中で体を動かし、くだらないことを考えては時間が浪費していく。

マズイのはこれからで、頭に入っているかどうか判らない勉強をしては日が過ぎていくことだった。

8月24日。

「マズイマズイマズイ、後一週間しかねえのかよ!」

9月1日。

「よう、武田、どんな調子だい?」

すっかり色白になっている武田は、家から全く出てなかったようである。

「あゝ・・・なんでお前はそんな元気なんだか。」

学校が始まることについて全く嬉しくないらしい。

「夏休みの課題が出ないからな。これほど楽な夏休みは初めてだったぜ。」

久しぶりに見る皆の顔が、やけに眩しかった。

残暑の日差しに混ざって、俺は愛と目が合った。

あの後、彼女とは身内関係のことは話していない。

につこりと眩しい笑顔を見せて、高3の2学期がスタートした。

9月14日

武田の奴が急性胃腸炎で休んだらしい。クラスが違うから知らせを受けてなかったが、タフなアイツが急性胃腸炎とは珍しい。

最近流行っているらしいし、俺も気をつけないと。

9月16日

急性胃腸炎つて2日で治るものなのだろうか。武田の奴は随分険しい顔で戻ってきた。

話しかけてみると一歩下がる、どうやら完治してないらしい。すげえタフさだ。ノートもちゃんと全部取ってるし昼飯も完食してる。

9月20日

試しにやったAO入試で受かってしまった。

模試をやって、赤本までやったのに、なぜだか努力が水の泡になった気がする。

「いいよな〜オメエは仕事しないで・・・」

生臭の武田は、恨めしそうな顔で俺を見つめ、おにぎりを頬張る。

「ん〜・・・俺は家に居たく無いからな・・・」

「それでもお前には遊ぶ時間が出来たじゃねえかよ。自由時間なんだぞ？意味わかる？」

「まあ、お前の言い分もわからなく無いけどさ、俺の言い分も判らなくは無いようにしてくれ。」

しかし、学校のテストもまだ残っている。

実際勉強しなくてもよい訳ではないのが、アイツには判らんのだろう。

10月15日

バイトをやる余裕が出来たので、バイトを始めることにした。

ホームセンターショップで、重たい荷物を運ぶ作業だ。
テニスの筋力では辛いものがあつたが、やっていくうちになれるのは何時でも一緒だ。

「おい、蜂屋、その制服・・・」

バイトの先輩が帰宅しようとした時に、制服姿の俺を呼び止めた。

「あ、先輩。知ってるんです?」

「南じゃん、何部?」

「軟テニス部つす。」

「へえ、じゃあ武田のこと知ってたのか?」

どうやら、先輩は同じ年だったらしく、彼と友達になつたきつかけだつた。

「え、古つすか?あのエロゲーマーがどうか?」

「へえ、吉本がよろしくつて伝えといてくんね?あと敬語いらねえよ。同じ年だ。んじゃお疲れ」

「お、お疲れさん」

今まで先輩と慕つてきたが、いきなり同じ年と知つても敬語を突然抜くのも難しいもんだ。

10月20日

いつしか敬語も無くなつて、友人として3人で遊ぶようになった。
吉本は野球部らしく、武田のエロゲにガッツリ食いついて仲良くなつたらしい。

エロは世界を包む、あながち嘘じゃないかも知れない(笑)

11月2日

近所の在日韓国人の住むアパートで、自殺があった。
部屋中にガスを充満させて、窒息死だったらしいが、駆けつけた住
人がタバコを持っていて誘爆したらしい。
アパートの住人が被害に文句を訴え始めた。

在日とか叫んでいる人もいるが、俺にはそういうことは、よくわか
らないし、判りたくも無い。

差別なんて、どこでも起こることだし、叩かれるのは痛いのは俺に
もよくわかる。

叩かれて痛いなら、死ぬのはもっと痛くて苦しいんだろう。

せめて、自分が苦しいのが嫌なら、相手の気持ちになって黙って花
を添えてやるのが筋ってモノではないのだろうか。

何を書いているんだろうか、俺は。

12月12日

気がつけば寒くなったものだ。

日記を見返してみれば、漢字が多くなって、書き方にも変化が見ら
れる。

これが成長というものなのだろうか。だが、俺の心は全く変わって
いない気がする。

中学で別れた友達と久々に会って、顔つきが若いままだと言われた。
嬉しいんだか嬉しくないんだか複雑だが、きつと30代になっても
この顔のままだったら誇れるんじゃないかと、ちよつとだけ思った。

1月1日

いよいよ2011年だ。

除夜の鐘をベランダで聞いていると、やはり定番の「あけおめ」メールだ。

しかし、毎日が同じことの繰り返しだ。

そろそろ恋人と肩をあわせて居眠りとかしたいもんだ。

1月2日

初詣で、喧嘩が起こった。

ヤンキー同士が足を踏んづけたのが喧嘩の発端で、マジでどうでもいいお話だ。

それだけならよかったのだが、喧嘩で吹っ飛ばされた片方の後頭部が俺の顔を直撃しても、何も言わずに戦い続けたのが腹立たしくて仕方が無い。

2月4日

なんだか日記が大雑把になってきた。

だが書くことも無いし、仕方が無いといえば仕方が無い。

折角此处まで来たんだから、ハプニングが起こればもっとスペースが埋まるんだが。

2月14日

バレンタインデーらしい。

ま、どうでもいいんだがな。

そういえば、才崎には恋人は出来たのだろうか？

他人の恋路に干渉する気も毛頭無いが、ちょいちょい気にはなる。

3月14日

ホワイトデーで思い出して日記を引つ張り出した。

皆進学先も殆ど決まって嬉しい限りだ。

これからは自由時間も増えて、楽しいことも増えるだろう。

ほつたらかして母に見られたりしたら大変だから、忘れないようにしたいもんだ。

3月20日

卒業式だったが、感動のかの字も無かった。

まあクラスが詰まらなかつた所為でもあるし、どちらかというと笑って送り出してくれたほうが、俺はそっちのほうが気分がいい気がする。

4月2日

大学の入学式を終えて、予定表を見てみると、授業は入っているけどスカスカだ。

メダルゲーをやる年でもなくなって来たし、どこかへ釣りにでも出かけるとするか。

4月7日

凄い女子が話しかけてきた。

3人集団で1人は可愛かったのだが、後の2人はゴブリンのようだ

った。

何故か焦って吉本に相談してみたのだが、可愛い子は人間の皮を着けたゴブリン、と爆笑するメールを送ってくれた。

4月14日

駅でボーっと電車を待っていると、いつの間にか居た才崎が目の前でパンチラを見せてくれた。

急に大人びて綺麗になったので驚いたが、目が合つと逃げるように何処かへ行ってしまった。

久々に話が出たかったが、彼女もそういう気分でなければ、別に無理に話しかける事も無いだろう。

4月28日

温暖化の影響だか知らんが、暖かじゃなくて、ちょっと暑い。しかし何もおきない日常だ。

5月15日

秋葉原で爆発があったらしい。なんでもテロ声明があったとか武田が言っていた。

日本中は大騒ぎだ。そういえば最近ネットをあまり見てない為、そういうことに疎くなっていた。

でもまあ、爆発で死んだ人達も云万分の一の確立で死んだんだ。この世には悪いことに運がいい奴もいるんだろう。

2012年

5月17日

大学2年で、生活に慣れ、久々に俺と武田と吉本で遊ぶことになった。

だが、5月15日に起きた、秋葉原テロ事件に関連する第2波に巻き込まれることになる。

既に来ていた自衛隊や米軍のパトロールの目をかいくぐり、武装した兵があちらこちらに現れては銃を乱射した。

俺にとって一番驚いたのは、その場所に才崎が居たことだった・・・

セクシヨン1 『他発』

大宮、ソニックシティ。

「嘘だろ、吉本、彼女できたのかよ。」

「おう、そもそも」

「マジかよ・・・やっちゃったりしたのか？」

「ああ、超名器でやばかったぜ!？」

白昼どつどつと俺等は淫猥な話で楽しんでた。

髪の毛をおつたてた高校生がこちらへガンを飛ばしたり、女子高生の目がこちらに来てたりと男3人でデパートに来るもんじゃないな。

「あくあ、ソフマップ下のゲーセンでもいかねえ?」

「いいねえ、何年ぶりかだな。」

俺達は提案どおりにエスカレーターを降りて、ゲームセンターへと向かっていた。

エスカレーターに乗っている間、突如甲高い破裂音が外に響き始める。

悲鳴と共に連発する破裂音。

下りのエスカレーターから上るわけにも行かず、待っていると急に非常ベルが鳴りだした。

エスカレーターが止まって電気が落ち、赤い非常ランプだけが俺達の視界を映し出した。

「なんだ? 火事か?!」

エスカレーターが止まり、俺達は外の様子を見ようとエスカレーターを逆方向に駆け上がる。

一番後ろに居た俺が出口に近づいた瞬間、自動ドアのガラスが砕け、防火シャッターに阻まれた。

ゲームセンターから慌てて逃げ出す人たちの所為で、俺等は動けず、ようやく動けるようになった頃には店内の非常ベルが鳴っていた。

「どうなってやがるんだ!」

「多分、火事じゃない・・・」

俺はそういうと、武田の奴がいった。

「出口側の防火シャッターも閉めよう。多分、銃声だ。」

秋葉原のこともあって、大宮に来てもおかしくは無い。

「はあ？尚更逃げたほうがいいだろ！さっさとようぜ！」

2人を押しのけて出ようとしたが、吉本に抑えられた。

「待った。今外に出たら餌食になるかも知れないぞ。」

「お前が待てよ！皆行ったら取り残されるだろ！」

話しているうちに、地下にいるのは俺達だけになり、静けさに俺の怒声だけが響いた。

「静かに、外へ行って撃ち殺されると、此処で一か八か生きながらえるの、どっちがいい？」

武田も汗を流しているが、必死に冷静さを抑えようとしているようだった。

「でも、此処に居たら奴等来るんじゃないのか！？」

「だから一か八かなんだよ。此処を封鎖して、奴等が鎮圧されるまで待つんだ。」

「正気かよ……」

2人は頷いて勝手に動き出し、向かい側のシャッターを閉めに行ったらしい。

俺は啞然として、エスカレーターに座る。その時間こえてきたのは、外のドンドン遠く、小さく、少なくなる悲鳴だった。

静かにシャッターが閉まり、辺りは非常ランプで真っ赤の世界になる。

「武田……こういうことに関してお前はマジなの……」

「ああ、ちよつと待ってる。」

武田は携帯を取り出して、電話を始めたらしい、静かに声が漏れないように部屋の隅へ行って。

静寂な中、小さなスピーカーから声が聞こえる。

<<はい、こちら大宮西警察。>>

「静かに、声が大きいです。大宮駅の東口で、爆発音がしました……多分ライフルだと思います。」

<<ちよつと待つてください・・・>>
なにやら、小さなノイズと共に警官達の声が聞こえてくる。署内に
連絡が相次ぎ、大騒ぎだったのだろう。

<<・・・判りました。では安全なところに避難してください。く
れぐれも近づかないように。>>

「待て。俺達は今、ソフマップの地下に閉じ込められてるんだ。」

<<判りました、すぐ向かいます>>

「大学生、男3人。早くしてください。頼みますよ。」

電話が切れた。

俺達はヒソヒソと話し合う。

「どうするんだ?」

「取りあえず、このまま見つかりにくいところへ隠れよう。この間
に秋葉原の事件があったんだ。兵もすぐに着てくれるはず。」

戦争物が大好きな武田らしい、何も知識が無いよりはマシだった。

「何分ぐらいだと思う?」

「最悪、3時間。自衛隊が腐ってないことを祈るほか無いな・・・」
ゲーム機の裏から、シャッターの位置が把握しやすいところへ隠れ、
俺達は待った。

何度も携帯の表面で時間の経過を確認しながら待った。

30分ぐらいした頃、目を閉じていた武田が急に口を開く。

「へりの音・・・」

「は?するか?そんなの・・・」

「する・・・地面にプロペラの振動が伝わってる・・・」

こいつの言っている事は嘘じゃなかったらしい。

すぐに銃声がシャッターの奥から小さく聞こえ、窓ガラスが割れる
音が激しくし始めた。

「やった・・・かなり早いお迎えだぞ。」

「ふう・・・間に合ってくれよ・・・」

俺と吉本は抜けない緊張の中、少しだけ安心して胸を撫で下ろす。武田は場所を移して、身を隠し始めた。俺達もそれに合わせて、本格的に身を隠す。

ガンガンと流れ弾がシャッターに当たっているらしく、外の戦闘は激しいらしい。

急にシャッターの1つが開き、光が差しこんだ。

心臓の音がピークに達する。足が動かず、3人でアイコンタクトを取る。武田だけが冷静で、アイツは口に人差し指を立て、俺達に指令を送った。

何も出来ずに、ゲーム機の裏でしゃがんで、自分の鼓動と、足音だけを聞いている。

訳のわからない言語と複数の足音がエスカレーターを下り、遠くから英語と銃声が迫ってくる。

理解できたことは、俺もテロリストも地下に追い詰められたということだ。

テロリストのボスらしき1人が、ゲーセン前のドアで部下に指令を送っているらしい、身振り手振りを見ている限りでは、エスカレーターを固めると。

光のさす所から英語が聞こえてくる。

「fire in the hole！」

その声と共に、爆発音が周囲の窓ガラスを吹き飛ばし、銃弾が地面に撃ち付けられてテロリスト達がパタパタと倒れ始めた。

成すすべなく、奴等は後ろに下がってくる。

気が狂いそうになった。

見つければ人質にされる。

恐怖しているうちに、米軍が銃を構えて発砲し、瞬く間にテロリス

トが減っていった。

ボスらしき男は、後ろに下がり、とうとう俺の目の前に来た。

「ギバツプ！ギバツプコリアンズ！」

米兵は大人数で銃を構え、手を上げている男は何か無いかと目を動かして周囲を確認した。

人影に目を付けたそいつは、俺と目が合った。

後ろでは、吉本が辛そうな顔をしている。

俺に手が伸びてくる。

緊張で、余りにもスローに見えた。

なぜだか判らない。

俺は伸びてきた手を払っていた。

そいつの顔が怒りに満ちたのがわかった。

スローモーションで眉間にググツとしわがより、腰元へ手が伸びて、拳銃を引き抜こうとしている。

もう一つ、目に浮かんだもの。

奴の背中に乗っているような黒い影。

突如、スローの世界が終わり、パンと高い銃声がする。

銃弾の先は天井で、突然のことだったので目が追いつかなかった。

奴は何故か、俺の右手の側に倒れて、丸くなっていた。

よく見たら、影は背中に乗っている。

米兵達が近寄ってくる。

「are you all right？」

そう聞こえた英語を聞き流して、俺はテロリストをよく見てみる。

背中丸いものは、立ち上がって、何か言った。

「yes. we are all right」
声でわかった。

武田だった。

落ち着いてよく見ると、武田の手にはナイフが握られていて、テロリストの首からは血が流れ出ている。

俺に気を取られている間に、死体の1つからナイフを拾い上げ、飛び掛って突き殺したらしい。

「hey boy, Do you know what you done.」(おい小僧。何をしたのかわかってるんだよな?)

米兵は、血だらけのナイフを持って佇む武田にいった。

「...I know. I just help my friend.」(・・・判つてます。俺は友達を助けただけだ。)
米兵は沈黙して、こっぴつた。

「Follow me boys」と。

身振り手振り、死体の銃を拾えといわれていた。

言われるがままに俺達は銃を拾い上げ、外へ出て行く。

何も考えていない俺達に、武田が意識を取り戻させてくれた。

「しっかりしろ！お前ら本当に戦うのか?!」

「「え?」」

久々に聞いた日本語だった気がする。

「さっきあいつ等が言ったのは、一緒に戦えって事だぞ!?!」

そういう武田の手にも、アサルトライフルが握られている。

私の腕にも、まるで抱きかかえられる赤子のように突撃銃が置いて

あつた。

重くて、銃口の上に銃剣がついてる変な銃だった。

「・・・なあ、古、お前はやる気なんだろう？」

吉本が武田に向かって言ったらしい。

「そうなのか?!」

「ああ、俺はこういうの待ち望んでたからな。」

武田の好戦的な性格ならわからないでも無かった。

「お前らしいな、実は俺もだ。」

吉本がなんで武田の友達か判った気がする。

「吉本?!」

2人はニヤニヤしながら銃を構えて、奪い取った弾倉を取り替える。2人の狂気ぶりに、俺は世界を疑った。

しかし、俺の手に握られている銃。

黒く輝くフォルムが、俺の目を、私の目を奪った。

「・・・俺も行く。」

なぜだか、やらなければならぬ使命感に狩られ、俺は2人の後を追った。

程なくして戦闘が始まる。

お互い物陰に身を隠しながら撃ち合う、ドラマでよく見る銃撃戦だ。ゲームのように突っ込んで動く敵なんていない。皆死にたく無いから前に出ないで戦っているのだろう。

米軍の動きを見よう見まねで戦うが、俺達は当然一番後ろだ。活躍できるわけでもない。

しかし、その中でも武田は随分と張り切っている。

動きだけで見たら、違和感が無いぐらいだ。

「Kid! you are very nice!」

「イエアアー!」

叫び声を上げて銃を乱射する武田。その始めてみる表情は狂気の顔で、兵士達もドン引きするくらいだった。どこで習ったか判らない銃捌き、リロード、物陰に隠れながらの素早い移動。銃撃戦を制して、店内に入ってみると、血溜まりが点々と出来ている。

7人ぐらい居たうちの3人は武田が撃ち殺したらしい。

兵士達は何処かへ向かっているようで、ふと外を見ると、日の丸をつけたヘリが3機ぐらい飛んできた。

瞬く間に自衛隊の人たちが俺等の所へ来てくれて、米軍の人たちを説得して連れ出してくれるみたいだった。

俺達3人は、芋虫のような輸送ヘリに乗せられて、安全になる。

はずだった。

乗り込んで、左右についている椅子に座って、安堵と共にため息をつく。

ヘリの後ろのハッチが閉まり始めた途端、武田が飛び出して、街へと奔走していった。

アイツのことだから、何かしたいことは判っていた。

「待てっ！武田！ゲームじゃねえんだぞ！」

俺はそういって、ハッチが閉まりきる前に武田の後を追って飛び出した。

自衛隊の人たちと、笑顔で話していた吉本は、間に合わなかったらしい。

後戻りは出来ない。

アイツを引き止めて、せめて安全な所で待機するほか無い。

学校では、武田の足は俺よりも遅かった、なのに追いつけない。階段を駆け上がった、曲がり角をグングン曲がって、俺の息は上がっていくのにアイツはガンガン走っていく。

ふとアイツの足が止まると、急に体を隠し始めた。

「ぜえ・・・武田・・・お前、馬鹿か？」

「静かに、アレをみる・・・」

「あ？」

俺は腰を起こして、歩道橋の向こうの店をみようとした。

しかし、手を無理矢理引っ張られて、歩道橋の壁に隠れさせられる。

「いつてーな・・・なにすんだよ。」

半ばアイツの掴めぬ意図にイラつきつつも、指し示された方向を見た。

俺は絶句した。

才崎の姿だ。

紅白の可愛らしいワンピースが目立ち、手を膝に置いて息を切らしているようだった。

「才崎?!」

「愛さんだ・・・」

どうやらアイツは紅白の色を見つけて、一般人と判断するや否や、その人を助けようとしたらしい。俺達も一般市民なのだ。

「大智、お前は愛さんを救助しろ、俺は囷になる。」

アイツは正気ではなかった。でも、こうなったら見過ごせない。

銃を持って戦えるのは、俺達だ。

「・・・判った。才崎を助けよう。」

歩道橋を全力で駆け出し、才崎と目が合った。

彼女は嬉しそうな顔をしたが、その顔はすぐに恐怖へと変わる。

突然武田が発砲したと思いきや、その銃口の先にはマスクを被った男達が才崎の方向へ走っていた。

武田の銃弾で窓ガラスが割れると、今度は俺達の後ろのビルのガラスが音を立てて崩れ始めた。

「大智！走れ！」

武田が才崎のいる窓ガラスを銃で殴り壊し、すぐさま店内へ滑り込む。

俺は彼女の手を取って、逃げようと言。

彼女は泣きそうな顔で俺と共に走り出し、一心不乱に歩道橋を降りてへりへと引き返す。

向かい側から、吉本と自衛隊の人たちが俺達へ駆けつけて、才崎を保護してくれた。

程なくして、銃声が上がから聞こえてくる。

「しまった！武田！」

俺は才崎の手を離して、武田の援護に行こうと銃を握り返した。間に合うかどうか、判らない。

「待て君！俺達が何とかする！へりに戻るんだ！」

「そうだ、もう俺達の役目は終わりだ！自衛隊に任せろ！」
吉本に抑えられ、へりの元へ俺達は連れて行かれた。

「蜂屋君・・・信じてた・・・」

「へ？」

「蜂屋君なら助けてくれるって・・・」
へりの中で、俺の肩に頭を乗せる才崎。

「私、君のこと好きだったの・・・」

こんな状況で、突然女性から好きと言われても感慨が沸かない。

これほどドラマチックな展開は無いのだろうか・・・俺は武田が心配でならなかった。

「そうか・・・」

放心状態で俺はそう答えた。

突然ハッチが開いて、辺りが明るくなる。

逆光の中、戻ってきたのは、武田の姿だった。

「武田！大丈夫か！」

「！」

「しっかりしろ！古！」

息を大きく吸い込んで、彼女は顔を青ざめた。

近寄ってみると、体中血だらけでブラウンのポロシャツがところどころ黒くなっている。

「なあに・・・腹には喰らってねえ・・・」

額から血を流して、左足のスネが血を流しながら折れている。

「大したヤツだ・・・たった一人で7人もやっちまうなんてよ・・・

」

感心したような様子で、隊員は武田の応急処置をはじめ、すぐにヘリコプターは病院へと飛んだ。

これが俺の初めての戦争だった。

韓国人がテロを起こした理由は、ネットウヨ（ネット上の右翼団体）が、在日韓国人を処刑したというニュースへの報復だったらしい。自衛隊や米軍の抵抗もあって、大宮はすぐに鎮圧された。

5月19日

「大智くん おべんと〜！」

2日前の出来事は秘密にしておきたかったが、悪事千里を走るとい
うのか、噂・・・というか実話は学校中に知れ渡った。

俺と才崎は恋人という関係になり、大学が近場だったので弁当を昼
に届けに来る始末。

「かぁ・・・お前がそんな漫画みたいなことするとは思わなかった。
・・・」

「大智君かつこよ！勇者来たこれ！」

「あぁ・・・」

取りあえず一通りのことを話したが、武田のことについて、皆は話
をしようとしなない。

とはいえ、学校内では猫を被ってアイツは大人しいし、恋人を助け
た俺のほうが目度は高いそうだ。

マスコミまでもが来て、授業が中断するほどの騒ぎ。

その所為で授業中にケータイをいじっているのがばれたが、メール
の内容では吉本も似たような境遇らしい。

苦笑いでテレビにアピールすると、その放送はその夜、全国に放送
され、死ぬほど恥ずかしかった。

5月24日

武田の見舞いに行くと、あいつの拾った銃はベッドの横に立てかけ
てあった。

お気に入り銃で、離したくないらしい。

偽装の帯銃許可証を貰う代わりに、絶対に弾を撃たないという誓い

を立てたらしい。

「武田！大丈夫か！」

「これで大丈夫なわけ無いだろう。」

ベッドに寝転がって、ピクリとも動かない。

撃たれた場所は3箇所。

左手の腕、右肩、右足のスネ。頭の傷はスネをうたれたときに転んで、ぶつけたという。

弾は全部抜けているが、銃弾の威力でスネと左腕の骨が折れているらしく、傷口もまだ完全には塞がってない。

「しかし、銃って凄いな……」

「何言ってるんだよ……コンクリ貫通して骨折れないわけ無いだろう。あゝあ……」

彼はなにやらそっぽを向いてしまった。

「なんだよ、見舞いにきてやったのに……」

「……正直言ってお前がウザい」

「はあ、何でだし。またリア充の話かよ。」

俺はまたアイツの皮肉めいた冗談かと思って、笑いながらそういった。しかしアイツの顔は、今までよりもずっと真面目で……

「俺あな……愛さんが好きだったんだよ。」

顔を伺っている内に、相手の口から真相が出てきた。

確かにアイツは才崎がくると、急によそよそしくなる。エロゲの話を聞かれた時も、随分焦っていた。

「それが何だ、銃弾ぶち込まれる覚悟で助けたつてのによ……」
好きな相手を取られて嫉妬しているのか。

いや、自然なはずだ。俺は彼女を連れ出しただけで、本当に愛さんを助けたのは武田に他ならない。

「だ……でもよ。俺に言われたって何謝ればいいんだよ！」

思わず俺は叫んでいた。こいつが才崎のことを好きだなんて、微塵

も思っでなかつた。

「黙つてくれてりゃいいんだ・・・悪いな・・・」

そういつて体を起こし、右腕を、痛そうに顔を歪ませながら、置いてある銃を手に取つた。

「う・・・なんで謝るんだよ！」

「いや、もういいんだ。愛さんがお前を好きなら、それ以上でも何でもない。俺は気に入る人をまた探すだけ・・・そうだろ？」

物寂しげな顔をして、アイツは銃を撫でる。

AK109 有名なAK47の小径化した、AK74の発展型。

日本では帯銃許可はおろか、外国でも民間人には到底持てない銃だ。

「俺は別に才崎のことは何でも・・・」

俺にとつては、余り面識の無い、ただの幼馴染だつた。

「お前が良くても彼女がダメだろう。中途半端な自己犠牲は返つて御節介だぞ。」

漆のような塗料が、木製の肩当に太陽の光を乱反射させた。まるで俺に向かつて『何時でも撃てる』と言わんばかりに・・・

ふと武田が口を開いた。

「・・・テレビ」

「え？」

「・・・いや、なんでもねえ。注目浴びるのは血の無い奴が一番だ。」

銃を抱きしめて、独り言のようにボソボソ呟いた。

異様な雰囲気を漂わせていたが、アイツは涙目だつた気がする。

「なんだか悪いが・・・邪魔したな。」

傷も癒えてないから、俺は早々に立ち去ろうとした。

「ああ。気つけるよ。」

「・・・すまん。」

返答を待たずに、俺は病室を出た。

嫌な気分だった。

まるで俺がアイツから何もかも奪った気がしてならなかった。

その夜。

帰りがけに、才崎が無理矢理俺を引っ張って、彼女の家押し込められた。

家族の方が、俺を暖かく迎えてくれて、結婚の話を持ちかけてきた俺の両親もその中にいて、随分と俺の顔を見てはニヤついている。

「うちの大智が本当にこんな偉いことするなんて、流石うちの息子よね。大智！」

目が合う度に、右腕に力が入った。

ニヤついた口元を見るたびに、昔のことが思い浮かぶ。

（果たして、俺が殴られていたのは俺の所為だったのか・・・）

急に、俺の右手の小指が暖かくなる。

『大智君・・・大丈夫・・・』

小声で彼女は俺に耳打ちした。昔体にアザを作っていたのを察してくれたみたいだった。

そんな彼女の顔を見ると、思い出すことは一つだ。

言うまでもなく、武田の顔。銃を抱えて、涙目の・・・傷だらけで悲惨なアイツの泣き顔だった。

「・・・結婚は・・・しない！」

突然俺はそんなことを口にしていた。
皆、驚いて空いた口がふさがらない。彼女もまた、同じだった。
これ以上、武田に追い討ちをかけるような真似はしたくない。そう
思っただけで発言した。

「大智！才崎さんに失礼だろ！」
父が俺に平手を食らわそうと、手を振り上げた。無情な手なのだろ
うか、振り下ろされる手は、勢いを増す。

恐怖が再び俺の記憶を辿った。

瞳孔が開く。鼓動が聞こえる。神経が波打って、覚えのある痛みが
全身に広がった。

バシン！

叩かれた頬は、ジンジンと痛み、まるで俺の顔が歪んだような錯覚
に陥った。

「ちよつと・・・お父さん・・・！」
母親も空気が読めぬわけでは無い。驚きに包まれている才崎家をど
うにかしようとフォローを入れる。

(痛い・・・痛い・・・頬が、背中が、肩が、腕が・・・痛い)

呆然とする俺の意識には、周りの時間なんて止まっていたのかも知
れない。

蘇る記憶。自然と覚えた痛みの反射。殴られた後に残る

『疑問』

その疑問という感情が、何なのか？場の空気と、武田の涙目が教えてくれた気がする。

『理不尽』と。

いつの間にか足を一步踏み出し。

知らず知らずの間に、拳を握り。

体が捻じれ。

俺の右手が座ってるみんなの顔に影を作り。

鈍い感触がした。

悲鳴。

皿の割れる音。

低く足に響く振動。

目の前に映る、恐怖した母親の面。

体から離れる、愛の体温。

右拳に溢れる、いっぱいの振動と痛み。

赤くなった右手は軽くて、まるで何かを手放したみたいに。

・・・

気がついたら、両親が血だらけで俺の前で懇願していた。

俺の右手や膝には生暖かい感触の血がいっぱいについている。

声なんか聞こえない。
悲鳴と、甲高い耳鳴りと、聞き飽きた啜り泣きが、部屋の壁から聞こえて、自然と俺の体が動いた。

突然、後ろからしがみ付かれ、地面にたたきつけられる。

部屋の声は消え、中年の男の声がした。

「君！ちよつと来なさい！」

青色の服。警官だった。

「この馬鹿息子っ！」

父親の膝が、抑えられた俺の顔にめり込んだ。
反撃する余地もなく、俺は警察へ連衡された。

5月25日

留置場で俺は警察から尋問を受けていた。

「君は、両親に何かされていたの？」

女性の若手の警官で、なにやら馴れ馴れしい笑顔で俺の顔を手で拭いた。

「いえ・・・家には遅く帰ってくるので何も・・・」

「ふうん。じゃあ、中学生の時は成績どのくらいだった？」

「普通です・・・平均ちよつと上で・・・」

俺は話をはぐらかそうとした。面倒ごとになるのは勘弁だ。殴られていたなんて答えたくは・・・

「もう面倒ね。虐待を受けていたんでしょう？」

意に反してザックリと結論を言ってしまう婦人警官。

「別に、俺の親はそんなこと・・・」

「あゝあゝ．．．もうね。こつこつ優しい子は留置場に入れたくないわ。これ見て。」

机に出されたメモ書き。
中学校の時の担任の名前や、クラスメイトの名前。そして愛のコメントがあつた。

『どこかしら、体に傷がある。体育では怪我をするような奴ではない』

そんなことばかりが書かれていた。

「失礼します。巡查．．．」

別の刑事が何か報告しに来たらしい。

その報告を受けて、婦人警官は立ち上がって言った。

「まさか拘束されてるのが被害者なんてね．．．明日！君の両親を児童虐待の経歴で告発します！」

とはいえ、それも、もう過去の話だ。出来るわけがない。

「はあ．．．もう時効だと思えますけど．．．」

「君の顔のアザ。それが証拠よ。目撃者も大勢いるし、君の恋人さんもそれを望んでるわ。」

5月26日

「これより、第1審、蜂屋両親への容疑について掛かりたいと思います。」

裁判が始まった。世間を騒がせた俺が、今度はすぐに裁判へ。マスコミはそれを嗅ぎ付けて傍聴席がいっぱいだ。

「冒頭弁論ですが、彼は小く中学生の頃、両親に虐待されていたという疑いがあります。」

体育の授業では運動神経が高く、柔軟な体を持っていて保健室には

一度も行かなかつた健康な子です。

その子が、毎日にアザを作つて登校していると言うクラスメイトの発言。そして恋人からの証言で、告発に至ります。」

「よろしい。今回の事件について、才崎愛さん。証言を。」

「はい。」

燐とした表情で彼女は証言台へ躍り出る。

「先日の夜、私は彼を捕まえて、自分の家でパーティを開こうと家族で決めました。」

それで、私の両親は彼の家族を呼び、私は彼を連れてきました。」
淡々と言ひ放つ愛。その顔は真剣で、無情のようにも見えた。

「以前から私は、彼の両親に対して、虐待をしているのではないかと、不審を抱いていました。」

彼と親との仲を取り戻すために、両親は企画したのだと思います。
宴会が始まつて、彼に異変はすぐ訪れました。

彼の両親が、彼を褒め、大きな笑い声を上げた途端、彼は拳を握つて、唇を震わせ、瞳孔が開きました。

私には判りました。彼は親の道具ではないと自分で思っていたのです。」

「異議有り！裁判官！これでは告発される立場が逆では無いですか！」

相手の弁護士が、甲高い声で異議を申し立てた。

「・・・異議は認めません。先ずは証言を聞きましょう。」

「彼は両親を殴つて、蹴つて、暴力の限りを尽しました。」

何発殴つたのか判りませんが、少なくとも素手で人を何発も殴り続ければ、拳にも痛みがくるでしょう。」

ですが、彼は無表情のまま両親に暴行を加え続けました。

もちろん、私も彼を止めようと思いました。」

ですが、まるで私達は居ないかのように動いて、一息ついて拳を見るたびに、何やら寂しげな顔をしていました。通りかかった警察が家に押し入って、彼を止めると、彼の父親は『この馬鹿息子』といって彼に膝蹴りを食らわしたんです。証言は以上です。」

最後の膝蹴りの部分で、客席は大きくざわめいた。

「静粛に。古田弁護士。異議には納得できましたか。」

「出来ません。まず、暴行を加えたことについて、人情や義理で告訴されるべきではありません。」

「異議有り。古田弁護。アンタは親子喧嘩で告訴すんのかい。」

「両親の顔を見てください。これでどちらが被害者か、明白ではないですか。」

「なら、さつさと終わらせよう。蜂屋大智君。」

俺はただ聞いてるだけで良いかと思っていたが、そうではなかったらしい。

持ちかけられた話は『証言』

果たして俺にそんなことが出来るのだろうか。

「はい……えっと。虐待やDVといえるのかは、私にも判断しかねます。」

殴られていたのは確か何ですが、教育の一環で、何かあるのはこの家庭も一緒だと思うんです。」

そういうと、2人の弁護士はやけに追及してくる。

何が、どんな風だったのか。それを説明しろと。

「小学生の後半に入って、友達と遊んでいるんですが。昔の話とはいえ、人の家に無断で入ったり、人の家の物を壊したりしました。バテて怒られるのは当然だと今まで思っていました。胸倉をつかまれたり、往復ビンタされたり、押されて壁に叩きつけられたりしまし

た。

中学生の期末テストでは、5位以内に入れなければ家を追い出されました。

3日間外を放浪して、近所の人に連れ戻されると、両親は何も言わずに今までの生活に戻って、私も登校するようになりました。」

発言が終わると、相手側の弁護士がキャンキャンと子犬のような声で吼え始めた。

明らかにこれは立場が逆転していると。奴はずっとそう主張し続けた。

「なあ、古田弁護。あんた、なんともおもわねえのかい。3日も小学生の息子が外をうろついて、心配しないのか？」

「近所の人が連れてきたといっているでは無いですか！ご近所さんに頼み込んでまで探してもらってたんですよ！」

突然、口を挟んだのは愛だった。

「いえ、言いふらしたのは私です。彼の両親は何も心配はしませんでした。」

「なにを馬鹿な！小娘！でっちあげるんじゃないぞ！」

親父が随分と激昂している。

「でっち上げてなどありません。私は当時から、あなた方の息子さんが好きでした。恋人を心配するのは当然です。」

冷たく言い放つ彼女は、恥ずかしさなど全く見えない。むしろ誇らしげに、公の場で俺のことが好きだ。といっている。

愛さんの迫力に、両親は鳥肌を立てた。

「古田弁護さんよ、その2人は何も言わずに生活を続けたんだとよ。」

「それが何ですか！今回の暴行とは何の関係も……」

「いいか皆さん！親子喧嘩は！既に！彼が中学生の頃から始まっていたんだ！」

あんたたち、自分の息子の胸倉を掴むか？！3日も家を追い出すか

！？小学生は、まだヤンチャで人の家に入るような時期だ。でも、ごめんなさい以外に解決法がありませんか?!」

客席に向かって猛アピールする荒田弁護。

「留置場の彼の発言によれば！高校へ入学してから、休日でも常に帰宅するのは7時以降だそうだ。」

大学に入学して今までは、マスコミの報道の時以外、日のある間は家に居ないそうだ！

彼は自分でバイト先を決め、大学を決め、頑張っているそうではないか。

察するに、家に帰りたくないとか私には思えない！」

この発言が、客席や裁判官に響いたらしい。

第一審は俺の勝ちで、両親への罰則は差ほど無いとはいえ、世間の両親に対する批判が多く、あいつ等のプライドはズタズタになったらしい。

帰宅途中。愛と一緒に夜デートに行こうといった。

その夜の彼女の柔らかい舌の感触は忘れられない。

5月28日

色々あったが、最近は普通の生活に戻りつつある。

大学でアレコレと聞かれたが、それを除けばいつも通りの生活だ。メールで話したことによれば、吉本の奴は消防士になったらしい。俺はのんびり大学生活を続けよう。

5月31日

毎日の生活で何も起こらなくなってきた。
だが、あのテロの時のように、命が危険に晒されるのは、もう勘弁してもらいたい。

6月15日

近頃何も無い上にテストに忙しいから日記の暇なんて無いな。
こんな穴だらけの日記があるのだろうか。

・・・

6月20日

テロから早くも1月が経った。
重傷だった武田の見舞いに行こうと、近所の花屋で花束を買いに出かけた。

「六百円になります。」
30代ぐらいの花屋の主人がヤケにニコニコとされていて、その表情がちよっと気になっていると、遠くから赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。

「おーよしよし、いい子いい子。」
遠くから奥さんの声が聞こえてくると、主人は苦笑いしながら俺に謝って店の奥へ入っていった。
程なくして主人が戻ってくる。

「お子さん生まれましたか。おめでとう御座います。」
なにやら俺は無意識のうちにそんなことを口走っていた。

「ええ、有難う御座います。ところでその花、恋人さんですか？」

「いえ、友人の見舞いに行こ・・・」
会話を遮るように、赤ん坊の泣き声が店内に響いた。

「元気な子ですね。男の子ですか？」

奥さんが子供を抱えて出てきた。

「いえ、女の子です。あゝよしよし。」

父親好きのようで、主人が近寄るとすぐに泣き止んだ。

「すいませんねえ。交代しますんで、少々お待ちを……」

「どうして友里恵は私が抱くとダメなのかしらねえ……」

奥さんが勘定を済ませて、ため息をつきながら言った。

「はは、元気な女の子だ。子育て頑張ってくださいね。」

「有難う御座います。貴方も体には気をつけて。」

お互いお辞儀を済ませると、俺は武田の居る病院へと向かった。

病院へ行き、見舞いの許可を貰うと、俺は武田の病室へと再び赴いた。

アイツの退院は奇しくも誕生日の25日らしい。

しかし、ドアを開けると、誰も居なかった。

「あれ……いねえ？」

部屋に入ってみると、アイツの銃は立てかけてあって、何処かへ出かけている様子だった。

（おいおい、盗まれたらどうすんだよ。）

そう思つて、俺は武田の病室にとどまった。

5分ぐらいすると、ドアが突然開き、武田が入ってきた。

「お、武田。歩けるようになったのか。」

「ああ、大智。わざわざ悪いな。」

武田の回復力は早く、殆ど普通に歩いていた。

愛のことについては、もう吹っ切れたような顔をして、ベッドにどっかりと寝転がった。

「聞いたぜ、DVで裁判喰らったんだろ？」

「う、やっぱ普通に耳に入るか。」

「っはは。たりめーだ、隠せるわけねーだろ、あんなの。」

太ももをパンパンと叩いて、武田は大笑いした。

「おめえも大変だよな。テロの次は裁判。まるで戦犯者だ。」

「ん〜・・・引つかかる言い方だけど、反論しねえよ。」

「おーっほっほ、やっぱ戦争が引き金かい。」

おちよくっているのか、声色がヤケに高く、腹立たしい。

「あ〜もう・・・で？お前はどなん？」

そういつて、俺は無理矢理話しを切り替えた。

「ひひひ、どうしようもこうしようもねえぜ。テロの件で、俺には保険金もガツポガツポだし、自衛隊から恩賞なんてきやがった。」

「ほー、まあそりゃそうだわな・・・まともに戦ってたのお前だけだし・・・」

「ん〜、ま！それ以上でもそれ以下でもねーぜ。所詮一般市民だからな。」

「確かにな。」

その後、どうでもいいことで話して、時間を潰した俺達だった。

帰宅すると、家具と両親が消えていた。

置手紙が書かれていて、なにやらつたない文章で謝罪の文が書かれていた。

内容は、夜逃げだった。ローンも払いきれてないらしく、家を捨てることになったらしい。

世話になった祖父のアパートの一室が貰えるらしく、そこに住めと。

「はあ・・・一人身か。」

「一人じゃないよ！私がいるでしょ！」

後ろから愛の声がすると、抱きつかれた。

「家でるんでしょ？私も一緒にいいかな？」

「な、愛・・・急にそんなこと・・・」

「うっん、君の両親からうちの家族に相談受けて、うちの両親がそう押してくれたの。」

「なんだよ・・・俺の知らない間にそんなこときめねーでくれよな・・・」
「いいじゃんいいじゃん！家賃に困らず2人で同棲できるんだよ！」
半ば無理矢理だったが、彼女の言うことに従うことが、一番の最善策だった。

荷物をまとめて、引越しの業者を呼び、20年間世話になった家の最後の夜は愛と過ごした。

親は怖かったが、こうもなると寂しいものがある。

最近慌しいな。千変万化ってこういうことなのだろう。

6月21日

朝から引越しの業者が来て、トラックで積荷を運ぶことになった。さっさと手伝って、俺達も、目的地である秩父へ電車に乗っていくことに。

一緒に歩く愛は上機嫌で、俺と暮らすのが楽しみとってくれた。

此処まで愛されてると、離婚とか浮気とかの話はしたくない。

未来のことが心配だが、それでもやるしかないとは思えた。

電車に乗り、およそ1時間弱。

祖父の立てた、立派なアパートに着くと、俺達の部屋は2階の一番奥で、山の景色が一望できる綺麗なところだった。

業者の人がきて、また残っていた家具を運ぶ作業だ。

終わったのは3時頃で、ひと段落着いて2人で昼寝することになった。

6時ごろ目が覚め、彼女はまだ涎を垂らして寝ていた。

ケータイが光っていて、メールを確認してみる。

件名：Re

from：吉本信弘

本文：武田が病室から失踪

したらしいんだけど、

お前なんか知らない

か？

』

メールを返信して、吉本からまた返ってきた。

荷物も消えていて、まるで引越しみたいだ。と

大事に持っていた銃も消えているらしい。

武田に電話しても、メールしても繋がらない。

「どういつこつた……。」

「ん？どうしたの？」

「あ……。いや、なんでも。」

武田のことを、愛には話したくない。

謎に満ちたまま、日が暮れて、その日は終わった。

7月1日

「ふう、やっと日記をつけれるな」

薄暗くなった空を、蛍光灯の電気が照らして窓に自分の姿が映った。日にちの経ちすぎた日記を見返すと、此処のところ忙しくて武田のことなんかすっかり忘れてしまっていた。

「ん……。病室の脱走にしちゃオカシイな……。身寄りでもあったのか？」

吉本にも、警察にも連絡は無い。俺は不意に吉本にメールしてみた。返ってきたのは、吉本も忘れていたらしいということ。消防士にスカウトされたとはいえ、新米だからキツイらしい。

とはいえ、俺も親無き身で大学生活は続けられない。さっさと就職先を見つけないとやばそうだ。

愛の両親や、アパートの住人が一緒に手伝ってくれているのが何よりだ。社会って知っておくと便利なものだ。

そういったことを日記につづって行くと、愛が玄関を開けて部屋に入ってきた。

「ん？おかえり。どしたの？」

「・・・してたの。」

複雑な表情をして、彼女は抱きついてきた。

「妊娠・・・してた。」

「え・・・」

「7週間・・・だつて。」

およそ2ヶ月前のことなど余り覚えていないが、5月ごろなのはハッキリした。

それと同時に、何をすればいいのか、俺の頭は困惑しかなかった。

20歳というのは、まだいいかもしれない。

だが、俺達はまだ職にも付いていなくて、子供なんか到底養えたものじゃなかった。

愛はまだ大学に行っていて、このままでは高卒するしか道はない。

困惑して黙っている俺に彼女が耳打ちするように言った。

「産みたい・・・」

よく考えてみれば、正しい決断なのだろう。しかし俺には到底信じられなかった。

俺みたいな何も無い、凡才の男のどこに一生をゆだねる意義があると言っのか。

「大学は・・・？」

「やめる。」

「子育ては？」

「やるっ！やってみせる！」

強く抱きしめる腕は正直苦しかったが、彼女の本気ぶりには勝てず、意志尊重するほか無い。

中絶など、苦しい上に得るものなど何も無い。女性は皆口々にそう

いうのも聞いていたし、何より、もう後に下がれない気がしてならない。

出産は、大体の見込みで来年の2月頃・・・

「判った・・・俺も就職先を探す。」

「・・・いいの？」

反発されると彼女は思っていたのだろう。意外そうな顔をしていた。

「ハア・・・正直、最近疲れたけど・・・こういうのもいいかな。」

俺は苦笑いしながら彼女の頭を撫でる。これで結婚が決まったようなものだ。

早く就職先を見つけないと・・・

7月2日

就職先に関しても、子育てを愛一人に任せるのは心もとない気もする。

命が関わるような仕事や、勤務時間に難があるのは避けたい。

大学のロビーでそんなことを考えながら、就活の資料を覗いていた。こんなご時世だ。そんな都合のいい職業なんざあるわけが無い。

ため息をつきながら資料を元に戻すと、肩を2回叩かれた。

「ねえ、君。就職先を探してるんだって？」

「ええ、子供が出来る予定になってしまいましたね・・・」

「それは・・・大変ですね。大学を辞めるのですか？」

「当たり前です。どこか安定している職ってなんか無いですかね？」

振り返って見ると、大学には似使われない風貌をした中年の男だった。

「ええっと・・・その、言う気が削がれてしまったんですがね。大

智君」

「削がれた？」

「その、私は自衛隊のパシリですよ。簡単に言えばスカウトということなんです……」

自衛隊からスカウトがくるのはわからないでもない。こんな赤字のご時世の上に、戦争が始まりそんな時期だ。

「家族が出来てしまふとなると……やはりこういうスカウトは良くないんでしょうね……。」

「……そうですね。妻も反対すると思います。」

「大変でしょうけど、頑張ってください。それで……」
お辞儀をして帰ろうとする兵士の肩を咄嗟に掴んでいた。

「待った……スカウトの件、考えさせてくれませんか？」

俺はふと頭によぎったことを実践しようとした。国相手に交渉するという馬鹿な話だが。

「本気にしないほうがいいと思いますよ。それが奥さんの為ですし……」

「いや、条件付なら入隊しても。とても簡単な条件なんです。」

俺が提示した条件は『国外へ出ないこと』

正直甘い考えだが、日本内の戦争であれば、彼女を守ることに、働くことにも繋がる。

「判りました……その程度なら検討してみますが、奥さんを大事にしてください。それでは……」

男は去っていったが、自衛隊なんて最終手段でしかない。

ガッシャアアアーン！

「ん？事故か？」

すぐ外の駐車場でガラスが割れる音がした。衝突音だし車だろう。

野次馬で見に行くと、やはり車が衝突していた。なにやらドライバー同士で喧嘩している。

ヤンキー同士の喧嘩なのか、殴り合いまで始めた。野次馬は黙ってみてるだけだ。

止めようと前にでたが、一人俺より先に抜きん出た人がいた。さっきの男だ。

「おいやめる！みつともねえ！」

「んだテメエ！野次馬はすつこんでろ！」

手を振り上げたヤンキーだったが、死角から金的を貰ってその場にもだえだした。

もう一人にも有無を言わず金的をかます男。

「おいおい、両成敗にしちややりすぎだろう・・・」

「ああ、君か、見苦しいところを見せたね。」

彼はさっさと警察に電話して、後を任せるようにその場を去ることにした。

「お名前は？」

「山本だ。こないだ鹿児島から転勤で埼玉まで来たんだ。」

よく見ると筋肉が凄い。さすが正規の軍人だ。

「へえ・・・そりや大変つすね。」

「イニシエってゲームの知り合いもこの地域に住んでるとか聞いてね。同じ大学生でしょ？このゲーム知らん？」

携帯で見せた画像は、高校の時はやったオンラインゲームだった。

ハンドルネームなんて何でもありのはずだし、古って言葉は好きな人はいるんだろう・・・。

「・・・いえ、人違いでしょう。」

「そうか。ま、合えないのが普通かな。」

山本さんはタバコを取り出して凄い勢いで吸い込んだ。

「そつだ、山本さん、自衛隊の前はなんか就きたい職ってありましたか？」

「ああ、車ん仕事やってたな。機械好きか？」

「ええ・・・まあパソコンとかは好きですけど・・・」

話を聞くと、車の整備士をやっていたらしい。自衛隊でもメカニックだそつだ。

「さて、そろそろ時間だから退散させてもらうべ。」

「あ、すみません。お時間とってしまつて。」

「気にすんねえ。じゃ、縁があつたらまたな。」

彼はそういつてほとぼりの冷めた駐車場に戻つていった。正門から爆音のようなエンジン音を立てて、後に残つたのは静寂だった。

「自動車か・・・面白そうではあるな。」

その後少し資格について調べてみたが、航空整備とかしてみたい気がした。

家に帰ると、愛が家事をしていた。

退学届けをだして、友達さんがいっぱい来てお祝いだの、デキ婚だのからかわれていたらしい。

彼女も笑つてはいるが、目の色は不安そうだった。

「なあ・・・愛？」

「あ、大智。どうかしたの？」

「いや・・・なんでもない。それより調子は悪くないか？」

「うん、大丈夫！すっかり産んで見せるよ！」

判つてるとはいえ、気の早い彼女の顔に少し苦笑いしてしまった。すると突然彼女の顔色が変わり、近寄つてきた。

「ゴメンね・・・私のせいで・・・」

「・・・いや。誰でも家庭を持てばこうなるよ。ちよつと早かつただけさ。」

なぜだか判らないが、山本さんの声が頭にこだまする。

「ありがと・・・」

彼女はまだ不安そうな顔だが、人生そこまで苦しくはない、そして楽でもない。

<奥さんを大事にしてください・・・>

(大丈夫・・・俺も彼女も・・・)

そう心に言い聞かせて、2人で床に就いた。

7月5日

さて、今日はどうするか。

自動車というキーワードを買っても、車をいじれるわけでもない。いきなりに整備士といっても無理がある。

考えても見ればまだ振り出しなのだ。

「さつさと就職先見つけないとな・・・」

ベッドから起き上がって時計を見てみる。午前10時。

時計の横においてあるノートパソコンに目がいった。

「オフィスか・・・エクセルぐらい余裕綽々だけど・・・」

リストラだらけのこんな社会でサラリーマンというのも厳しい話だ。

「せめて安定したものでいいからなあ。農業・・・公務・・・」

俺が大学で通っていたのは文学部か・・・新聞記者・・・いや、出版社か。

ベッドの上で佇んでいると、隣の愛が起きてしまった。

「あふ・・・おはよう。」

「あー、おはよう。気分は？」

「良好・・・御休み。」

彼女は日光を遮ろうと枕を頭に重ねて顔を隠した。

「あ！おい！寝なおすな！」

「やゝ！もう！アタシの枕！ふぬおおお！」

気の抜ける声で枕を取られまいと彼女は必死になって丸くなる。

こんな幸せな生活が続くのだろうか・・・心配でならない。

.....

平穏だ。実に平穏。

父が兵士になるなどは全く思えぬ、日記だった。
そして、母が幾度も話していた、例の事件の日が出てきた。

8月6日。

日本領土戦争・・・

・・・・・・

8月5日。

就職先が何とか見つかった。
俺も吉本と一緒に、例の一軒をあてにした職につくことになった。
警備員、デスクワークもあるし、実際に警備もさせられる。首にさえならなければ給料もいいし、いい職に就けたと思う。
愛も結構な喜びっぷりだったし、頑張っていこう。

8月6日。

初任になって、かなり忙しかった。
というか、平社員にさせる内容じゃないものまで回ってきて、処理に大変で仕方なかった。
頑張りが認められたのはいいが、あの仕事量は半端じゃない、慣れるまで時間が掛かりそうだ。

運命の日 8月9日

いつもの通りに、通勤先へスクーターで行くときだった。パンと空を切り裂く音。

……銃撃音。

まさか、また銃声を聞くなんてことになるとは。いや、有り得なくは無い話だが、絶対に聞きたくなかった。

一般人の一人が倒れると、周囲の人間が騒ぎ出す。スクーターを止めて、遮蔽物に身を隠した。

音の聞こえたほうを探す。

「……いた！」

朝なのに、雨戸を閉め切った窓から、黒く細い銃口が覗いていた。判断は2つ、逃げるか、立ち向かうか。今倒れた人の下へ向かえば、狙撃される。かといって逃げるのも心象を失いかねない。

「……あの家へ突入するか。その前に警察へ連絡。」
携帯をだして、警察へ電話し、すぐに駆けつけると言った後、人ごみを縫って銃口の見えた家の玄関へ忍び寄った。

警備会社から渡されたスタンガンを持って、庭先に静かに入る。

(……武田だったらどうする。)

居間では、異変なく中年の女性がテレビを見ていた。

(どういうことだ？この主人が発砲したのか？)
となると、テロではなく無差別殺人。どちらにせよ何とかしなければ。

外の騒ぎで、テレビを見ていた女が立ち上がって居間を出て行った。洗濯物を干していた途中だったのか、窓が開いている。そこから侵入し、一気に階段を駆け上がった。

「此処の部屋か……。」

強くしつこくノックするようにドアを叩く。

「なんだよ、今忙しいんだ！」

怒声を上げて、ドアを開けた瞬間、首元にスタンガンを押し当ててスイッチを入れる。

男は白目を向いて、倒れた。ドアが広がると、ライフルが窓に立てかけてある。

「証拠確定だな。」

パトカーの音がし始めると、玄関で話していた奥さんが警察に取り押さえられ、警官が上がってくる。

「動くな！」

言われたままに、手を上げてホールドアップする。

「俺が通報した才崎だ。」

「証拠は！」

「手帳だ。ほら。」

警備会社に貰った免許証やらを見せ、スタンガンを証拠品として渡す。

「よくやった、と言いたところだが、まだはつきりしていない。とにかく外へでてくれ。」

「判りました。」

素直にでていって、携帯を出し、仕事場へ連絡する。

「あゝ・・・すみません、早速ですけど遅刻します。」

ええ?! 早速過ぎじゃない?!

先輩のO.Lが驚いたような声をだした。

「すぐニュースになると思いますよ。もっとも、仕事場に復帰できるのはしばらく先かと・・・」

ニュース? 事故でも起こしたの?

説明が面倒くさい・・・

「殺人事件です。とりあえず犯人は捕縛しました。」

え? え? あ、ちよっと待ってて・・・

彼女の声が遠くなる。

・・・はい、はい。判りました。もしもし? 聞こえてる?

「あいよ。」

連絡があつたわ、君は無事なのね？

「ええ、いたつて無事です。」

そう、じゃあ聴取が終わつたら仕事場に着てね。本当にトラブルメーカーなんだから・・・

「すみません。じゃ。」

携帯をしまうと、パトカーに寄せられて県警へ行くことになった。

正直またかよと思う。

事情聴取は1時間ほどで終わった。

それほど言うことも多くなかつたわけだ、通りかかつたら窓から銃声、ライフルを見て、その家へ侵入、そして捕縛。

嘘の欠片も無い、ありのままを話すと、指紋を取られた後仕事場へ行った。

「ああ、才崎。」

部長の眉間に皺がよつている。

「すみません、なんかもう色々・・・」

「ま、遅れた分やつてくれればいいさ。できなかつたらアレだけど、期待してるぞ。」

「あ、有難う御座います・・・」

褒められているんだか、よく判らないがとにかく頑張ることにした。今日は初日と違って仕事量が少ない。

あれはミスというか、いびりだったのか。どちらにせよ、今日は時間内に終わった。

「お疲れ、才崎君。」

「お疲れ様です。先が上がりますね。」

「遅れてきて先に上がるなんて凄いね。」

「新米の仕事量なんてたかが知れてるだけですよ。では。」

空っぽのデスクを後にし、外へ出る。きつぱり仕事終了時間にまた

警察官。再びパトカーに乗せられ、県警へ行くと、指紋から無罪が確定され、スタンガンを返してもらった。現行犯逮捕として捕縛するらしく、裁判にはでなくていい。その知らせを受けると、安心できた。

(このスタンガンは家宝にすっかな・・・)

一人で冗談を思いながら家へ帰る。

「ただいま。」

「おかえり・・・またテレビにでてるよ。」

「ああもういい加減にしてくれよ！」

マスコミの過剰な態度に飽きてきた。さっさと給料日になってくれ。

「とりあえず、ご飯できてるよ。一緒に食べよ。」

「よっし、じゃあ、さっさと食って寝るか！」

カレーな晩飯だった。・・・正直そこまで美味しく無いが、不味くは無い。

「ごちそうさま。風呂はいるわ。」

「はい。」

湯船の温かいお湯の気持ちよさが堪らない。

「はぁ・・・なんだか最近色々あるなあ。」

ご時世とはいえ、アクシデントだらけだ。いったいこの先どうなるんだろう。

『キヤアアアア！』

外から誰かの悲鳴が聞こえた。換気扇からなので愛では無いが、近い。

風呂から上がって外を眺めてみる。女性が倒れていた。

側によって見ると、頭から血が滴っている。話しかけても反応は無い、血が出ている原因は刃物だ。

「・・・辻きりか？」

携帯を取り出して、警察に連絡する。本当・・・何回お世話になるんだか。

「もしもし？警察ですか？」
「はいこちら埼玉県・・・」

バキン！

突然携帯が折れた。

「なんで?! 一体なんだ?」

周囲を見渡していると、後ろから黒い服を着た男が音も無く現れる。

「ウゴクナ」

「!!」

ゆっくり両手を挙げる。携帯を折ったのはこいつだ。

背中にゴリゴリと押し付けられる感触・・・拳銃だ。

「・・・なにが目的だ」

「キミニハドウデモイイ ダガ コイツハシヌベキ。」

片言の日本語。外人のようだ。

女性は即死しているが、意図がつかめない。

「なんのために・・・!!」

服が擦れる音が増えた。囲まれている・・・。

「キミニハドウデモイイ。タダタダ、ダマツテイレバイイハナシダ

ガ・・・ソウダナ、テツダツテモラウカ」

銃を押し付けられ、死体を抱え上げるといわれた。

車に積み込み、少し離れた森へ埋めさせられた。

「コレデ、キミモ ハンザイシヤ。キミハ ダマツテイレバ ナニ

モシナイ、スグニ、ワカル。」

すぐに男達と別れ、家に戻った。

・・・

翌日。

官房長官の娘が行方不明になった。

朝のテレビを見て悔やまずにいられない。

(こういうことかよ・・・！)

しかし話すわけにもいかず、ただ黙って仕事へいくことになった。

「才崎君・・・きてくれ。」

「部長・・・。」

来て早々呼び出される。

「君は仕事熱心で、すぐにでも昇進できるほどいい仕事振りだった。協調性も中々ある。」

黙ることしかできない。政府の人間に、不慮とは言え関わった。あの外人共が根回したに違いない。

「本当に惜しいことだが・・・避けられないこともある。わかってるんだろっ？」

黙って頷く以外ない。クビだ。

「僅かだが、退職金はだす。せめてものな。」

黙って会社を追い出され、家へ帰ることになった。

ドアを開ける手が震える。

「お帰り・・・。」

彼女が横から来た。

「どうしたの・・・？」

首になったと言うほか無いが、理由を言うのに無理がある。

「・・・話があるんだ。」

そういつて中へ入り、彼女に事情を説明した。

「・・・本当にその人、長官の娘さんだったのかな？」

今となっては疑わしい感じもするが、クビになった以上どうすることもできない。

「ま、気にしないで！就職する前に戻っただけじゃない！リーマンもやだし、もう一回見直そうよ！」

彼女の励ましに涙がでた。堪え切れなかった。

「すまん・・・有難う・・・本当に・・・！」
「ううん、いいの。一緒に頑張ろうよ。ね？」
(君と一緒に本当に良かった・・・)

武田、お前が彼女を好きだったのはこういうことだったんだな・・・。

・・・

その翌日、8月10日

・・・

落ち込んでいられないのはわかるが、気が進まない。朝食を取った後、テーブルから離れられないでいた。彼女は優しく俺にこういつてくれる。

「最近色々なことがあったから、今日ぐらい休んだら？」
ノーと答えても、彼女は引き止める。俺の心はあっさりと折れて、休むことになった。

不意にインターホンがなる。愛は皿を洗っていたので俺がでることにした。

ドアを開けるや否や、厳つい男3人がこっちをみていた。

「な・・・なんででしょうか？」

男達は顔をあわせて英語で話し出した。

『こいつです。』

『ふむ。』

ヒゲの男が帽子を取って自分の顔をまじまじと見つめた。

「ワタシノ コエヲ オボエテイルカ？」

聞き覚えのある片言。聞いた途端に怒りが湧いて来た。

「お前が・・・！」

「センジツハスマン。ダガ オチツケ、ハナシガアル。エイゴハシヤベレルカ？」

懐に男は手を入れた。銃を持っているらしい。

「苦手教科だ、それがどうした！」

『ジョン、頼む。』

後ろの男が前にでて、日本語を話し始めた。

「事情あつて、色々と説明したきことがある。失礼だが、上がつてもよろしいか。危害は絶対に加えぬと約束しよう。」

後ろから愛の声が聞こえる。

「どうしたのー？」

「・・・ちよつとお客さんだ。上がせてもいいか？」

「はいよー」

3人組は礼儀正しく靴を脱ぎ、上着を脱いで上がってきた。男達を見て、愛は動揺で呂律が回らなくなる。

ソファーに3人が座り、先日の官房長官の娘の話を聞かされた。

「まず、聞いて欲しい。知つての通り、君をクビに陥れたのは私達だ。本当にすまない。」

「ちよつと待つて！貴方達は一体どこから・・・」

「イギリスの陸軍SASナリ。」

武将マニアなのは変な日本語でわかったが、おかげで話しやすい。

「イギリス？」

「そう、この国の日中関係についてはご存知だろう。官房長官の件について。」

「だから暗殺を・・・？」

「そう。君に見つかったのは偶然だったが・・・これは数奇なる運命とお見受けする。夫婦にとっては非常に忌々しきことかも知れぬ。」

俺と愛は首をかしげた。そのとき、とんでもない単語を耳にする。

「タケダ イニシエ」

「！！！」

俺たちは机に身を乗り出した。

「どうしてアイツが！」

「彼はイギリスで生きている。この間一緒に戦っていたよ。素晴らしい男だった。」

「武田君が・・・戦ってる?!」

愛の瞳孔が開いた。後で聞いた話だが、彼女が秘密で武田の病室に行った事もきいた。

「彼は自分から望んで兵士となった。君達の事はもう望んで無いだろう。女もいる。」

「それと官房長官の娘が関係あるのか?!」

「声大きい・・・もちろんある。」

彼の説明によれば、日本の外交が中国側に寄りつつあるというらしい。日米安保や平和条約を破棄して、東側に移るつもりだと。

当然国の決めることは自由だが、武田から聞いた世論や、独裁的な黙秘政治を叩き潰すための行為だという。

武田と一緒に戦ったのは、7月末のギリシアとイタリアの暴動。G

PKの存在は、この時から大きく話題となっていた。

「急にスケールがでかくなった・・・」

GPK：グローバルピースキーパーズ 国際平和維持団は国連認可でありながらの傭兵組織。

加盟国の兵士が必要で、ニュースの裏で殺人鬼として軍部に噂されていた武田が、記念すべき日本の初任に選ばれたという話らしい。

これも、日本の評判を気にして表舞台では公表されていないことだった。

「でも、俺にどうしろっというんです？」

武田の話を持ちかけられて、信じずにはいられない。しかし会社をクビにされた今、返答は嫌な予感しかしなかった。

「・・・兵役。」

彼は愛を見て余り言いたくはなさそうな顔だった。

妻を持って、武田にも黙って見限られ、そしてアイツからは俺と吉本は誘うなと言われていたのだ。

「無理強いはしない。だけど、暗殺の件については絶対に黙っておいて貰いたい。」

気が遠くなつて机に突っ伏した。ただただ、困惑が頭に回る

武田が戦っている。武田が戦っている、と自分に言い聞かせるように。

もちろん、アイツが幸せになれと無言で残して言ったのはわかる。

だが、罪悪感だけが俺の中に残っていた。

愛の腹には、俺たちの子供がいる。だが、仕事を見つけないければ生活はできない。

「・・・やります。」

なぜこう答えたのかは判らなかった。だが、何か使命感めいたものに駆られたのは確か。

「大智?!」

「・・・正気かね。」

3人組はざわついた。俺の心もざわついた。

「無理はしなくてもいい。」

「・・・知り合いに自衛隊がいます。そこから入ります。」

山本さんに聞けば何かわかるだろう。そして、俺にとって一番重要なことは、親友のことだけだった。

(武田に何とか伝えたい。愛のことを。そして謝罪を。)

愛と結婚してから、武田の言葉がいつも頭に響いていた。

『リア充、リア充死ね』

リア充とは、ネットの上ではリアル（現実）が充実している人物の事を指す。

初恋を奪い、人生を奪い。俺は確かに、ぬくぬくと育った存在なのかも知れない。

いや、虐待を受けてたとはいえ、最後には勝訴した。そして今がある。俺はプラスの存在だ。

帳尻あわせを付ける時だ。

3人組は帰っていった。愛が心配そうな顔で俺を見つめる。

「本当に兵隊になっちゃうの・・・？」

「武田に借りを返したいんだ・・・アイツは人生を捨ててる・・・。」

俺たち2人だつて、武田の想いが判らないわけじゃない。

「・・・判った。無理はしないでね！絶対だよ！」

「うん・・・！」

~~~~~

「本当に自衛隊に加入するんだな？」

山本さんは呆れたように言った。

「はい。」

「全く・・・だが悪いが面倒は見れないぞ。明後日ぐらいにはイギリスへ行かなきゃなんだ。」

「イギリスへ?! 武田ですか!」

「な・・・なんだよ突然。まあそんなとこだ、風の噂によりゃ、武

田君が大活躍してるって聞いたが。」

「俺も！俺も行かせてください！」

「ダメに決まってるだろ。まだ入ってすらいないんだから。それに、此処で待つてりゃ会えるさ。」

「本当ですか！」

「本当さ、GPKは自分の国の紛争を仲裁する為に作られた組織だからな。戦場で会いたいなら、自衛隊で待つてればいい。」

しかし、今となってはそれは日本で戦争が始まるという事を意味していた。

11月半ば。

再び、埼玉県でテロが起きる。

いや、厳密に言えば暴動だが、テロリストが観光客を惑わして日本にデモを起させたものだった。

それは、自衛隊の新米として、俺は銃を抱えて訓練に没頭していた時だった・・・。

暴動鎮圧に実体験として狩り出され、防弾盾を持つてただただ市民を押し返す。

体が重たく、人が重たい。俺は武田ほど戦うセンスはないみたいだ。5時間後に暴動は終わった。根源は山本さんとジョン達が何とかしてくれたらしい。

彼らが何をしたかどうかは定かではないが・・・。

・・・

訓練中の日記は後で書こう。現在、2013年3月24日。

俺は愛の出産の知らせを聞いて、自衛隊をはや引きした。

慌てて、助産室のドアを開く。そこには、ヘソの尾をつけたままの赤ん坊の姿があった。

「愛！」

「あ・・・あなた・・・」

「すまん！遅れた！」

「いいの・・・はあ・・・見て、生まれたの。」

小さな赤子が、助産士の手の上に乗っていた。

お湯につけて血を流し、へその緒を切り取って、俺たちに渡される。

「元気な男の子ですよ！おめでとう！」

元気に産声を上げて、愛の体にすがりついた。彼女はそのまま疲労で寝てしまい、赤ん坊もしばらくすると寝付いてしまった。

電話が鳴った。

「もしもし。」

「よう、お父さんおめでとう！」

「吉本か、有難う。」

「自衛隊に入ったんだって？お前も変わったな。」

「ああ、放っておいてくれよ。」

「ふっふくん？聞いて驚け。実は俺も結婚したんだ。」

「マジか！おめでとう！相手はどんななんだ？」

「それがなあ、自衛隊なんだよ。」

「・・・はあ？」

こんなことってあるのだろうか？まさか3人揃って兵隊とは。

「ま、自衛隊といっても、俺は空自の消化班でダラダラしてるよ。」

「ほー、じゃ、何時か会うかもな。」

「そうだな。お互い頑張ろうぜ、じゃあな！」

通話が切れた。愛の嬉しそうな寝顔を見て手に力が入る。

（俺が、皆を守る。それが自衛隊の役目！）

前向きに戦おう。危険とかそういうのじゃない。これは俺が選んだ

道なんだ。

・  
・  
・

4月7日

勤務中、突然警報が鳴った。そう。これは戦争の始まりだった。

## 序章 第1話（後書き）

書き溜めがありますが、4部構成なので完結まで「超」時間が掛かります。

## 第2話 『始まりの。』

突如臨時ニュースが入り、アナウンサーが言った。

「中国による宣戦布告が渡され、自衛隊は有事関連法を進める見込みですが、内閣が・・・」

画面は砂嵐となった。

直ちに総員防護に当れ、有事関連法を適用する。クソ内閣は気にするな！国民は俺達にある！

突拍子も無く始まった戦争は、新潟から長野県にかけてだった。

奇しくも俺の任せられた防御の場所。自宅のすぐ側で、それも寝室の窓から見える場所だった。

「・・・・・・・・。」

何も言えず、自分の部屋の窓を見つめて銃を握っていた。

「どうした？」

同僚の秋田が俺に話しかけてきた。

「ああ、いや・・・」

「なんだ？言ってみろって。」

肩を組んで、耳打ちされる。小声で俺は答えた。

「あそこのアパート、俺の家なんだよ。」

「だっはっは！そりゃ全力で守らんな！」

「冗談言つなよ・・・そろそろ来ると思っんだが。」

携帯電話を開くと、メールが届いた。

『守ってもらっちゃおっかな』

すぐに俺の車に乗った愛がやってきた。

「はっい、お弁当！」

仲間達の視線が集まった。

「愛、どこか逃げる身よりはないのか？」

「甲府に友達がいるからそこに行くよ。うちの財産壊さないでね！」

彼女はそれだけいって、公道を下りていった。しばらくはあえないだろう俺の子供を乗せて。

「・・・奥さん？」

「ああ・・・子供もいる。絶対に死ねない。」

「か〜・・・熱いなお前は。」

「いや、それよりも一旗上げて見せるか！金なくてやばいんだこれが！」

俺達は笑って銃を握っていた。

秋田友則24歳、才崎大智20歳。お互い就職難で自衛隊に素っ飛ばされた人生の負け組みだ。

いや、誰かの為に、自分が犠牲にならなければならない。それは俺が十分に知っていることだ。

同じように、敗北して戦争に身を投じた者がいる。そいつは今、一騎当千の戦士として世界を駆け巡っているらしい。

見張りは来る日も来る日も同じことだ。この秩父の山奥は中々攻め入れない場所で、何も無い見張りが続く。

ラジオの情報だけが、戦況を大きく物語っていた。

現在、新潟、中部地方に上陸した中国艦隊は航空自衛隊と米軍により、熾烈な戦場となっております。

・・・

9月2日現在、長野県に謎のテロが発生しました。中国側のスパイの行動として、自衛隊が・・・

・・・

9月5日。

・・・配置に着け。トンネルの奥から何か来る。エンジン音だ。

無線の連絡で、俺たちはトランプを投げ捨て、銃を握った。

残暑の蝉の声が鳴り響き、低く唸るエンジン音がすぐ目の前のトンネルから近づいてくる。



トンネルの横に陣取って、銃を構えて待ち伏せた。

クリアリングをした敵が、戦車と共に体を出す。向けられた銃口には殺気が籠っていた。

気がつけば、交戦許可を取る前に引き金を引いて、本物の戦争は幕を開ける。

「戦車だ！破壊しろ！」

「こちら65哨戒隊！韓国の戦車がトンネルを突破してきた！」

激しい銃撃戦が始まった。周りに立っている兵士は全て倒したが、戦車は傷一つ無く動き回って、機銃をこちらに向けて放ってくる。

「戦車が相手じゃどうしようもない！」

こちら37哨戒隊だ。そちらの姿が確認できる。どうにかして戦車を止められないか？

秋田の隣にいた兵士が機銃で打ち抜かれた。叫び声を意に介さず、隊長は話を続ける。

「待つてる！機銃でキャタピラを撃つ！誰かひきつけてくれ！」  
隊長が置いてある固定砲座に走った。秋田が前に出て戦車の予備タンクを撃ちぬき、注意をひきつける。

「オラオラ！どうしたヘンテコ！」

秋田は砲塔をグルグル回させ、俺にアイコンタクトした。

戦車との隙間にカメラがある。小銃を伏せたまま連射し、破壊には至らずともカメラに当たった。一瞬戦車の動きが止まる。

「ドオオオリアアアアア！」

唸り声を上げながら、恐持ての隊長が機銃を振り回した。キャタピラのギアが1つ外れると、戦車が傾いて動かなくなる。

スモークを頼む。

戦車の足元に発煙筒を投げ、回る砲塔から一目散に俺達は逃げた。

目標確認。発射！

ドンと遠くから小さな発射音と光った砲弾が打ち上げられた。

機銃でこちらを狙う戦車の真上に、野戦砲の砲弾が降りかかる。

「他の戦車は確認できない。」

こちらは47哨戒隊。敵を確認した。東京へ奇襲をかけるつもりらしいが、そうはいかん！

「こちらに敵は確認できない！」  
敵は広く散開して進撃してる模様！突破されればそこから再編成される！死守しろ！

遠くで銃撃が始まった。あまりに遠すぎて、見ていることしかできない。

トンネルの上から、草木を掻き分ける音がした。

「・・・応戦しろ。」

隊長が静かに指を指す。姿はない。恐らくスナイパーだ。

「大智、そこに隠れてろ。」

秋田に指示され、すぐ右手の木の根元にしゃがみこむ。間もなく銃撃が始まった。

隊長達が前に出て、隠れているスナイパーを倒していく。

「右に2人。」

ガサガサと動く影を見つけて、無線で位置を知らせた。こうさせるための秋田の策略だろう。

了解。

辺りを見渡していると、自分の木と正反対の方向にスナイパーが仲間を狙っていた。

黙って頭に向けて銃を構え、引き金を引く。ズボツツという音と共に、スナイパーは倒れた。

・・・クリアだ。スナイパーライフルを奪っておけ。後々役に立つ。

それからしばらくは敵はやってこなかった。

侵入してきた戦車達は、補給者が無く、特攻を強いられていたか、どこかの駐屯地を奪おうとしていたに違いない。

未だに新潟では上陸戦での激しい攻防が行われているらしく、俺達も狩り出されることになる。

9月15日。

「今度は新潟か。」

トラックに揺られて、俺達は話し合っていた。

「激しい戦闘か・・・」

「GPKが動けない以上、自衛隊と米軍で何とかするしかない。ロシアが動かないことを祈るしか、な。」

大滝隊長は俺の独り言に答えた。彼もまた、悲惨な景色に変わっていく日本を見て不安を覚えている。

「なに、守る以外やることはないっしょ。」

「・・・そうだな。秋田の言うとおりだ。」

隊長は銃の安全装置を抜くと、トラックの外にでた。爽やかな空気が鼻を通り抜けて、湿った夜風が首筋をなでる。

キイイーン・・・

遠くで戦闘機の飛ぶ音がする。

「友軍か？」

「ああ、米軍だよ。多分ライトニング辺りじゃないか？」

戦闘機の音がする方角は北。赤錆のような光が空に上がっていた。

「酷い事になってるんだな・・・」

風向きが変わった。喉かな夜風に混じって爆音が空気を揺らしている。

「あそこで戦ってる連中は時期にこっちに退却してくる。目安は後2日程だ。」

「ってことは最前線になるって事か・・・」

「よし、L16を準備しろ。」

「おいつす。」

トラックの中から大砲を引き出し、歩いて遠くの見える場所までクソ重たい鉄の塊を運ぶ。

小さな野戦砲だが、威力は絶大。4キロ先にターゲットした敵に砲弾を正確に叩き落す兵器だ。

「今のうちに休んでおけ。明朝には忙しくなる。」

その言葉で俺は一足先に寝かせてもらった。

・・・

深夜になって目が覚めた。朝3時はまだ暗いが、静か過ぎて逆に起きてしまったらしい。

奥で仲間が見張りをしながら話しているのは目で見えた。だが、音が遮断されたように聞こえてこない。

(嵐の前の静けさって奴か・・・)

双眼鏡を手に取り、赤外線探知をオンにした。夜襲の気配は無いが、仲間の気配も無い。

一瞬びゅつと風が吹いた。その後に仲間の声が聞こえるようになる。

「聞いたか？前線部隊は壊滅したらしいぜ？」

「まじかよ・・・」

「ああ、もう増援が来てるらしい。戦力は心配ないが・・・生きて帰れるかは不安だな。」

直後、戦車の唸り声が聞こえてキャタピラの音が止まった。

(催して来たな・・・)

木陰で用を足して、持ち場へ再び戻った。西の空が白んできている。

15分後、合図もしていないのに皆が目覚めた。

「・・・着た！」

山道の道路を外れて傾斜の浅い道のようになった坂に、赤外線ゴーグルに赤い四角の物体が並んでいた。

「よし、迫撃砲設定しろ。65分隊は前から3番目だ！」

双眼鏡の中央を3番目の戦車にあわせ、スイッチを押した。

こちら56分隊。その他の部隊も設定完了だ。

「よし、撃てえ！」

迫撃砲がボンボンと順序良く火を噴いた。光の弾が空に楕円を描く。防衛線、いくぜえ！

次々に放たれる迫撃砲。そして浮き上がったヘリコプターから対地ミサイルの強襲が始まった。

「迫撃砲を歩兵が狙ってくるはずだ！大智、スナイパーチームと一緒に観測を続ける！」

「了解すす！」

山道に伏せるスナイパー達の下へ走り、双眼鏡を構えた。

「来たぞ、横から回ってくる。」

戦車の集団から離れて、2又になるように歩兵が展開してきた。

「もうちよつと引き寄せろ。おい君！観測手は一人でいい！」

状況を見れば複数のスナイパーに観測手が2人。暗殺でなければマントーマンで居る必要は無い。

「そうだな、じゃあ援護するから散り散りになったところを叩いてくれ！」

「俺一人ですか?!」

「大丈夫。あそこの機関銃だ。」

指を指すと、木陰に軽機関銃が立てかけてあった。木陰、というよりは枝をつけた偽装だったが。

「よし、撃て！走れ！」

「やるしかないってか！」

ライフルの銃声と共に坂を下った。敵兵は坂上からの射撃に対応しようとして木陰に右肩を寄せた。

良く見える。真正面から機関銃を弾が切れるまで並を画くように撃ち続けた。

いいぞ！抑えれてる！

歩兵戦を制した為、戦車が接近してくるまではこちらが優位だ。

米軍はまだか！

ハリアーの編隊が今着てる！もうちよつとだ！

才崎！今のうちに対空機銃を始末しにいっぞ！歩兵が上ってきたルートを辿れ！

下の方で大滝隊長が走っていった。下り坂を加速しながら猛スピードで俺は駆け抜ける。

山と山の間には戦車が3台、その後ろにゲパルトに似た対空機銃が2台。

「使え！お前が前を撃て！」

科学特捜隊が使いそうな拳銃を渡された。説明などなく、ゲパルトに向けて撃つ。

軽い反動と共に、透明なビニールの様な物が対空機銃に張り付いた。隊長が何かのスイッチを押す。

目標了解。GGM発射。

スナイパーチームの後ろから何か打ち上げられた。

「下がれ！伏せろ！」

木の後ろに隠れ、銃を構えて伏せた。ミサイルが真上から墜落してくる。

「対空機銃とSAMを撃破！」

よし、ハリアーがきたぞー！

遠くからエンジン音が近づいてくる。目の前の戦車の上で、爆弾が分裂。

降りかかる爆弾が周囲を火の海へと変えた。

「奥から装甲車が来るぞ！」

機銃を放ちながら装甲車が2台顔を見せた。双眼鏡を覗くと、赤い点がたくさん並んでいる。

「そ、装甲輸送車が8台！」

「なんつー兵員だ・・・降りられる前に潰せ！」

迫撃砲まで戻っている暇は無い。しかしロケットランチャーの様な破壊できるものも無かった。

「隠れる！隠れる！いいか、出てくるところを集中砲火しろ！」

「スモークは駄目なんすか？！」

「こんな山中じゃ仲間の視界も塞いじまう！護衛戦はなるべく整理して戦え！」

木陰に隠れて装甲車を見送った。敵はハリアーに気を取られてそのまま素通りしていく。

装甲車が分岐した。4機は正面、2機はスナイパーチームの方へ荒々しく坂を上り、その間に2機が止まってハッチを空けた。

「撃てエエエエ！」

ライフルを取り出して、正面から降りたばかりの兵士をフルオートで狙い打つ。

倒れた兵士が10何人。隠れた前の車両がハッチを空けたまま動き、2門の機関銃がこちらを向いた。

ボンボンと遠くで音がすると、隊長が後ろを向いて飛び伏せた。その動作につられて、俺達は頭を下げる。

ロケットランチャーが5発降り注いだ。ハッチから出てきた兵士は何処かへ消滅し、止まっていた装甲車は炎上。動いてこちらを狙っていた装甲車は、衝撃で横転していた。

「横転した装甲車を強襲すつぞ！」

取り囲む様に関きつばなしの装甲車を覗いた。焦げた肉の匂いと窓から出る血に塗れた兵士の手。

「ハッチの中にロケットランチャーがある、できるだけ持ち出せ！奪うように65分隊は機関銃とロケットランチャーを反転した装甲車から引っこ抜いた。」

迫撃砲が壊された！

慌てるな！下がって対戦車地雷に引つ掛ける！

押し込まれた仲間は劣勢ムードだった。

スナイパーが全滅！ハリアーが1機落とされた！

俺達が居るのは坂の下。奪ったロケットランチャーは戻るには装備が重たすぎた。

「・・・これ韓国軍じゃないぞ?!」

落ちているアサルトライフルは、中国の91式突撃銃。

「韓国は北朝鮮とやりあってるからな！中国の侵攻に摩り替わってる！」

「くそ、数が多すぎないか?!」

在日批判から始まった戦争と銘打たれているが、出ている国が中国であるから尖閣諸島問題で敵対する中国が代理戦争を掛けてきたのだ。

戦車の数はこちらの設置した迫撃砲の数とほぼ同等の10機。その上に対空機銃、さらに奥には再び装甲輸送車両が構えていた。

敵戦闘機接近!!

「嘘だろ?!」

ハリアーが空で弧を描いた。ミサイルが追いかけて、さらにその後をフランカーが追跡を始めた。

「なんで増援がハリアーだけなんだ。戦力差がありすぎる！」

隊長が無線に怒鳴りつけた。赤外線の実眼鏡には、戦車砲を打ち上げながら接近してくる戦車が500m先に見える。

米軍より入電！この一帯が敵の本軍のルートだったらしい！大部隊がこっちにくるぞ！

なんでこんな小さい道に本軍が来るんだよ!?

知るか！敵に聞け！

戦車は接近してくる。大滝隊長は、手を揚げて重たい装備を持った



まま後ろへと下がった。

RPG7がクソ重たい。更にロケット弾を3つも抱え、ライフル2つと標準装備。重量は20キロを超えていた。

坂の土が柔らかく、ブーツで抉れて雲の上を歩いているようだった。木の根の階段を上るように、皆重装備で必死になって道路へと上る。

「ぜえ・・・うし・・・見えたぞ！」

自陣を荒らす装甲車が見えた。しかしその逆、敵陣側の道路の奥から更に車が走ってきた。

「機関銃だ！」

仲間の一人が奪った機関銃のバイポッドを開いて地面に立てた。車の上から機関銃を構える敵を打ち抜くと、車が止まってドアが開く。

「目え潰れええ！」

秋田が閃光手榴弾を投げた。視界を失った車が追突して坂下へと落ちていく。

「よし！しとめた！」

機関銃を撃っていた仲間が弾を撃ちつくすと、敵が全滅。俺達は車を奪い、ロケット弾を車内に放り投げた。

「才崎！銃座に着け！俺が運転する！」

隊長が運転席に座ると、秋田が助手席に座ってドアを半開きのまま外の敵と交戦を始めた。

機関銃を構えて、装甲車のタイヤへと何発も打ち込む。ガゴンと音が鳴ると、左後ろのタイヤが1つ外れて装甲車が横転した。

「1匹獲った！」

「よっしゃ！このまま引き返す！銃座から離れる！」

坂を荒々しく上る。流れ弾が銃座の機関銃を壊し、血に濡れたバツクミラーの奥へと消えていった。

「おおおっしゃあああああ！」

坂を上りきると、再び銃座に着く。仲間が防衛線より1歩下がって、有刺鉄線の奥から歩兵と戦闘していた。

「ウオラオラオラオラ！」

有刺鉄線の手前には対戦車地雷がある。その手前で戦う歩兵達を、隊長は車で轢いて回った。

「装甲車！RPGをぶち込め！」

秋田からRPGを手渡されると、銃座の上で構えた。

荒っぽい運転の所為で安定しない。腰が銃座に食い込み、左足が浮いて放り出されそうになった。

「しっかりしろ！タイミング！」

秋田が俺の足を掴み、動かない様に固定してくれた。

スコープの中に照準があった。引き金を引くと、意外と小さな反動と共にロケットランチャーが煙を出しながら進んでいく。

しゃがんで銃撃を避けながら、再び弾をいれ直す。装甲車の煙は吹いてはいるが、機銃がまだ動いていた。

いいぞ！後1発！

激励の言葉に一瞬心が躍った。世界が止まったと同時に引き金を引く。

爆発と共に装甲車の上面が高く舞い上がった。

65分隊が装甲車を2機破壊！すっげえ！

歩兵が撤退していく。既に他の2機は対戦車地雷にかかって黒煙を上げていた。

対戦車地雷の無い場所から本陣へ戻り、血の着いた窓ガラスを銃底で叩き割る。

相手も再編成してくるみたいだな。

もう時期ラプターとイーグルの編隊が飛んでくる。反攻に転ずるチャンスかもしれない。進撃準備だ。

誰かが居なければならぬ前線の兵士。それが今の自分だった。

既に構えていた防衛線の1/3が消失している。先発隊でドッコイの戦力だったはずなのに、1/3で済んだのが奇跡に近かった。

のんびり戦況を眺めている場合でもなかった。轟音と共に攻撃機が対戦車地雷を破壊し、たちどころに土の柱が舞い上がる。

「どうやって進撃なんかすんだよ、これで！」

秋田が仲間の方を向いて叫んだ。

増援が来るまで持ちこたえるしか・・・

「バカヤロウ逃げるぞ！ミサイルも無いのに勝てるか！」

奪った装甲車が勝手に動き、それに伴って仲間は一齐に逃げ始めた。

戦車だああああ！

砲撃と共に戦車が坂を上ってくる。大滝隊長は装甲車を必死に走らせた。

山道を抜けて街まで撤退しても、後ろの砲撃音はこちらへ近寄り、上空を攻撃機が通り抜ける。

「やばい！掴まれ！」

投下型爆弾が目の前で爆発した。衝撃で装甲車は横転し、俺達は街の中へ放り出された。

「立て才崎！逃げ逃げ！死ぬぞ！」

秋田が俺の手を取り、力強く引つ張って屋内へと走って逃げ込む。装甲車に積んでいたロケット弾が大きく爆発し、破片が家のガラスを撒き散らした。

上空を戦闘機が飛びまわり、戦車が砲塔を回しながら炎上した装甲車を踏み潰した。

「なんてこった・・・」

「仲間は全滅したのか・・・!?」

こちら31分隊・・・今ガソリンスタンドの側の雑木林の中だ。

誰か聞こえないか？

「こちら65分隊、ガソリンスタンドが目視できる。」

隠れた民家の2階から、10メートルほど東にガソリンスタンドが見えた。

空にも陸にも鉄の塊がひしめき、逃げ場など無いに等しい。

大滝隊長は悩んだ。誰がどう考えても絶望しかない。

「時期に歩兵も来る。どうする・・・」

「米軍が来ないんじゃないや話にならねえ。待つか動くか・・・」

副隊長の島根が始めて口を開いた。無口な彼が発言するのは平常ではない。饒舌な秋田でさえ口をつむいでいた。

こちら31普通科分た・・・うわぁ！みつか・・・  
遠くで戦車砲の発砲音が聞こえた。

「やられたか・・・」

「此処に居るだけじゃ死ぬ。それは変わらない。」

大滝隊長が外を覗いた。

「逃げれるだけの武器がありやあな。」

道路を並んで走る戦車の列。途中で降りて戦う歩兵の姿は見えない。

「此処は制圧する気ないのか？」

「いや、結局のところ制圧されるだろう。」

轟音と共に空から煙が紐を画く。

FOXthree FOXthree!

英語と共に爆発音、続いて撃墜された飛行機の残骸が周囲の家に降り注いだ

米軍が来たああああ！ヒヤアアアツホオオウ！

ラプターの編隊が真上を通り抜け、機銃の光が激しく回りで立ち始める。

「チャンスだ！今のうちです！」

「逃げるか対空機銃を壊すか・・・！」

大滝隊長が焦りで窓枠を握りつぶす。

逃げなければいずれ殺される。しかし逆に攪乱できるチャンスでもある。

島根が2階の窓から先に飛び出た。

「両方！壊しながら逃げる！俺達の力で戦況を覆せると思うな！」

「オーケー！」

次々に道路へ飛び出た。仲間空爆が地上に穴を開け、飛び跳ねた小石が耳を裂く。

しかし考えてる暇は無い。敵を見つけたら即座に射殺。

「正面に対空機銃！」

パチンコの駐車場から対空装甲車が打上げていた。

こちら24小隊！65分隊を視認！

窓から小さく手を振るう24小隊。その裏口から突入を試みる敵の兵士達。

「やれ！」

秋田と俺で銃を撃ち放つ。死体に執拗に銃撃し、遠くから安否を確かめた。

規約違反も関係ない。こちらら命が掛かっている！

「死体がセムテックスを持ってる！」

「よし、才崎！対空機銃に仕掛ける！」

命令と共に秋田が俺に爆弾を投げ渡した。粘土のような爆弾をグレネードに包み、ピンに紐を巻きつける。

上に夢中になっている対空機銃に近づき、グルグルと回る砲座の間に滑り入れた。

離れながら紐を引く。目の前には隊長がドアを開いて荒々しく手招きをし、中に飛び込んだ。

ドアが閉まったと同時に爆発がドアの金具を軋ませる。

「こちら24小隊！65分隊と合流！」

ドアを叩きあげると、底には黒く焦げて動かなくなった鉄の塊が座っていた。

This is U.S. Air Force エイワックス AWACS RO  
NIN. Do you copy? Commence at t  
ack in enemy forces .

こちら米空軍管制機「浪人」聞こえるか？敵への攻撃を開始する。

stray soldier or squadoms nee

d to regroup , destination  
point is highway intersection .  
When you get there , pin off the  
colored smoke grenade .  
はぐれた兵士、再編成が必要な部隊は集合地点が高速道路のインタ  
ーバルだ。到着次第、色の在る発煙筒を使い。  
管制官は重要な役割を持つ。散り散りになった部隊は白血球に壊さ  
れる雑菌の様な物だ。しかし、管制官に指示されて集められれば雑  
菌であつても大きな繁殖力を生む。

ラジャー！ウェアリス モスト ニアリー デストネイションポ  
インツ！？

That's ah . . . nearly in train l  
ine 線路沿いだ。

無線の声を聞いて、俺達は目を合わせた。

「これでも戦えるが、どうする？」

「足りないけど、だ」

「よし、行くぞ！」

線路の方へと俺らは走り出した。

24小隊は10人 65分隊は5人。あわせて15人。戦力という  
には少なすぎた。

民家の庭を突きぬけ、屋根と屋根の間ではミサイルが飛び交い、そ  
して道路に対地ミサイルの雨が降り注ぐ。

また増援だ！

ヘリコプターの大隊が対地ミサイルを撒き散らす。

「危ない！下がれ下がれ下がれえええ！」

「おいちよ . . . まで」

秋田が叫びながら戻ってきた。眼前には狙われた戦車が空に機銃を  
打ち返しながら民家の塀を捻り潰す。

反応が遅れた俺はその場に立ち尽くしてしまった。

ファイアー！ファイアー！

爆発の衝撃でガラスが割れ、吹き飛んだ砲塔が畳みの部屋の壁をぶち壊す。

木が倒れ掛かり、葉っぱだらけになってしまった。

「生きてるか？！」

「ああ！問題ない！」

幹は避けることができ、枝で顔を少し切ったぐらいで済んだ。

「そこらじゅうミサイルが飛んできやがる！俺達が出る幕なんてないんじゃないのか？！」

「やかましい！口より足を動かせペーパー！」

秋田が島根と口喧嘩をしながら、俺達は柵を蹴倒し、窓を割り、線路まで走った。

「見えたぞ！」

開けた線路にの下り側に、高速道路の高架橋があった。すぐ近くにインターバルも見える。緑色の煙が上がった。

再編成中のグループだ。無線を復旧。聞こえてる部隊は速やかに応答せよ。

「こちら24小隊及び65分隊！今こちらへ向かっている！線路のぼり側だ！」

・・・了解、視認した。それと後ろに戦闘ヘリだ。気をつける。

振り返ってみるとこちらを向いていないが、ヘリが横滑りしながら街を睨んでいた。

「振り返ってないでさっさとしろ！」

島根が怒鳴ると、秋田が戦闘ヘリに銃を構えた。

「バカ！なにしてんだ！」

「こんなに開けてるんだぞ！？逃げ切るなんて無理だ！才崎！協力してくれ！」

ヘリがこちらにゆっくり方向転換を始めた。緑色のスモークの場所へ向かおうと上昇もしている。

「わかった！」

「才崎！命令違反だぞ！」

「戦うなどは言われてません！」

狙撃銃を構えてヘリコプターにピントをあわせた。秋田の銃弾でヘリがこちらに気付き、ゆっくりと機軸をこちらへと向ける。

プロペラに撃ったが当たらない。レバーを引いて煙を吹いた薬莖を取り出す。

機銃を撃ってこない。どうやら弾切れらしい。

「くそつ、大智！なんとかしろ！してくれ！」

秋田の銃の弾も無くなり、リロードを始めた。

機軸を微調整してこちらにロケット弾を撃ち込むつもりらしい。

（照準が合った！）

引き金を引いて、反動と共にヘリコプターが視界から外れる。

ロケット弾の穴の中に銃弾が入り、ヘリコプターの右側が爆発した。

「やった？！やれたのか？！」

薬莖を捨て、背中に狙撃銃を戻した。

「やべえこっちに落ちてくるぞ！」

爆竹の様にロケットポッドの中の火薬が爆発し、前面が首の無い魚の様に消えた。落下した火の玉がこちらへ向かってくる。

兎に角走って走った。服が焼けそうなほど熱い温度を感じた瞬間、背中に何かがぶつかって地面に倒される。

「大丈夫か？！」

「なんとかな・・・」

重さはさほど無く、ヘルメットのおかげで大したことは無かった。

背中にぶつかってきたものは、ヘリの中で焼け死んだ兵士の上半身だった。真っ黒に焦げて、かつて人であった事ぐらいしか判別できない。



また65分隊がやったぞ！

無線で意識を取り戻した。逃げなければいけない。

「さ行くぞ！おいてかれる！」

「あ、ああ・・・」

「ボサボサすんな！」

俺は投げ捨てた死体を2度見した。

・・・

スモークの地点には50人程の自衛隊の生き残りが居た。

皆初の実戦で息を荒くして、中には足が震えて立てなくなっている者もいた。

「・・・戦えそうに無いな。」

大滝隊長がそういつても、眼下には容赦なく爆撃が落ちていく。

「俺達も本隊じゃない。微量にしか戦力にはならないだろうな。」

小隊長が言い残し、再編成を引率している兵士の下へと走っていった。

「秋田、お前は大丈夫なのか？」

「ちよつとな・・・流石に此処まで激しいとは思って無かったよ。」

彼の手は僅かに力んでいた。

「そうか・・・やっぱりそうだよな。」

「ああ。でも、お前は随分冷静じゃないか。」

「・・・友人が海外へ飛んだんだ。アイツのことだから、もつと激しい戦闘地域にいるに違いないさ。」

「どんな友達だよ・・・」

歩いて仲間の兵士達を見て回った。怪我をしている人物は少ない。

恐らく動けなくなった兵士は殆ど戦死しているのだろう。

「これが本物の戦争か・・・」

共に激しく訓練をしていた仲間の覇気が、見違える程萎えていた。

「それでも俺達は自衛隊だ。侵略戦争には抵抗しなきゃならない。」

「侵略じゃなけりゃいいのか？」

「侵略じゃなけりゃ、ミサイルが飛んできてるよ。もう滅亡しかないぞ。」

核ミサイルで焦土化してしまえば話は早い。だがそれでは環境も輸入も国政も滞り、戦争になるだけ意味が無い。

わざわざ兵士の命を掛けてまで戦争しに来るのは、自分の国を繁栄に導きたいからだ。

だが教科書を見るとおり、既に歴史はそれを許してはいない。植民地は独立し、平等や自由を提唱する時代になっていた。

「俺達が負けたら今度は世界大戦か？」

「だろうな。イギリスが出ればアメリカが出る。そうすればロシアが必ずでてくる。」

「なんにしても負けられないか・・・」

不意に爆撃が止んだ。戦場に天使が通ったかのように静けさが戻る。(こついつとき、アイツは何て言うんだらう?)

武田は平等な奴だ。平等だからこそ、年上だらうと年下だらうと女であろうと敬語を使わない。気に入らない相手には部活の顧問にも暴言を面々と吐くし、逆に年下であろうと興味のある子には優しい態度を取る。

(やっぱり侵略者には容赦ないのか?)

相手が先に拳を振るうなら、殴られてから必ずナイフを引き抜く。そんなイメージが頭にあった。

だが、なぜか今は武田の顔が思い出せない。

爆撃が完全に止んだ。戦闘機の排ガスが熱い風になって背中を押す。ヘリコプターで増援が送られてきた。屈強なアメリカ人達が降りて、

隊長達と敬礼を交わす。

なにやら早口の英語で作戦会議のようだ。いくら勉強したとはいえ会話になると聞き取れない。

「よし。俺達は後方支援に移る。一旦退却するぞ。」

「了解。ヒデエ目にあつたぜ・・・」

皆溜息を吐いてトラックに乗り込んだ。米軍の攻撃の熾烈さに煙がいたるところで濛々と立ち上がる。

自衛隊は元々前線に出てはいけない決まりがある。今までは米軍が来るまでの警戒態勢だったただけだ。

（代理戦争か・・・）

世界の国が理由を知っているとはいえ、戦争にルールはない。ルールが無いということは制約も例外も無い。

同じ様にロシアも出てきていいのである。

（他人のことは考えても仕方ないか、寝よう・・・）

アザだらけの体を休ませることにした。

### 第3話 脱獄

後方支援に移って早3日。山積みのトラックに弾薬や食糧に水を詰め込み、駐留している米軍の元を行き来するだけの作業。

俺はトラックの運転席、秋田は助手席で働いていた。

「はぁ・・・戦況報告はまだなのか？」

戦争はまだ続いている。もし戦線が本土に近づけば、それだけ俺達にも危険が近づく。

なにせ補給車だ。優先して狙われるのは間違いない。

「心配しすぎだぜ。味方は米軍だぞ？」

「じゃあお前は中国軍をバカにしすぎだ。確かに技術的に遅れているとはいえ、決して弱い軍隊って訳でもない。」

「そりゃなあ。」

「今奴らに襲われてみる。俺らだけで勝てるわけが無いんだ。」

世界は広い、そして戦争はゲームの様に陣地が限られているわけでもない。非戦闘区域に隠れた敵が高速道路を待ち伏せしていても何もオカシクはない話だ。

午後7時を回り、日が沈みかけてきている。米軍の場所に着いた後も、日が昇るまで待機は余儀なくされるだろう。

「あゝくそ・・・夜か・・・」

薄暗くなってきた、ライトをつけることにした。

命令とはいえ、よくねえな。秋田、ちゃんと索敵しとけよ！死にたくなけりゃあな！

「はいはい。わーってますって。」

赤外線双眼鏡を膝において秋田は外の景色を眺めた。

米軍は戦線を押し返し始めた。以前逃げ込んだパチンコ店も防衛線も、戦線から離れている。

「傭兵だつたらいくら貰えてんだろつな？」

装甲車3台にヘリ1台。それが俺達の隊の戦果だった。

「さあな。」

しかし傭兵ではなく公務員としての自衛官だ。左右されるのは昇進ぐらいしかない。

建物に太陽が隠れ、風が僅かにでてきた。

「仮設地まで後？」

無線を片手にハンドルを切る。目の前の護衛の装甲車がガタガタと揺れ、慎重にブレーキを踏まなければならぬ。

およそ2マイル。50分ぐらいだろうな。戦闘は落ち着いてるらしい。

「はあ・・・参ったな。」

「なんだよ才崎。落ち着いてるなら喜ぶべきだろ」

秋田が双眼鏡を覗きながら言う。

「どうだか。戦闘が起こってる方がどこで誰がドンパチやってるか  
わかり易いと思う。」

まあそれもあるな。何度も言うとおりに、強襲されるのは絶対に避けないといけねえ。

周囲に目を配りながら道路を進んでいく。仮設基地が見えてきた。

「ふう。なんとか着いたか。」

米軍が補給に慶びながら寄って来る。

「杞憂つて奴だぜ？第一なんで前線基地の後ろに敵がくんだよ。」

「まあ確かにそうだけどさ・・・」

トラックの積荷を流れ作業で渡していく。後ろへ渡す度に赤い空が目に入る。

（あの中に突っ込むのか・・・）

兵士達の中には不安そうな顔をしている者も多かった。彼らの眼は、突っ込むのではなく突っ込まされている事を訴えていた。

積荷を全て渡すと、遠くで爆音が始まった。同じくして赤い空へと轟音の列が並んで飛んでいく。

更に流れるように米軍達が結集し、地獄へ向かうように進軍を始めた。

「戻りはどうします?」

秋田が大滝隊長に尋ねた。

「夜道が危険だしな、それに衛生兵が遅れてる。」

大滝隊長が十字の着いたテントを開いた。うめき声と血の匂いが頭をくら着かせる。

「手当ての手伝いにあたろう。」

衛生兵が居ない場所へと行き、包帯を巻いている間、血を流した兵士の話を聞いた。

「アメリカはどこでも嫌われ者さ。友好国は搾取する国ではないのに、いちいち武力を掲げて脅しをかける。日本がアジアで居られないのも日米安保条約が根を張ってるからだ・・・」

彼は顔を歪ませて、所々狂った発音で英語を話す。

「アンタどうなんだ?自分の国に誇りはあるか?」

なぜそうなるのか、文脈が解らなかった。

I don't know そうとしか答えられず、彼は皮肉そうな笑みを浮かべた。

「ハハハ・・・なんでアンタ自衛隊なんだ?」

包帯を巻く手が止まってしまった。

「ユー ドントハフトゥースピーク。」

そういつて俺は包帯をしっかりと巻きつけ、今度は腕の方へと手を伸ばす。

「まあ・・・までよつ! 志は意識を変える・・・」

弾丸を摘出する時に彼は一瞬だけ叫び声を上げた。

「日本の政治は今酷いらしいな...国会をちよつとだけ見たが...答弁にもなつてない。」

詰まらなさそうだったから、国会のテレビを俺は見たことが無かつ

た。

『あれじゃただの口喧嘩・・・俺だってあんな国の為に戦うのは御免だと・・・思ウっ！つつ・・・』

「もう喋るなって。」

『寝てるのは暇なのさ・・・いいか、戦う目標は決めとけ・・・それがきつとピンチな時に原動力になる・・・』

その後も彼の話を聞き流して、手当てを続けた。

『なあ、お前名前は？』

手当てを続けていくうちに彼の呂律が治ってきた。

「大智だ。ダイチサイザキ。」

『ダイチ・・・どんな意味で着けられた？』

「大いなる知恵。って意味かな。」

『ふふ。いい名前じゃないか。俺はトマス。中尉さ。』

「中尉・・・」

『もつとも、あれだけ乱戦になつてりや階級も関係ない・・・階級高い奴が生き残るとは限らないぞ。』

爆撃音がテントの皮を振動した。

『ありがとな、ダイチ。他の奴を見てやってくれ。』

彼は苦しそうに立ち上がり、外へでた。

「待て、傷口は塞がってもないんだ。」

『うめき声の中寝れるかよ・・・濃んだ匂いで空気が不味い。』

彼はテントのすぐ外で、空っぽになった弾薬ケースに腰掛けた。

そして再び戦闘機が上空を翔る。

『始まった・・・』

ミサイルのバーナーが線を描き、3個の不恰好な花火が空を照らす。彼はそれを見上げていた。

「午後10時・・・」

腕時計をふと見ると、夜明けまで長い。

バシユウウウ・・・

近くで対空ミサイルが上がった。ミサイルが敵機を破壊し、燃えた破片がキャンプから離れたところへ降り注ぐ。

『近いな・・・』

すぐにテントから動ける兵士達が対空ミサイルを持ってやってくる。

「才崎！手が足りない！安静にしてるんならそつとしてやれ！」

「分かった・・・」

彼はただじつと空を見上げていた。

午前1時になつてようやく段落が着いた。

手当ての終つた兵士達は呻くの辞めて安静にしている。だがそれでも戦線復帰は無理だ。骨折や打撲は治るだけでも2週間は掛かつて当然。

夜が明けたら彼らを後方の医療施設まで運ぶことにし、司令部も納得した。

爆撃音は減つたが、たまに銃声が遠いノックの様に響く。

「トマス・・・？」

彼は弾薬ボックスの上で座つたまま寝ていた。

「おい、蚊に食われるぞ。」

「む・・・ああ。そうか。」

彼は顔を叩くと、白い肌が黒く汚れる。

『ああ、随分吸われちまつたな・・・かいー』

ふらりと立ち上がり彼はテントを覗いた。

『皆赤ん坊みたいに安静になつたな。凄いいじゃないか。』

「すぐ送られてきますよ。それに寝てばかりもいられない。」

テントの数は2つ。1つは30人、一つは15人程。それらが全て寝静まっている。

『・・・？』

時折遠くからするタタタンという銃声にとマスはいちいち戦場の方を振り返る。



「どうしました？」

『銃声なんて聞こえる位置か？』

「そりゃ戦場だし・・・」

『俺が戦つてたのは此処から7マイルも離れた住宅地だぞ？静かとはいえ銃声なんてするはずが・・・』

ギョーン！

空に何かが通つた！テントの骨が何本か折れて、慌しく兵士が外へでてくる。

「なんだ？味方機・・・？」

遠くから何か鼓膜を直接揺するような振動が近づいてくる。

『しまった！危ない！』

トマスが俺にタツクルし、押し倒した。同時に冷たい土が顔に降りかかってくる。

気がつけば周囲には穴が開いていた。

『エアーストウリイイク！』

トマスが叫ぶとサイレンが鳴り始め、SAMのエンジンがかかりアンテナがグルグルと回り始めた。

「大智！まずいことになった！ステルス機が戦闘区域を抜けてきた！」

「ステルス機？」

「レーダーに探知されないタイプの戦闘機だ！空爆がくるぞ！」

トマスを起こし、肩を取って歩き始めた。後ろのSAMにミサイルが直撃し、爆発に巻き込まれれば命はなかったらう。

幸いテントは無事だったが、車両と無線機とレーダーが破壊されたらしい。

キャンプは状況把握を始め、大滝隊長は俺達を集めた。

「赤外線ゴーグルで索敵しろ。状況報告まで何とかするんだ。」

前線の方へ分散し、赤外線ゴーグルで敵を探す。地上には特に見当

たらない。

ステルス以外の兵器が戦場を越えてこれるとは思えない。来るとしたら歩兵だと大滝隊長は言った。

「何も無いな・・・」

この状況じゃできて空爆だろ。多分J20か・・・

秋田の声が無線越しに聞こえた。

「なんだそのJ20ってのは？」

中国の最新戦闘機だよ。ラプターやロシアのPAKFAとは見劣りするが、立派なステルス戦闘機だ。

「戦闘機では落せないのか？」

お互いレーダーに映らないんだ。ラプターの数で勝利はこちらに分があるだろうが・・・俺達が生き残れるかは別・・・

秋田の声がしなくなった。

「おい？どうした？」

トラックだ・・・4機・・・速い！真直ぐこっちにくる！

秋田が前線基地へ走り出した。それにあわせて俺も振り返り、木から飛び降りる。

基地へ戻った直後に兵士達が出て行った門から敵のトラックが突っ込んできた。

テントをなぎ倒し、トラックがドリフトして止まると敵が降りてくる。

（このままじゃ・・・いや、最悪だ。）

纏まっている内に仕留めてしまおうと腰に手を当てたが、非武装なのを忘れていた。グレネードの1つも無い。

テントの裏で敵兵を見ていた。次々にテントに入り込んで銃声と悲鳴がそこらじゅうに響き渡る。

（武器が無きゃ・・・何もできないのか・・・！）

悔しくて手を握っていると、すぐ近くに拳銃が落ちてきた。向かい側のテントから大滝隊長が投げ渡してくれていた。

彼は俺とアイコンタクトを取ると、攻め込む合図をした。彼と同時に

にテントの影から飛び出る。

目の前に移ったのはトマスだった。自分の目の前のテントからできて、右手に何か握っている。

「トマス！」

俺が叫ぶと彼は振り返って指を立てた。3、9と。

大量の銃声と共に彼は撃たれた。そして彼が右手を強く握り締める  
と、さっきまで座っていた弾薬箱が眩しく輝いた。

轟音と共に全てが吹き飛んだ。目の前のクレーターには何も無い。

「・・・・・・・・」

何も考えなかった。ただただ啞然として目の前の硝煙の匂いが鼻を突く。

「大丈夫か！」

遅れて秋田がやってきた。後で聞いた話では、敵のトラックがなぎ倒した木で遅れたらしい。

風が吹いた。煙の匂いが消えたすぐ後には血の匂いが鼻を突く。

襲われていないキャンプから兵士達が出てきた。唯一襲われていなかった15人だけ居る負傷兵のキャンプ。

目に焼きついたトマスのハンドサイン。数字で39 サンキューとすぐに襲ってきたのは焦燥感だけだった。ただただ頭の中で「助けられなかった」という言葉が響く。

「へいアンタ。もう此処も無理そうだ。」

出てきた負傷兵が隊長に話し掛けた。

「ああ。だけど今ので全部車が壊れた。後退はできない。」

「どうする・・・」

「兎に角場所を移そう。待機してるのは危険だ。」

気がつけば手を地面につけていた。秋田が俺の手を取り、起き上がらせる。

移動中のことは覚えていない。ただ地面を見て放心状態だった。

ブロック塀の残骸にテントの屋根を置いて、俺達は負傷兵と一緒に座っていた。

無線のない、完全に孤立した状況下で目の前にはアサルトライフルのM4が6丁、マガジンが12個。

『残りは動けそうな負傷兵に渡せ。JSDF・・・いけるか?』

『いけるも何もやるしかないだろ。』

隊長がそう答え、ライフルを握る。

『そうだな・・・頼んだ。』

襲われた前線基地から300m離れた廃屋に身を潜めていた。双眼鏡を覗く秋田が手を上げる。

「3台、装甲車が前線基地に止まった。完全に拠点を乗っ取られた・・・。」

「夜4時・・・もうそろそろ朝だ。」

空が白んできた。一匹のヒグラシが遠くで鳴いている。

「昼間は奪えそうに無いな。」

「夕方になるまで待とう。忍耐力だ・・・。」

自分はというと、会話が左から右へと耳を通り抜けていただけだった。ただ虚しさに打ちひしがれて負傷兵と共にピクリとも動かずに座っていた。

朝が来て、昼が来て、その間にも敵兵士の声は何度も遠のいては近寄った。

2人は心身をすり減らしながら見張りを続けていた。俺だけがただボーっとサボって・・・

そして暗くなると共に、敵の装甲車の前に火が灯った。

「よし・・・どうするか。」

敵兵士の見張りの範囲は明らかに狭くなっていた。お互いが見える位置に居る必要があるためだろう。

『へい。自衛隊。』

負傷兵の一人が話しかけてきた。

「銃、俺が持つか？」

彼の負傷は肩。包帯がまだ赤く、動いたらまた血が吹き出るだろう。無言で居ると、膝においた銃を取ろうとした。銃を握り、持ち上げようと力を込めると苦しい顔で傷口を抱える。

見ていられなかった。傷だらけなのに、彼にはまだ戦う意志がある。

動ける俺が動かなくてどうする。そう思った。

銃を握る手を優しく剥がし、彼と目を合わせる。

彼の目は「単純」という言葉があっていた。一つの事しか考えていない。目標を達成する、という単純明快な意志が宿っているように。

「What's wrong?」

彼は首をかしげた。

「I'm ok.thx」

そう答え、俺は2人の側へ寄った。

「才崎……」

「俺がやる。援護を頼んだ。」

ライフルを持ち、音を立てない様に木から木へと隠れて近づいてく。サプレッサーがない。皆殺しを決めるしかないぞ。

火の暖かさが風に乗って顔を揺すった。風下に居たおかげで物音が僅かに聞こえにくかったのだろうか、敵はもう10mも無い位置にいた。

お互い目を合わせ、突入のカウントダウンを隊長がした時、遠くで爆発音が聞こえた。

慌てて隊長は待機の指示を出す。

理解不能の言語を発しながら、装甲車が2台爆発音の方へ向かった。目を合わせると、隊長は戸惑っていた。秋田はただ銃を撃てるようにトリガーに指を掛け、固唾を飲んで火をじっとみつめている。

しばらくすると、爆発音の方で戦闘が始まった。銃声と共に、敵の

装甲車の近くで無線の音がする。  
ハッチが開き、敵兵士が背中を向けた。

「今だ！やれ！」

俺達は茂みから飛び出し、銃を撃ちはなった。

敵は倒れ、生き残った何人かが装甲車の中に入り込んだ。後ろのハッチが閉じ、エンジンの煙が周囲を曇らせ始める。

「まずい！逃がすな！」

決死の思いで、一番近くに居た俺は装甲車によじ登った。

目の前の砲座の蓋がはずれて、敵兵士と目が合った。

一瞬だった。闇の中にマズルフラッシュの光りを反射した目がくつきりと見えた。

込み上げて来る胸の熱さと同時に、ライフルをその光に向けて強く押し込んだ。

目の中に深く銃口が入り、引き抜くと涙が唇と頬に付着した。

装甲車が動き出した。ガクガクと揺れて、兵士の死体の背中を握る。

「大智！どうにかしろ！」

秋田の声を聞き、目が兵士の背中へと移った。たすきの様な装備にグレネードが4つつけてある。

力任せに帯を剥がし、片手で装甲車の手すりに捕まった。

銃座から死体を引きずり降ろして。

（一か八か・・・！）

左手で帯を持ち、グレネードのピンを全部外し

（南無さん！）

帯を銃座の中へ投げ込んだ。

装甲を伝わって鼓膜に振動が響いた。ドンというよりガオンとしばらくのように。

するとエンジンの揺れが止まり、ゆっくりと正面の木にぶつかり、やがて止まった。

「や、やったか？」

降りてライフルを構え、運転席を見た。ドライバーは失神している。

取るべき行動は1つ。

殺して装甲車を奪う事。

始めの一瞬は躊躇った。殺すということがどういうことか、自分でも解ってるだろう。そう思った。

でも、その後にはすぐ出てきた。

今は殺すことが目標なんだ、と。

体が妙に落ち着いていた。ライフルの銃口が、失神している兵士のこめかみへとそつと近づき、そして引き金を引いた。

さらにはドアを開け、死体を捨てるように引きずり出し、目もくれずに運転席に目を向ける。

血とウンコの匂いが混じった、嘔吐感を催す匂いが鼻を突いたが、それでもなんとと思わなかった。自分の中で「戦争だから」で済ませてしまっていた。

「おい、大智か?!」

追いついた隊長が運転席を覗いた。

「はい。操縦は俺がやります!」

「解った、すぐに逃げるぞ! 秋田、上に乗って白旗を着ける。」

2人は上に乗る、装甲車を負傷兵の下まで走らせた。

負傷兵に奪った装甲車を見せると、疲れた笑顔を彼らは見せた。ハッチを開けると、そこには赤と黒になった部屋。

「うわ・・・なんだこれ・・・大智、お前なにやった?」

「グレネードを投げ込んだ・・・4つ。」

俺と秋田は鼻を詰まんで中を見る。

熱さの残るところをみると、中においてあった弾薬が誘爆したらしい。肉片と貸した死体をかきだすと、米軍も表情を歪ませた。

「仕方ないが・・・せめてスペースだけは確保してくれ・・・」

俺達は苦い表情で頷き、汚物を外に捨てた。

中の肉片を片しても、匂いは残る。

米軍の負傷兵は15人。この装甲車は定員が12人。かなりではないが窮屈で、兵士達は暗く、臭く、うめき声のする装甲車に揺られていた。

もちろん運転席も同じ匂いだったが、文句はいつていられない。

荒々しく装甲車を掛けまわし、果てしなく感じた時間の後にようやく仲間と合流できた。

群馬の外れにある中継基地、夜だと言うのにまだ騒がしい。

「撃つな！味方だ！」

隊長が両手を挙げて仲間の方へと向かう。

「味方？」

「そつだ！補給にでた65分隊の大滝だ！強襲にあつて敵の装甲車を奪つてやつと戻つてこれた！」

「装甲車を奪つたあ？そんなバカな……」

「補給に向かった米軍の第4前哨基地がぶツ潰れた！負傷兵もいるんだ！手伝つてくれ！」

ハッチを開けて隊長は米兵の肩を取り基地へと向かわせた。

ドアを開けると、空気が美味しい。

安心感と共に体の力が抜けてしまった。地面に倒れて、空を仰ぐ。

空は少し白んでいた。

「おう、ご苦労さん。」

「あ、あー……ありがとう。」

秋田が手を取つて、起こしてくれた。顔をよくみると鼻の穴に布をつめていた。

しかし言う気力もなく、うなだれながら立ち上がる。



「なんとか生き残れたな。」

「あーあ・・・兵士なんてやるんじゃなかった・・・」

「あんだけ暴れといてよくいうぜ。おら、座れよ。」

中継基地の岩ともいえない段差にすわり、秋田はすぐに体を起こして立ち上がった。

「他の面子の確認してくる。多分無事だと思うが。」  
呼び止める間もなく行ってしまった。

秋田が言った他の面子、米軍の第4前哨基地以外に向かったのは俺と秋田と隊長の3人。副隊長の島根は別の前哨基地へとトラックを走らせていたためだ。

「おーい！無事らしいぞ！やっぱ俺達だけみたいだ！」

秋田はテントの間から顔を出した。

「ああ、そお・・・」

眠くなってきた。声にならない返事で返すと、秋田の声が聞こえなくなった。

・・・

気がつけばテントの中で寝ていて、既に日が差していた。

朝の9時、外へでてみると青空が広がっている。

「うう、寝すぎたか？」

寝坊は兵士にはご法度。訓練時には何度も何度も怒られたものだ。恐る恐る部隊が集結してる場所を見ると、変わらず騒がしかった。

「お、起きたか。」

島根副隊長と目が合った。

「ええ?! ああすいません・・・」

叱咤を喰らうかと思っただけビクビクしていると、彼が肩を叩いた。

「よくやったじゃないか。」

「え、あ、はあ。」

「ま、俺らの出番はまた後だ。お前もゆっくりやすんでろ。」  
体を休ませるのも仕事のうちだ、ということらしい。視界の隅ではトラックが引つ切り無しに砂埃を上げている。

『おい！ガソリンはもう無いぞ！』

『はあ？！』

『空の連中に渡しちまって、こっちの分はもう無いんだ！』

『どうしろってんだよ！これじゃ出るにでねーじゃねえか！』

『無いものはないんだよ！文句言ってる暇あったらそつちも考えてくれ！』

兵士達は資源不足が深刻な会話をしていた。

「はー・・・去年の大震災ですつとこんな調子だ。」

「何処の国でもガソリンは枯渴しつつありますからね。」

「代替エネルギーがみつかりやあな。バイオエタノールだって結局は燃料だし、福島原発の所為で原子力系統は世間の風当たりが悪い。」

「この戦争・・・勝てるんでしょうか？」

「少なくとも、勝ち負けは無い気がするぞ。」

隊長が後ろから顔をだした。俺達2人は敬礼で返す。

「どういうことですか？」

「資源は中国が優勢だが、ロシアとアメリカは日本が衰退するのをよく思っていない。」

「アメリカはわかりますけどロシアってのは？」

「元々俺達はアジア人だ。人種はともかく、日本に米軍がある時点で喉元に突き立てられた刀みたいなもんだ。ロシアはアメリカが邪魔なだけだよ。」

「長く続かないのはロシアもこの戦争を望んでいないと？」

「それもある。今作られてるGPKは中韓国の暴虐を止める圧力団体なんだ。各国の狙いは違っても、戦争を終わらせる為にグローバ

ル化されてる。」

「じゃあなんで今、GPKは動けないんでしょう。」

「ロシアは今、戦争を長引かせるか否か迷ってるらしい。理由は敵対する米軍だ。米軍が少なくなれば、それだけでも外交カードになる。」

「なるほど・・・。」

「とはいえ、俺らにも迷惑な話だ。大震災の直後に有事関連法で夕ダでさえないガソリンを米軍に謙譲しなきゃならない。その米軍も思惑1つでただ消費するだけだ。」

「この先どうなるんでしょう・・・。」

「問題なのは、GPKだな。あの組織がどうなるかで俺らの命運も変わってくる。」

ふと空にヘリコプターが1機訪れた。

「何処のだ？」

「解りません、民間機みたいですけど・・・。」

ゆっくりとヘリコプターが下りると、士官服を着た男が降りてきた。どこか見覚えのある面構え。真直ぐとこっちへ向かってくる。

「・・・あ！」

「どうした？知り合いか？」

目が合うと彼は笑って帽子を取った。

『どうも、SASのジョン・ケベックだ。』

発音のいい英語で敬礼をしてきた。

『また会ったね、ミスターサイザキ。君に用がある。』

「俺に？」

『65分隊の隊長、大滝殿。彼を預かってもよろしいか？』

『・・・話の内容にもよりますね。』

『わかりました、同行してください。』

手招きしてヘリへ招き入れられた。

「島根！部隊をしばらく任せろ！」

「了解です！」

「才崎・・・SASSに呼ばれるなんて何かしたのか？」  
「・・・一応心当たりは・・・」  
へりに乗せられて、俺達は東京へと向かった。

へりの中で話していたことだ。

「ミスター才崎。君の友、武田古はGPKの初任として始めて鞭を振るった。」

「あいつの・・・指令？」

「そう・・・彼の指令はこうだ・・・政府の役人を暗殺しろ。」

「な・・・」

「どういうことでしょうか？ケベック殿。」

隊長が真剣な表情で聞いた。

「売国・・・。彼は日本を変えるつもりだ。今の内閣を暗殺して、都合のいい人物を押し上げろという話らしい。」

「そんな横暴がバレれば、国連も黙ってはいませんでしょうに。」

「今の内閣は停滞している。むしろゆっくりと衰退している。そしてコレは国連の要人が決めた事だ。私は合理的だと思う。」

「・・・しかしどちらの側につかせるというのです？」

「現状では西側・・・対ユーラシア体制を強化しろというわけです。」

俺は首をかしげた。

「現状では？」

「そう。彼は現状を打破するだけのことを考えろといった。そのために一番崩しやすい、政策を壊せという話になりましたな。」

彼はブリーフケースを出した。

内閣総理大臣含む、防衛省以外の要人のリスト。その数12人。全て暗殺し、一度日本をリセットする必要がある。」

「そんな簡単にいくのか？」

「無理にでも押し通すならば、彼らに汚名を着せればいい・・・彼

はそうだった。」

驚いた。

しかし考えても見れば武田らしい。合理的かつ冷酷だ。

『ミスターサイザキ、日本のネットサーフは彼と楽しんでいたそうなの？』

『ええ・・・まあ・・・』

『政府を暗殺する役人を彼はネットで募れといった。そして処刑をユーチューブで流せと。』

『その手助けを俺に?!』

『その通り。ただネットサーフの扱いを教えてくださいだけでいい。』

武田の命令。

信頼しているのか、それとも悪友の悪魔の手なのか、はっきりとわからなかった。

内容を聞く限り、確かに差し伸べられているのは悪魔の手だ。

しかし、その手の真意が悪とは思えない。ただ方法が悪なだけで、無意味な議論を続けて時間が過ぎるよりはずっとマシ。

『・・・一応、承諾しておきましょう。』

悩んだ末にそう答えた。

「才崎？」

「あいつのことです、俺が承諾しなくても続けさせるでしょうよ。」  
「いっそのこと知り合いである自分が管理した方が違う。そうおもった。」

「ふんふん・・・」

『ミスター大滝も協力してくれるとありがたい。65分隊の活躍は大きな話題にはまだなっていないがかなりのものだ。』

『そんな大層な計画に俺なんかが関与していいものか・・・?』

『少なくともネットで民間人を募るよりは成功率が上がると思っていますね。』

その一言で隊長は1度大きく息を吸い込んで、承諾した。

『協力に感謝する・・・ミスター才崎。彼について聞きたいこと』

は？』

「山ほどあります。」

『ああ・・・1つ話す前に、聞いていいか？彼と君はどんな関係だ？』

訓練時にも言われた、武田のことを意識しすぎだと。

正直に話した。俺がアイツから初恋を奪った事。本当はテロの時、俺は誰も殺してなんていなかった事。

『そうか・・・思っていた以上に深い関係だな。いや失敬。てつきりデキているのかと思っていたよ。』

「デキる・・・？」

彼は笑って俺の質問をはぐらかした。

『ま、それはともかく、彼の活躍は君達より凄い。航路途中で撃墜された自衛隊を部下とたつた2人で救い出し、裏切り者を殲滅。へりを2機も鹵獲して、最近では戦闘機に乗り始めたらしい。』

「噂は聞いてたが・・・本当に事実か？」

隊長は半分笑いながら問いかけた。俺達65分隊は7人で戦場をやつとの思いで駆け抜けたのだ。

『事実だ。ああそれとミスター才崎、恋敵の事は忘れていいと思う。』

彼はニヤリと笑った。

『来て1週間で自室に女を連れ込んでいたぞ。』

「・・・やっぱ強い奴はモテルのかぁ・・・」  
心配していたのがどうでもよくなってきた。アイツはGPKで苦しむどころか満喫している。

へりが羽田空港の隅っこに着いた。

『さあ、平和ボケしてるアホに鉛球を食らわせるぞ。』

彼はそういつてへりを降りた。

#### 4話 「暗躍」

65分隊も到着し、俺達は東京に程近い埼玉の空き家でノートパソコンとにらめっこだった。

『どうだ？』

ジョンがヒゲをいじりながら聞いた。

「裏のサイトを見る奴がいるかどうか……ですね。大々的に暗殺しますよーとはいえませんが。」

「ふーむ……情報が漏洩した場合は？」

隊長が聞いた。俺達は軍人であることを悟られないように私服だ。

『実行すれば結局は手遅れだ。上層部がガセと言えば、ガセになる。そして俺らが手を下せばいい。』

「ある意味完璧っちゃ完璧だな。ごり押しだけど。」  
島根が口を開いた。

「だが漏洩せずに完遂するのと同じや結果が違うとおもっぞ。」

『ま、そうだろうな。なんにせよ用心しなきゃならん。』

ジョンが外のドアを開けた。クラクションがかすかに聞こえる。

「どこいくんだ？」

『自販機。緑茶の味が気に入った。』  
ドアが閉まると静けさが戻る。

「全く……お前がGPKの化け物と友人だったと……」

最近島根は口数が増えてきた。配属されたばかりの時は口を開けば驚く程だったが、今ではそうでもない。

「おかげでひでえ仕事に就かされたもんだ……。」

「どつという意味ですか？」

秋田が拳銃のスライドを開いて中を覗き込む。

「SASなんてヤバイ連中と合同作戦だぞ？どんな難度か解ってるのか？」

「請負った事に文句は言うな島根。」

「はぁ・・・失敗して責任問われたらどうすんだよ・・・」  
隊長の一言に島根は深い溜息をついた。

ジヨンは何食わぬな表情でペットボトルを持って戻ってくる。

「・・・なあ、1ついいか？」

島根が問いかけた。

「なにか？」

「あんだ、第5SASって言ったよな。イギリス陸軍は22だか23番がSASで第五SASなんて存在しないはずだが？」

「ああそれが。簡単な話だ。GPKに新規のSASを置いてるんだよ。ま、俺も実は新米なんだ。隊長のケビン准尉が今こっちにきてる、詳しくはこっちの隊長に頼むよ。」

「ああなるほど、簡単だ・・・はぁ。」

島根は沈んだ顔で座りこんだ。

「へい、サイザキ。」

ジヨンは突如小さな声で耳打ちしてきた。

「なんです？」

「日本のエロサイトって凄いつて聞いたんだが、ちよつと見せてくれねえか？」

何を言うかと思いきや、武田が何か吹き込んだか・・・

「そついうのは自分で調べてくださいよ・・・」

「日本語入力難しいんだよ。な、頼む。」

(仕事はどうしたSAS・・・)

そんなことをおもっているとドアが開いた。

「おいおい、ノーパーソ1台じゃ足りないだろ。」

「あ、隊長。」

ジヨンが言っていたケベック准尉のおでました。

「む、君がサイザキかよろしく。」

爽やかな英語で握手を求めてきた。恐持てのイメージとは全く違い30代と若く、見かたによってはジヨンのほうが老けて見える。



しかしながら2人共服に隠れて凄い筋肉だ。握手で手を振る際にずつしりと重量感がある。

『日本語は難しくてね、なるべく英語で話してくれると助かる。』

『それで、准尉は何をされていたんです？』

『上層部と話してたのさ。暗殺した政府の穴埋めに誰をいれるか、とかな。』

彼は椅子に座り、ジョンに話しかける。

速すぎる英語でなにを言ってるのだから解らない。

突拍子も無く俺が日本を左右する事になった。

もちろん、何がなんだかわからぬ間に・・・

・・・

パソコンで中々合意者が現れない。暗殺後のプランはGPKで早々に立てられたものの、実行に移せる仲間が現れずに3週間が経った。「こんな時間かけて大丈夫なのか？」

『いや、もつと長い時間かけて1人づつ仕留めるつもりだ。1月やそこらで動いちゃ駄目だろう。』

ケビン准尉はカップ麺のスープを飲み干した。

『ストリートチルドレンが居ない国か、赤字で当然だろうな。』  
窓の下で騒ぎながら帰る学生を見て彼はそういう。

新潟県での戦闘は徐々に収まり始めた。ニュースでGPKの本部がカナダに作られる事が決定し、その異動の動画が多く寄せられている。

『小型核弾 EMPミサイル・・・通称オーロラ だそうだ。』

大通りに軍用車がミサイルを抱えて走っていた。持ち込まれた中国

の新型核弾頭らしい。

破壊兵器ではなく、電子機器の破壊を狙う核弾頭。もちろん核とい  
うだけあってミサイル以上の威力は保有している。

『戦争となつちや非核3原則は守れたもんじゃないな』

黙って皆ケビン准尉の言葉を聞いていると、彼が困った顔をした。

『おい、なんか返事してくれてもいいんじゃないか？』

『いや別に・・・皆もそう思ってるだけじゃないですか？』

秋田が返す。

『だったら、そうだなーとか、あってもいいだろ。皆無口過ぎない  
か？』

『ま、仕事ですからね。』

『ふーむ・・・ジャパニーズのデスクには居たく無いな。こんな  
だから自殺する奴ばかりなんだ。』

『・・・じゃ質問。EMPミサイルってどっかで使われたのか？』

大滝隊長が手を上げた。

『使用暦は無いな。だが中国で大量に持ち出されたって話だ。日本  
に来たのは持ち出された中の1割だとか・・・米軍の情報にある。』

『残りの9割はなんだ？』

『大陸側に持ち出されたそうだが、消息が途絶えたそうだ。想像で  
きるのは異動中の・・・』

不意に部屋の窓に人影が通った。

一斉に皆銃に手を当ててアイコンタクトを取る。

ピンポン

ホンの音と共に隊長がドアをゆっくりと開けた。

「どちらさまだ？」

いたって普通の中年の男だった。

彼はゆっくりとポケットから手帳のようなモノを出す。

「こつというものです。」

警察だった。

「脅迫行為で逮捕・・・」

彼が部屋に押し入ろうとすると、隊長は逆に胸倉を掴み中に引きずり込んだ。

俺達は倒れた警察に拳銃を8方から向け、撃鉄を起す。

「き、貴様等?!」

『悪いな。こつちはこつというものだ。』

ケビン准尉は羽と剣のマークを見せた。

「なんだこのマークは!」

「はぁ・・・警察はアホのままか。」

秋田はしぶしぶ自分の自衛隊の階級章を見せる。

「じ、自衛隊?」

「いいか、外の奴らに伝える。人違いだつてな。」

蹴りを入れようとした秋田の肩を隊長が掴んだ。

「いや待て、もう見つかつてるなら逆だ。」

「はい?」

あろうことが大滝隊長は警官に細やかに任務の内容を話し始めた。極秘であるはずの暗殺計画をだ。

「なるほど・・・それで?」

「警察にも協力してもらいたいのさ。ガードマンも敵に回ればもう暗殺なんてものじゃない。」

「そんなクーデターに警察が参加するって?」

「あのなあ、自分の立場考えたら?」

「は?」

警官は秋田を睨む。

「日本のしゃばい警察がGPKに勝てるでも思ってたのか?」

「・・・。」

「どちらにせよ、このままじゃ戦争で国がジリ貧だ。上の方々に考え直して貰え。」

隊長は紙に何か書いて渡した。

「その時間と場所に来い。それとお前の手帳は『押収』させてもらう」

警察手帳を奪い取ると彼を解放し、外にだした。窓をあけると下で会話が聞こえる。

「収獲は？」

「・・・人違いだった。」

「そうか、隣の家とかは？」

「誤検知だろ・・・戻るぞ。」

パトカーは静かに帰って行った。

・・・

「さ、時間か。」

大滝隊長が紙に書いた時刻が迫ってきた。

「誰が行きます？」

SASの4人・65分隊の4人が立ち上がる。

「俺が行きましょうか？」

「お前のカミカミな口で警察を丸められんのか？秋田。」

島根が後ろから言い放つと秋田はむすつとした顔をした。

「言いだしつぺの俺の方がいいだろ。」

『あえて、全員で行ってみるってのはどうだ？人数が居れば気圧す事も出来ると思うぞ。』

ジョンが笑いながら言った。

「・・・賛成だ。」

「確かにな。」

『よし、行くぞ。』

満場一致で俺達はパソコンを後にした。

向かった先はただの公園だった。

ただ2台のパトカーが端に止めてある。呼び出しに応じた警官は3人。

「ちよ・・・8人?!」

「別に1人で来るとも言っていないはずだが。」

「・・・ちよつと待つてる!」

老け気味の警官達は集まって談義を始める。しばらく待つと、パトカーの中へ招かれた。

ボディチェックは無し。お互い銃を持っていること前提だ。

警視庁前、厳重な警備の中俺達は招かれる。

機動隊が並び、通り過ぎる警官はこちらを睨む。

『これを突破する自信は?』

ケビンが小声でジョンに聞く。

『6：4であります。』

『よく言った。』

招かれた先は会議室。

俺達は椅子にどっかりと座り、堂々と構えた。

「あゝ、聞かせてもらおう自衛隊諸君。暗殺計画とやらを。」

大滝隊長が黙っている。返答に困っているみたいだ。

「・・・知るかよ。」

「どついう意味ですか?」

「俺達じゃねえ。こいつの友達が計画してんだ。」

俺の方へ親指を立てた。マジないわことういう無茶振り。心臓の鼓動が高鳴り、必死で頭をめぐらせる。考えたのは武田。武田の所為にする。

「GPKの意向だよ。世界がそれを望んでるんだ。」

言ってしまった・・・

顔はクールにしてるが股を背中と脇の汗が尋常じゃない。しかも皆黙り込んでいる。此処はもうゴリ押ししかない。

GPK グローバルピースキーパーズ。多国籍平和維持軍。それを頭に入れて理想図を画きそれを説明。

「武田古。彼は憲法9条を抜け出した。今の日本は、『有事関連法』で戦っている。日米安保条約のみで動かせる米兵をメインにだ。」  
次の言葉を考える。皆黙り込んで聞いている。

フォローなしかよ・・・

「今はもう冷戦の時期なんだよ。ロシア側の代理として中国がでてきてる。助けてくれるはずのGPKが今動けてないのは多国籍としてロシアが彼らをリリースさせてるからだ。」

会議席をざあっと眺める。視界の隅でケビン准尉が小さく親指を立てた。

とてもそうは思えないがいい感じらしい。

(言葉を出すには演技、演技・・・戦争ならアイツだ、アイツになりきれ)

「まず始めに、退屈に犯罪者を追っかけまわしてる警察。あんだ達のデスクを思い浮かべてくれ。」

一人暮らしか、妻子持ちか、暖かい朝食を食べて満員電車で揺られて、戦争はテレビ画面の向こう。

実感のわかない戦争にあんた達は心配しながら静かな日の元で昼飯を食べる。とても平和な日本だ。」

自分で考えていく内に、愛の顔が恋しくなってきた。今は子供も居る。死んだら2人はどうなる？

「どちらにせよ、GPKが動けば間違はなく日本に来る、あんた達は自分の住処を追われてこういうんじゃないか？」

訓練の時を思い出す。家にも帰れず、ただ銃を持ち、刷り込まれる様に進軍の練習。

「第9条違反だ。」

振り返ってみれば自分の学生生活を思い出した。友達と楽しく、先生と楽しく話しを交わす。

自衛隊の兵長である自分にしてみれば、遠い遠い過去の話だ。

「その時、あんた達は何に怒りの矛先を向ける？中国か？米軍か？いいや違うね。内閣だ。」

そうやってアンタ達は、いい指導者がでるまで鼻糞を擦り付け合うのさ。降りかかってくる火の粉は風の所為だというのに、火を起こした人の所為と言い張ってね。」

ジョンが首を僅かに横に振った。熱くなりすぎて話が逸れていたみたいだ。

「戦争は収まってきているか？むしろ逆だ。消耗が続いて日米は疲弊を始めている。」

目先の戦況しか見えていない今、この状況を打開するには日本を根

底から変えないといけない。

なのに政府はまだ総辞職するつもりはないと言ってる。世論調査は悲惨なものなのだ。」

総監がやつと口を開いた。

「一理ある。少なくとも私も今の内閣にはやめてもらいたいと思っている。」

東海沖大震災に繋ぎ、戦争まで始まり、いよいよ持つて選挙なんてしてる場合ではない。内閣はそういつて解散総選挙をしなかつたためだ。

『じゃあこうしよう。暗殺を黙認、協力する代わりにそつちで代理人を決めるつてのはどうだ？』

ケビン准尉がすかさず交渉にでた。

「・・・政治家を決めるのは警察の役割じゃない。」

『じゃあこのまま内閣を続けさせると？』

「むう・・・。」

総監は長い沈黙についた。

しばらく後にこちらの事をたずねてくる。

「GPKは一体何が望みだ？」

『日本をロシアに奪わせない事だな。ロシアはどう思ってるか知らんが。』

「・・・本当にそうなのか？武田古とか言うのは何のために暗殺を企てた？日本人だろ？」

誰もその問いには答えられなかった。

今の政治を解体する事には皆賛成している。ただ、その後どうするか国ごとに違うのだ。

武田なら多分こう言った気がする。「日本を開放する為だ」と。

『壊してみない事には変わらない気もするが？』

大滝隊長が言う、皆小さく頷いた。

「だが壊してどうする？」



『なるようになれ、いや、できるように努める。だな。』

暗殺の首謀者にしては無責任な発言だった。

「それが・・・GPKなのか？」

『上の奴と話して貰えないか？詰まるところ俺達は暗殺を頼まれた兵士だ。協力する姿勢を見せてくれれば、上も顔を見せてくれると思うが。』

上官らしき男が立ち上がり大声を張り上げた。

そもそも海外が関与する余地はなく、国民の問題であると主張し、そもそも政治のルールを破っている、と。

しかし総監が彼をなだめた。

「GPKの上役に・・・もし我々の意見が通じるなら協力する価値はあるかも知れない。」

意外な一言に心臓が高鳴った。

「・・・賭けて見ようと思う。」

俺達は警視庁を後にした。

車に乗り、待ち合わせていた公園で降りると、パトカーはどことも知らぬ道へ消えて行く。

『作戦成功だ。よくやったじゃないか。』

ジョンに背中をバンバンと叩かれる。

「中々アドリブ効く奴だな！見直したぞ！」

「お、おおう・・・でも隊長、あの無茶振りは無いですよ・・・」

秋田も同じ様に寄ってきた。

「ま、結果オーライだ。」

3日後、警視総監とGPK司令部が密会をしたとの報告を受けた。

内容は俺達には到底理解できない政治の話。

予算がどうだの、選挙区選挙がどうだの、それは上の仕事だ。

11月中旬

国会中継に今、総理が入場しました。現在まだカメラの許可はされておらず、警備員に・・・

国会議事堂、会議室の目の前の廊下でニュースキャスターがカメラに話している。

俺達は警察の衣服を着て腰に銃を持っている。

「合図はどつする？」

隊長がケビンに話し掛けた。

「俺がする。派手にやるぜ。」

「オーケイ。」

総理が中へ入った。

「すみませーん！カメラまだ入れませんか？」

「会議が始まるまで、もう少しお待ちください！」

秋田がカメラマン達を別の入り口へと誘導する。

えー間もなく入場ができそうです。今回の戦争で内閣の方針を・・・

段々とニュースキャスターの声が遠のいていく。目の前には誰も居なくなつた。

「・・・いよいよ始まるのか・・・公開処刑が・・・」

カメラマンの位置が落ち着き、ざわめきが無くなつた。

「これより衆議院本会議を始めます。総理より、今後の予算について。総理大臣。」

やる気の無い司会の声、それだけでケビンの顔が険しくなる。

国務大臣がこちらを見た、ケビンの合図を待っているようである。

彼はまだ早いとサインを送ると大臣は再び議席に顔を戻した。

延々と続いた首相の予算案、誰も聞いて居ない。

質疑応答に入り、野党の一人が手を上げた。

「震災被害にあった人を戦争に出させる場合の予算や給料はあるんでしょうか？それに対する計画は？党内での評価をお答えください。」

大臣が呼ばれると、ケビンはおケーのサインを送る。俺達は銃を取り出し、安全装置を外した。

「えー非常に申し訳ないのですが、正直な所、私には！ありません。」

野党のざわつきが会議場に広がった。首相の台本を彼は目の前で破ったのだ。

話が違くと首相が立ち上がる。野党も立ち上がり剣線に近づき、ガードマンへの注意は何処にも無い。

俺達は自然にゆっくりと役人達に近づいた。

「いいえ、もう決定したのです。決めるのはこれから。」  
大臣が銃を引き出して総理大臣に向けた。野党は驚いて彼から離れ、現れた空間にはガードマンが6人、各々が任されたターゲットに銃を向ける。

「チエックメイトだ。」

撃鉄の音が静かに響き渡る。

「う、う、うわああああああ！テロリストだああああああ！」  
会議場は大騒ぎだ。

俺達は何食わぬ顔で別の出口から出ると、ガードマンの衣装を脱ぎ捨てる。

「これが歴史の転換点だ。」  
出口に走り出す議員達。我先に逃げだそうと他人を殴り飛ばす姿。

第3者の目に映る世界。過去の自分には想像もしえなかった一般人の末路。赤く豪華な国会議事堂が色あせて見えた。

## 1 週間後

事務報告 GPKのカナダ異動中に中国との戦艦に遭遇。EMPミサイルによる、殉職者 GPKスウェーデン空軍 イガート隊 ベンジャミン・マックバーン アマンダ・ブリエツト

異動直後 偽装タンカー（名称不明）から出現した戦車隊による強襲。航空機部隊による烈火の強襲により偽装タンカーを撃破。EMPミサイルの所載を公開。

国連総会の判断によりGPKの日本他5カ国への派遣を判断。準備を早急に進めると共に、スパイ調査の強化。

第65分隊、功績により昇進。大滝中尉、島根准尉、秋田曹長、才崎曹長となり、戦線に復帰。

ケビン准尉率いるGPK第5SASは任務の為に帰国。同時に陸上自衛隊派遣員同行。

## 5話「赤黒い鷲」（前書き）

閣僚を暗殺し、再び65分隊は戦線へとでることになった。彼らに命ぜられたのは新潟空港の奪還。

一度強襲により本土を攻撃されて空爆により占領された新潟空港だが、米空軍と日本海軍の活躍により中韓国軍は空港から撤退し、すでもぬけの殻だった。

## 5話「赤黒い鷲」

2014

寒くなり始めた11月の末。軍服を着ても丁度いい温度になり始め、ようやく俺達は戦場へ戻ってきた。

新潟県安田インターチェンジ。潮風が僅かに鼻を通り、殆ど戦争の姿は見えない。

この中継基地には新潟空港の奪還という大任が担われている大掛かりな基地だ。後方支援の自衛隊も派遣されて不思議ではない。

「おいおい・・・どういうこつた・・・」

仲間の中継基地にたどり着いたが、銃声一つなく、基地にはだれも居ない。

「見ての通りさ。何処にも誰も居ない。」

中継基地の司令官が腕を組んでテントから出てきた。

「退却したのか？」

「それはまだ解らない。だが中部地方はまだ戦闘が続いているらしいから、戦力をまとめたのかも知れない。」

陣地のトラックが何台か動き始めた。

「あれは何処に行くんだ？」

「戦闘の続く美保基地さ。中身は米軍だけだな。」

米軍を乗せたトラックは素っ気無く煙を立てて消えていった。

黙って司令官についていき、作戦地図を見せてもらう。

戦闘区域は無し。

「何処にも派遣してないのか？」

「敵がいらないじゃな。」

司令が座ってタバコに火をつけると、隊長は一礼して外へ出た。

俺達はそれに追従し、黙る隊長に話しかける。

「どうしたんですか？」

「・・・いや、なんか胸騒ぎがしてな。」

実を言うと、自分も何か変な気分だった。静か過ぎて落ち着かないというか、地に足着かない、心がぐらぐらと左右に揺れると、一緒に平行感も消える感覚だ。

「静かすぎ・・・ってことですか？」

「それもある気がするが・・・なんか違う、それでいて惜しい答えな・・・感じた。」

そう、確かに静か過ぎる。無線の音一つない上に風が吹いても木の音がならないのだ。

・・・無線の音一つない？

慌てて俺達は無線を確認した。

「・・・おかしい、バッテリーは生きてるのに動かない！」

「EMPミサイルか?!」

「いや、それなら電源のランプも着かないはずだ！」

GPSは起動しても画面が真っ暗のまま動かない。

「駄目だ、完全に電子機器が逝ってる。」

車のラジオもつかない始末だ。

「オカシイな。さっきまで此処の基地と通信して来た筈なのに。」

テントをまくって司令官が出てきた。

「まーた始まりおったか。」

「また・・・?」

「そうだ。敵さんもこれで撤退したんだと思う。敵味方問わずな。」

「だったら尚更警備しろよ！」

秋田が司令に飛び掛った。

相手の戦略だったら当然無線無しで動ける対策を取っているはず。

「・・・したさ。戦闘区域に予想されてた海岸までな。」

司令の言葉はそれ以上なかった。大体予想はつく。秋田はゆっくり手を離した。

「じゃあ・・・やっぱり・・・」

「新潟空港は既に奪還されてるよ。今回の『波』が終わったら私も空港にいくつもりだ。」

隊長が念を押すように聞く。

「本当に誰も居ないのか？」

「ああ。空港は海岸で艦砲射撃の範囲内。強襲したら敵はパニックであつという間に奪還だ。」

敵がパニックなら話は別だ。

胸騒ぎがまた大きくなる。隊長も柄にも無く手を握り締め下を向いていた。

「・・・行つて見ます？」

「そう・・・だな。」

車のエンジンは動いた。ということは電磁波の様な物であることは間違いない。

海へと走らせた。久しぶりに静かなドライブだというのに全く気分が晴れない。

海岸線を走る。穏やかな波に潮風、そして水平線。戦争していると思えない程だ。

「・・・波の音がしない。」

「カモメも・・・ですね。」  
完全に自然音が聞こえない。

「俺ちよつと海みてきます。」

「俺達は空港内の様子を見てくる。」

特に戦闘の気配もない。空港には皆居るから隊長も大丈夫と踏んでいた。

波の音が物理的に聞こえ始める距離までくる。

「・・・ん？」



急に胸騒ぎが消えた。なぜだか凄く心地いい。

一息ついてリラックサしていたらいつの間にか水中に足が埋まっていた。水が温かい……？

「らーらーらー」

頭の中に響き渡る声。誰かが近くで歌っている。

綺麗な女性の声だ……。こんな声で甘い言葉を囁かれたら浮気は間違いないだろう。

何時までも聞いていたい。そんな思いにふけていると、足が勝手に前に動く。

歌に引き寄せられる。そんな伝承をどこかで聞いた気がするが頭がボーっとして考えられない。

もう少し、もう少し先に何かがある。そんな気がして体を委ねた。

「びえっ?!」

驚きの声と共に歌が止まった。急に水が冷たくなり、胸にぶつかった波が口に入ってしまった。えっばい。

「あれ、えつと？君」

いつの間にか胸まで水に浸かっていた。

目の前に女性が居る。だがもつと目を奪ったのはその奥だった。

歪んで海中に見えるボート。そのボートの機関銃がいくつか海面を突き出していた。

「あ……君！まさかあの船のク……」

今度は強い波が行く手を阻んだ。口の中に海水がぶつかり、喉の奥で咽こんでしまう。

「ゲッホ！ちよっぼ……まっ……」

女性は水の中に潜った。追いかけようとすると、スネに何か魚の様なモノがぶつかり足を取られてしまう。

太陽の光が5つ歪んで見える。窒息寸前で波に押され、波と共に浜へ這い上がる。

「ぐえっほ！オエ！なんだっただ？！」

酸欠で体に力が入らない。そのうえ装備が濡れて立ち上がることもできず、砂だらけの体を仰向けにして起こした。

胸騒ぎは消え、自然音も聞こえるようになった。カモメもそこら辺を飛び回り、カニが波に引き込まれて海へと消えた。

「……まさか……なあ。」

武田から貰ったエロゲーで覚えていた。マーメイドという奴だろうか。

船を座礁させ、人間を誘惑する歌を奏でるといふ。

伝説がその通りなら確かにこの身で体験した。むしろ体験したからこそ、そんなことが言える。

原因は不明だが、まだ沈没した上陸艦がある。空港からは死角だから報告する必要があるそうだ。

空港へ戻ると司令官が人を集めていた。

「状況は？」

「新潟にはもう敵はいないらしい。撤退していったと報告があったがそいつらのその後は不明だ。」

撤退……恐らくあの上陸艦だろう。しかし人魚なんて信じられるはずもないので言わない事にした。

「才崎！」

隊長がエレベーターから降りてきた。秋田達も一緒だ。

「おまえ、歌を聞かなかったか？」

「……ええ。一応。」

「お前もわかるよな。歌が止まってから普通なの。」

「は……い。」

とはいえどう説明したものか……。全員が胸騒ぎを覚えていたことは確か。

「どうだ？お前、体調は優れてないか？」

「いえ！異常ないっす！多分オーロラかなんかじゃないですか？電

磁波の乱れとか・・・」

人の姿をみたならばらく人魚は現れないんじゃないかな・・・  
・・・多分。

「と、ところで近くの浜で上陸艦が沈んでるんですよ！機関銃が錆びてないから多分新しいと思います！」

隊長はすぐさま浜辺へと走っていった。俺達もそれに追従し、浜辺を見渡す。

幻覚ではない。確かにそこには軍用ボートが沈んでいた。

「・・・おい、才崎。人は？」

「はい？」

「ボートには人が乗るもんだろ。」

秋田が言ったのはもつともだ。

「死体がない・・・」

「ま、そのボートだけが不調ってこつたる。ほら、そこ見てみ。」

秋田は浜辺の浅瀬と深溝の段差の奥を指差した。錨が引つ張られた後が無数に残っている。

「ふむ・・・思い違いか？ならいいんだが・・・」

隊長は腕を組んで首をかしげた。

「俺も胸騒ぎはしてましたけどね。近々地震でも起きるんじゃないですか？」

「なるほど。野生の勘的なアレか。」

島根は珍しく秋田の意見に同意する。

「そーそーそー。ケージの中の猿とか暴れまわるアレよ。」

「隊長、俺、先に空港で話つけてきます。秋田、来い。」

島根と秋田は再び空港に戻っていった。

「・・・才崎、お前はどう思う？」

隊長はじつと遠くのテトラポッドのある場所を見詰めていた。どう思うといわれても説明のしようがない。

「どう思ってたって・・・どうしようもないですねえ・・・」

「・・・そか。じゃ俺も戻るわ。」

隊長は背中を向ける前に2、3度頷いてから空港へ戻っていった。じっと目を細めて、遠くを見つめていて頷く。どこか違和感のある動きだ。

ふと腰に赤外線双眼鏡があったのを思い出した、それで隊長の見ていた場所を試してみる。

軍用ボートがテトラポッドの根元、それも水中で山の様に積み重なっていた。

驚いて倍率を変えてみる。ボートの根元に魚の腹の様な光るモノが動いた。ヤケに大きい。

「やっぱり人魚・・・か・・・あれ!？」

急に波がしけ始めた。雲が多くなり、風も強く体を押し返す。青かった海は突如として、波泡の白に変貌した。

泳いでテトラポッドに行く自信はない。

おい才崎！夕立だつてよ！

無線機で秋田の声がした。

もしかしたら雪になるかもだとよ、さっさともどつてこーい。

「ああ・・・。わかった。今行く。」

チラチラ振り返りながら空港へと向かった。何か視られている様な気がしてならない。

・・・

「で、俺達も南の方へいくのか？」

隊長はハンドガンのスライドをスカッと戻す。

「自衛隊は前線にでていいのか？」

「さあな。」

苦笑いしながら隊長は肩を寄せた。

「そんな投槍な回答で軍人が務まるのか？」

「上からの命令だからな。俺に聞かれても・・・。」

「どこの部隊だ？階級は？」

「第65分隊、大滝2等陸尉だ。」

「ああ・・・噂に聞いてたのはあんた等だったのか。」

「噂あ？なんか悪い事したか？」

「してるしてる。閣僚を暗殺したりタグを拾わずに装甲車乗り回したり、好き放題やってるって聞いたぞ。」

意外と不評らしい事に俺達は溜息をついた。

「あのなあ、状況が状況なんだぞ？激戦区でタグなんて拾ってられるかよ。」

「ま、世間の風は冷たいだけだろ。同業者は気にしてないから気にすんな。」

「ハア・・・」

「ところでだ、その一番若そうなの。やっぱりアンタが才崎か」俺の方に指が向いた。

「はい？」

「いや、それがなんとというか・・・さっき連絡が入った。どこの言語がよくわかるのだが。」

ディスプレイをこちらに大きく向けてきた。俺宛にメールが送られてきたらしい。

「俺宛？なんで俺？」

「ちよつと待つてる、とりあえず翻訳だ。」  
コピペして翻訳ツールに将校が乗せる。

『GPK第5戦術飛行隊イガート隊2、3番機、援護へ向かう。  
編成E-3管制機、GPK第7攻撃飛行隊ハンマー隊及びGPK第1飛行教導隊イレイサー隊』

「イガート隊？なんか事務報告でそんなの来たな。」  
隊長が顎に手を当てて言う。

「でもなんで1番機がないんだ？」

「さあな。あつちも大変なんだから。でも飛行教導隊に管制機まで送ってくれるとは……」

「なんすかそれ。」

航空機に関しては全く知識が無い。隊長に聞いたつもりだったが将校が答えた。

「空飛ぶオペレーターだよ。どこに敵がいるかとか、避難位置を教えたりする重要な奴だ。」

「ああそういえば前逃げる時に……」

避難位置を教えられたのも米軍の空中管制機だったはずだ。確かにE-767とかいう奴だった。

「飛行教導隊つーのはパイロットの先生達だ。イレイサー隊つてのがどれ程か知らんが、GPK内で上位である事は間違いない。」

「ふん……」

「機体は……トーンードが5機、フロツガーが2、ユーロファイターが4機、グリペンが1つにラビが1つ。かなりの量だな。」

「全部東欧方面の機体だな。実績は信用できるのか？」

隊長は画面をみて首をかしげる。

「おいおい……こいつら戦果がおかしいぞ？戦艦4隻ってどういふことだ……」

「見栄張ってるんだろ、きつと。何時来るんだ？」

「予定では4日後。この基地の再防衛戦に参加するそうさ。」

「そうか。つてことは此処に留まられて話か。」

俺宛のメールに再防衛戦に参加？とはいえそう考えて間違いなさそうさ。

「んじゃ、解散だ。しばらく皆休め。……それで、再防衛戦について……」

隊長は俺達を手であしらうと、将校と作戦の話 시작했다。

……

秋田と共に自販機を目の前にする。電気が通っておらず、よく考えたら金も無い。

「はあく・・・再防衛って事はまた激戦区になるのか？もうあんなのは勘弁して欲しいわ」

「全くだ。全滅した部隊もいくつかあつたしなあ・・・」

秋田が自販機を蹴りつけた。当然落ちてくるはずもない。

「やめとけやめとけ。どうせ中身空だろ。」

「あく喉渴いた。断水に停電だし、補給部隊は来る気配もない。外を見たら吹雪になり始めていた。」

「さつきまで暖かかったのにな。」

「もう11月も末だからな。」

階段に座り込み、ダラダラと寝転がる。

「そうだ、ライフルのメンテ・・・」

89式小銃を取り出し、分解を始める。コッキングハンドルが何かに引っ掛かる。

ボロボロと階段から部品をこぼしながらも火薬の汚れを拭いていく。

「うーわ・・・ボルトにヒビ入ってる。もう駄目かも。」

「あ、俺のも頼むよ。」

そして秋田のも分解してみるが、俺のと同じぐらいボロボロだ。

「うーわ・・・こりやもう直せないわ。」

「マジかよ。どうすんだ？」

悩んでいるうちに兵士達がワイワイ言いながら滑走路の窓を眺め始めた。

「なんだなんだ？」

雪が降りしきる滑走路に輸送機が止まった。

「補給機だってよ！GPKの奴が先回りしてきたらしい！」

「え？マジで？」

兵士達は笑みを浮かべながらざわつき始めた。

「どうする？」

「手伝うか。」

俺達是我先にドアを出て、輸送機まで走った。ドアが開く。

『うゝむ 世界は何処でも雪だな。』

英語でボソツと呟いた中高年の男。

『おい、アンタ！補給って本当か？』

『おお自衛隊か。たんまり持ってきたから手伝え。』

後ろのハッチが開くとコンテナの横からマガジンのないライフルがボロボロと零れ落ちる。

「うわっ！なんてズボラな積み方するんだ！」

旧型の銃が何丁もビニールテープで束ねられていた。

『何言つてつかしらねーがさっさと持っつてくれ。』

吹雪が降りしきる仲、俺達は荷物を運んで回った。

かなりの物資が積まれていた。殆どが食糧と弾丸と銃で、運び終わるまでに自衛隊が総動員して30分もかかった。

ロビーは黒い塊で一杯だ。自衛隊員が補給に管制を上げながら思いの物を持っていく。

『いたいた。お前さんか。』

背中を叩かれて振り返ると、そこには飛行機からでてきた背が低めの中高年の男が居た。

『貴方は？』

『GPKで火器管理室を任された男さ。武田古と面識がある。』

『あ、アイツとですか。向こうでどんな話を？』

『別になにかを話したわけじゃない。だが、有名人の友達とあつちやあ媚を売らんとたる。』

『そうですか。それは有難う御座います。こっちももう武器がボロボロなんで助かりました。』

『目の前にあるのは全部中古品だ。こっちだ、お前ン部隊を呼んで来い。』

『え？あ、はあ・・・』



丁度近くに隊長が居たので、召集を任せて先に行く事にした。

寒さの残るハンガーに入った。輸送機の中はまだ暖かい。

緑色のコンテナが2つ、機の中に入っていた。

「大事な物はズボラにできんからな。」

そんな事を言いながら彼はコンテナを開けて電灯を照らす。

「おお・・・」

「こりゃ銃器規制も終わりだな・・・」

隊長と秋田が思わず声を上げた。傷一つ無い整理された銃器の棚が目の前に並んでいる。

「全部新品だ。ちよつと値は張ったがな。」

X M 8やF 2 0 0 0、A K 2 0 0 0やM 1 4 E B Rまで様々な国の銃が並んでいる。

「これくれるんですか？」

「あんた達の分隊だけな。後は有料だ。」

新品なだけあって、全ての銃にまだ光沢とグリースの匂いが残っている。

「これだけあると逆に迷うな。」

「ブルパップって奴が使ってみたかったんだ。俺ファマスにするぜ！」

秋田はブルパップの銃を手にとって構えた。仲間に向けるなど隊長に頭を叩かれる。

「あれ？良く見たらファマスじゃない・・・」

「そいつはカイバーだな。イランの奴だ。ファマスよりコレを使っただほうがいい。」

彼は似た形の銃を投げ渡す。

「タポールだ。ファマスよかずつと強いぞ。」

不満げな顔をして秋田は銃を受け取った。

「お前にはコレだ。高級品だぞ。」

俺の手に渡されたライフル。ドイツのG 3に似ているが、少し違う。

『H&K 41だ。2千ドルもするんだぞ。有難く貰っとけ。』  
2千ドル、およそ15万円ぐらいだ。

『有難う御座います。』

銃剣にホロサイト、肉抜きされた固定ストックにフォアハンドグリップとバイポッドとフルカスタムだ。

「よかつたな。俺はコレ貰ってくぞ。」

隊長はシグ556を持って行き、島根はAUGA3を持っていった。  
『貰ったからにや、すぐ死ぬんじゃないぞ。そんじゃ、な。』  
武器の補給は十分。戦力も空軍の小隊が来る。

4日もあれば万全の状況で迎撃戦が出来ることだろう。

.....

2日後

「これでいけるか？」

レバーを片手に仲間に問いかける。

「どうだろう。やってみないとだな。」

みんなは入り口の近くで銃を構えていた。

「いくぞ。1、2の3！」

レバーを引くと、低い音が遠くで聞こえた。赤と黄色と緑のランプが綺麗に光り輝き、電球がついた。

「よっしゃ！電力が戻った！」

空港の電球がついた。管制塔のレーダーも戻り、通信も回復。電話も通じるようになった。

「やっぱりもぬけの殻だったか……」

「そりゃ撤退した後ですもん。さ、帰りましょう。」

変電所からジープで戻り、空港へと向かった。

空港へ戻り、俺達は暖かい一斗缶の焚き火の側へと寄った。

「空港内で火つけるなよな・・・」

「そういうお前も暖まってるだろ。秋田。」

迷彩服を新調し、俺達の体は白い色に変わっていた。

管制塔の電力が復帰した為に、中に居る兵士達は慌しく走り回っている。

「聞いたか?! 韓国軍がまた編成始めたらしいぞ!」

「ああ聞いた! またこっちに来るかもしれねえな! 対空砲の設置はまだなのか?!」

「対空装甲車両を海岸側に向けとけ! 今のうちに防御を固めるんだ!」

「爺さんはどこだ! シモノフを持ってたはずだろ! 安もんでもいいから対空戦闘に備えろ!」

「ステインガーとか無いのか?! 空自の戦闘機は今何処にある?! 米軍は!」

秋田はその様子を見て溜息をついた。

「配備、間に合うのかねえ・・・」

「どうだろ・・・俺達は此处でゆっくりしよう。」

「そうだな、対空戦闘なんてできないんだし・・・」  
「だからしていると言を叩かれた。」

「バカヤロウ。できないならやれるようにすんだよ。」

「隊長・・・なんすか?」

「ほら、お前のだ。大智。」

「はい?」

馬鹿でかいHUD付きの銃を渡された。秋田は双眼鏡を渡される。

「対戦車ライフル、ゲパードM1だ。アシストは秋田、お前がやれ。」

「マジすか?!こんなんで戦えつて!?!」

「オメオメとやられるのをみてるのか?戦闘機相手に?」  
「どうやら俺達も戦わせられるらしい。」

「はいはい・・・頼んだぞ相棒。」

「お前達は戦闘が始まったら非常階段から滑走路を狙う奴を狙え。  
距離的に厳しいだろうが、任せたぞ。」

「はいよ・・・。」

しぶしぶ持ち場へと重たい銃を持って移動する。

非常階段の3階。滑走路一面が見渡せる広い場所だ。除雪車が雪を  
掻き分けてるのがよくわかる。

「白銀の世界って奴だな。」

滑走路は雪で埋もれて、真っ白だ。新潟の冬は早い。

ま、明日には流石にこないだろうからな。今は休んどけ。

「はいよ・・・こんなライフル一丁で勝てるのかねえ・・・」

HUDには秋田の双眼鏡で指定した敵兵器をマーキングするシステムがある。2人で協力して近づく相手を狙えという事だが。

「こんな長距離で航空機を落せるのかね・・・」

滑走路から非常階段までの距離はおよそ500m 対空機銃ならまだしも、ワンショットワンキルを狙えという無茶ぶりだ。

だが、時は待つてくれない。

更に2日後。午後4時半

「今日にはGPKが来るって言ってたよなあ。」

既に夕焼けが海に沈む時間だ。

「そつだなあ・・・連絡着かないし、何してんだろ。」

皆防空体勢でじっとして動かない。

敵機接近！国籍不明ツ！防空戦闘準備！

俺達は溜息をつく。そしてその後には大きく息を吸い込んだ。

緊張感が動脈を駆け巡る。血管に硬い血液を流し込まれたようだ。

数・・・数・・・およそ20機ツ！

「は・・・ハア！？20?!」

秋田が双眼鏡を覗くが、まだ距離が遠くて見えない。

わからん！レーダー反応が曖昧な奴が居る！J-20かもしれない

！とにかく迎撃態勢だ！

海へ向けて対空機銃が向いたのが見えた。こちらでもHUDを覗き込んでライフルを構える。

「・・・きやがった！多いぞ！」

徐々にHUDに四角が増えていく。視界には無数の緑色の四角があり、目で数えるのは不可能な数だ。

え、援軍の信号が到着！イガート、イレイサー隊です！

こちらの未到着の援軍の数はたった6機だ。その6機が先に落とされてしまえばこちらに勝ち目は…

やーっほーう！皆聞こえてるかあ〜？燃料積んでたら遅れちまつたよ！

パイロットの声だ、無線機が通じたらしい。

ジヨバンニうるさい！こちらイガート隊のサラとジヨバンニです！コールサインは・・・あー、まだありませんでした。

人の事言つてられないイガートツ！。こちらイレイサー隊1番機のマリオ、コールサインはスパローだ。

英語でなにやら空は楽しそうだ。そんな状況じゃないはずなのに。

E-3空中管制機の佐藤ケイトです。迎撃戦闘を開始します。敵機、J-8が6機 J-9が12機 J-11が4機、ステルス機の数は不明です。

管制官はかなり流暢な日本語を喋っている。その上落ち着いた様子だった。

行くぜ野郎共！3、4番機は両サイドの4機を狙え！  
了解です。フォックススリー！

ミサイル発射の合図は出たが、何も変わる気配がない。

「・・・？おい！もう敵が近いぞ！」

既にHUDには秋田のマーキングが着いている。

敵機が海岸に差し掛かった途端に、一気に左右に散らばった。

「え・・・」

グガアアアンと爆音を立てて8つの線が飛んできた。

「耳がツ・・・！」

ミサイルが散らばった敵に向かって飛んでいく。遅れて6機が爆発した。

イレイサースリー、フォーが3機つつ撃墜！

よし！イレイサー隊ブレイク！逃げたのを追いかける！

今度は自分達の頭上を戦闘機が通り抜けた。三角形のイカの様な形をした機体が4機左右に分かれて、再びミサイルを撃ち放つ。

管制機より！地上部隊は向かってくる敵を全力で迎撃してください！  
い！

HUDの動きが綺麗に分かれた、中央の8機が真直ぐ向かってくる。彼が居ないとちょっと怖いわね。突っ込むわよジヨバンニ！

アイアイサー！

HUDをじっと眺め、敵のキャノピーが見える様になるまでひきつけていたら、今度は上から2機が地面に突っ込む様に機銃を撃ちながらダイブしてきた。

3機が炎上しながら飛行場の上を通り抜け、更に2機が対空機銃で撃墜されパラシュートが開く。

突っ込んできた2機の機体は地面スレスレを抜けて再び上空へと抜けていった。

「な、なんつー戦い方だ！無茶苦茶すぎる！」

既に敵機が半分近く消えていた。その上先手を打った4機は既に後ろに張り付いて敵機を追い掛け回している。

「大智！HUDに映ってない敵が来た！目標を指示できない！」

既に前方180度に敵機は無かった。しかし黒い点がいくつかこちらに向かつて飛んできている。

「ステルス機接近！対空砲火！撃ち返せ！」

秋田の無線指示で対空機銃の火の手が上がったが、黒い点はやがて大きな線となってこっちに向かつてくる。

「どれでもいい！撃て！」

中央の機体に向けて対物ライフルをぶつ放した。ちゃんと真ん中に納めて狙ったはずだが、平然とこちらに向かつてくる。

「危ない、下がろう！」

秋田と共に非常口へ飛び込み、更に横へと2回転。

鉄のドアを10m以上もぶつ飛ばして機銃がすぐ横を通り抜けた。

衝撃で脆くなった窓が何枚か割れた上に、非常階段は崩れ落ちていく。

「あ、あぶねえ・・・」

掠っただけでも致命的だっただろう。

『航空機部隊へ！今ステルス機が空港の上を通り抜けた！』

秋田が無線を片手に叫ぶ。俺達は別の場所を見つけようと廊下を走った。

こちらイレイサーワン、了解だ。目視できる。3番機着いて来い。

もう俺達の手にも負える戦闘ではない。窓から空を見上げても、戦闘機達はどれが味方かも解らない。

地震のような衝撃が体を揺さぶった。

滑走路に直撃弾！どっからの爆撃だよ！

滑走路のど真ん中に黒い煙とぽつかり空いたクレーターがあった。

上は混戦してるわ！地上で何とか見分けて頂戴！

んな無茶な！うわ！こつち来た！

対空機銃の兵士達が逃げた。爆弾が機銃に落ちて黒い煙が上がる。

まあこれぐらいだったら大丈夫よ。いざとなったらタキシングウエイに降りればいいし。

イガートツ、それじゃタイヤが傷つくぞ。

確かスパローと名乗った奴の声だ。

滑走路に着陸したければどくぞく。グリペンの私は道路にも着陸できるし。

ハンマー隊が下りられないだろ。ってか地上部隊を守ってやれって。

今やってるわよ！ジヨバンニ、今左に逃げた奴追っかけて。

全くもう、察機使いが荒いんですよ。武田隊長が早く戻ってくればなあ……

「た……武田？いま武田っていわなかったか？」

「おい！きたぞ！」

1機が滑走路に来た。会話と同じ流れで、もう1機が滑走路に来てる相手を狙っている。

ちよつと、待って……サラ！こつちに一杯来たんだけど？！

更にその後ろに3機が来た。

だったらブレイクしなさいって。

それじゃ地上部隊が危ないじゃないですか！うわロックオンされた！ごめんなさい！逃げます！

追いかけられるジヨバンニと呼ばれた機体は横に逃げ出す。

イレイスフォー、イガートスリーの援護に向かいます。

「おい！こつち来るぞ！」

ジヨバンニが追っていた敵が真直ぐこちらに向かってきた。

滑走路に爆弾を落とし、俺達の頭上を通り抜けようと魚の骨の様な



戦闘機が近づく。

秋田が双眼鏡のスイッチを押した。HUDに矢印が表示され、こちらに向かってくる戦闘機の四角が赤く染まっている。

「チャンスだ！やれ！」

「も、もうどうにでもなれ！」

10キロにもなるライフルを上に向けてHUDの中央にアイアンサイトを持ってくる。少し照準を前にし、引き金を引いた。

ドガンツ！と強い衝撃と共に硝煙が舞い散った。尻餅をつき、肩が外れたかと思うほど痛い。

「やったぞ！エンジンにぶち込んだ！」

当たったかは見えなかったが、秋田がそう言っていた。

対空機銃・・・かしら？敵が1匹口スト。滑走路の状況を教えてください。

日本語のアナウンスだ。確か管制機の佐藤ケイトとかいう・・・

『6発貫つてる！地雷かどうかは不明だ！』

了解です。引き続き戦闘を行ってください。

「ヤベツ！」

秋田が俺の手を引っ張った。

こちらイガートツ！、2機撃墜したわ！

彼女が撃墜した機体がこちらに向かってくる。ライフルを捨ててとにかく走った。

対戦車ライフルに直撃し、火薬に爆発しながら機体の破片が飛んでくる。

『へい！落す方向ぐらい考えろやー！』

秋田が英語で無線機に怒鳴り散らす。

あらごめんなさいね。こっちもそんな余裕ないもんで。

『あとで覚えてるよ！』

上等よ。それが援軍に対する言葉かしら？

頭上を通り抜けた戦闘機に秋田は中指を立てた。

サラもこの間までずっとメソメソしてたクセに。

ジヨバンニ！後で後悔させてやるわ！

おゝ、敵機より怖いや。ははは。

機体の横から攻撃しようとする戦闘機を後ろに居た味方機がミサイルで叩き落した。

J-20 撃墜！サラ、レーダーに頼りすぎだよ。

う、うるさいわね！これでチャラにしてやるわ！

はっはは。可愛い。

馬鹿にしないでよね！もう！

敵機の攻撃が緩まった。飛行場から離れているところを見ると、再編成しようとして試みているのだろう。

こちらイレイサーワン イガートツー いけるか？

いけるわ！指示をお願い！

君は230を、俺は280をやる。

了解！フォックススリー！

北を0とするなら、230は南西、280はやや北西だ。多数のミサイルが敵機の尻に飛んでいく。

敵機消滅。敵戦力レベル残り20%です！

地上部隊の会話なんて全く聞こえず、上での戦闘に見入る者さえいた。

うおわ！機銃を貰った！どっからだ？！シザースツー、ベイルアウトする！

進路をこつちに取った味方機が1機遠くに落ちてきた。丁度俺達の目の前に彼は着地する。

『こつちだ！』

『いやー油断した。悪いね。』

パイロットは苦笑いしながら空港の中へ入ってくる。

上だ！奴ら上空に逃げてやがった！

空軍達は編隊の間隔をあける。

どうしましょう。そろそろハンマー隊が着ますよ？

俺の予想だが・・・管制機！戦艦の姿は確認できないか？！  
え〜と・・・判別できないけど船が何隻か接近してるわ。

英語の方はちょっと日本語訛りがある。一体どんな管制官なんだろうか…

ステルス性に任せて乱戦の間に隠れて対空兵器を潰すつもりだったんだろうな。

なるほど・・・ってことは相手は短距離ミサイルと対地爆弾しか積んでないと見た。

ロククオンも真後ろに着かなきゃ難しい。条件は同じだ。

しばらく沈黙が続いた。15秒程だっただろうか。

ハンマー隊が接近！続いて敵上陸艦が移動を開始しました！

よし！上がるぞ！イレイサー隊全機、レーダージャミング開始だ！

交差するように敵の機体が姿を現す。その数2機。

下に居たイガート隊と呼ばれる部隊は散開し、対空機銃に向かう3機を追いかけた。上に行ったイレイサー隊もループを画いて3機の方へ向かう。

ジャミング中は何も聞こえず、ただジェットの音が凄まじく周囲に響いていた。

『あゝあ、落ちなきやよかったぜ。落せれば大金だったのに。』

『なんでそんな平然としてられるんだ？』

思わず聞いてしまった。撃墜されたにしてはヘラヘラしすぎている。

『いやゝ無傷でベイルアウトできたのが奇蹟だ。敵さんのミスに助けられたってとこだな。』

『そ、そうなんだ。』

『そーだよ。後で隊長に怒られるけどな・・・』

彼はヘルメットを外した。兵士のクセに髪の毛が長い。

『いやー、イガート隊は聞いていた以上にお喋りだな。隊長さんは無口だって聞いたけど。』

『へえ・・・どんな隊長なんです？』

『日本人だよ。S A Sにスカウトさせられて初任員、内閣を暗殺を率先したのもそいつだとか。』  
夏頃そんな話を誰かから聞いた。確かS A Sのジョンだった記憶がある。

『それってまさか・・・武田古?』

『そうそう。そいつだよ。知ってんじゃない。今は居ないけどな。』  
イガート隊の1番機。それが今のアイツらしい。2番機はスウェーデンのサラ、3番機はイタリアのジヨバンニで全員国籍が違う、と彼は話してくれた。

『で、そいつは今何処に?!』

『初任員の仕事で別行動を取ってたらしくてな。俺達は太平洋から来たが、彼はユーラシア側から来るそうさ。』

『いつ頃合流するんです?!』

イガート隊の隊長なら、アイツは此処に必ず来る。

俺の熱意に彼は顔を背けた。

『・・・それがネパール上空を飛んでいたら撃墜されたって報告があった。俺達が離陸するつい3分前：15時間前の話だ。任務に支障がでると困るから、まだ彼の部隊はそのことを知らされていない。』

『そんな・・・!アイツが撃墜!?!』

『落ち着け、まだそう決まったわけじゃない。撃墜はされても俺みたいに脱出してる可能性も大いにある。とにかくこの任務に集中しなきゃならない。』

彼は空を見る。

イガート隊と中国のJ-20の2機が宙返りの競り合いをしていた。それもかなりの高速と爆音で。

『とはいえこれじゃ介入できないがな・・・』

1機が思い切り下降してきた。地面近くで再び再上昇を始める。

『アレはイガートの2番機だな。』

赤色に縁取られたラインと藍色のボディ。毒毒しい警告色の様な色

だ。  
上に1機同じ色の機体が追い掛け回されていた。突如背中側のエアブレイキが開き、旋廻しながら速度を下げて戦闘機との距離が縮んだ。

下降したもう1機が後ろを取る。そして追いかけていた飛行機は機首を真下に下げてブレイキを畳んだ。  
機銃を放つが当たらず、敵は左右に別れた。

2番機はそのまま左旋回し、敵を追う。3番機は上昇を始めた。  
くっそ、ジャミングが切れた！

イレイサー隊の隊長が悔しそうな声を上げた。無線が回復し、彼らの苦しそうな声が聞こえる。

追いかける2番機は突如速度を下げて目の前の機体を諦めた。その動きに乗じて右に分かれたもう1機が後ろを取る。

ジョバンニツ・・・ゲホツ！ Now shoot it・・・！  
サラの苦しそうな声と共に、上昇した3番機がループを描く。  
彼女の後ろについた敵の頭の上で機銃を撃ち放った。そのままジョバンニは再上昇し、サラもそれに続く。

援護・・・オエ！ イレイス・・・ヘルプ・・・！  
サラ！しつかり！機体を平行に保って！

ジョバンニが彼女の側に寄った。まるで寄り添うつがいの鳥だ。  
下から狙おうとする機体に横からイレイサー隊が2機、機銃を雨の様に撃ちながら突っ込んでいく。

諦めた1機はすぐに向きを変えた。しかし、今度は違う機体の機銃で撃墜させられる。

こちら第7攻撃飛行隊ハンマー隊の永野だ。コールサインはジャツジメントですの・・・なんてな！ははは！

豪快な男の日本語だった。というか名前も日本人だった。何処かで聞いた様なキャッチフレーズと共に、ハンマー隊は海へと向かう。

こちらイレイサー・・・ワン！、ハア・・・何とか撃墜した！後は任せたぞ！着陸だ！

援軍達はボロボロになった滑走路にそつと着陸し、タキシングウェイを無視してゆっくりハンガーへと向かってくる。

敵艦、進路を変更。撤退の様です。

ハンマー隊、追撃するか？対艦ミサイルは詰んで無いがGPS誘導ならいけるぞ。

後のことを考えると、燃料を哨戒飛行に取って置いた方がいいです。着陸してください。

なんだよ。俺もイガートみたいに戦艦を叩き落したかったもんだ。

来たばかりのハンマー隊も、レドームをつけた管制機も着陸し、ジャンボジェットの入る巨大なハンガーへと入った。

防衛は被害がそれなりにでたものの成功を収め、大勝利となった。

パイロット達はへろへろになりながら戦闘機から降りる。

「うぐ・・・オエエエ！」

女性パイロットが涙と嘔吐塗れになりながら戦闘機にかけた階段から転げ落ちる。

「サラ！サラ、大丈夫！？」

同じカラーの機体から飛び降りた若い男。ヘルメットを投げ捨て、彼女の元へ駆け寄る。

「ゲホツ！なんとか・・・大丈夫よ。有難う。」

「大丈夫に見えないよ！息できる！？」

「うっさいわね・・・でも有難う・・・」

手を握ってふらふらと歩き始めた。臭い匂いも2人の間には関係ないのだろう。

「おい！風呂用意してやれ！才崎！おめえだよ！」

「は、はい！」

待合室だかにあったはず、2人を連れて急いでシャワー室に向かっ

た。

6時間後。

『ん~~~~~！よつく寝たあああ！』

シャワーを浴びせたサラはすっかり回復し、ジヨバンニも安心して  
いるみたいだ。

地べたで寝るよりは待合室のソファの方がずっと寝心地がいい。

それにしてもサラは随分美人だ。ジヨバンニの方もかなりのイケメ  
ンで、特に声が澄んでいる。

『いや〜日本人さん、ありがとね。シャワーなんて2週間ぶりに浴  
びたわ。』

『どういたしまして。お二人は恋人関係？』

降りたときのジヨバンニの慌てっぷりをみれば、そう思えなくもな  
い。

『あっははは！そんなんじゃないわよ！セフレセフレ！』

彼女は手をぶらぶらさせて笑いながら否定した。見た目と違い、か  
なりの肉食系っぽい。

『なッ！サラ！それはないだろ！』

『別に私は恋人としてはみてないもーん。』

『そ、そんなあ〜。。。』

彼はがつくりと肩を落とした。

『女口説くクセなくしたらコンドーム外してあげてもいいわよ？』

『う、う。。。どうしてこうおっぴらにそういうこと言うかな  
。。。』

赤の他人を目の前に痴話をする凶太さ、どうやらジヨバンニは尻に  
敷かれているらしい。

『浮気する人は嫌いなのだ。でもアンタのそれ以外は全部好きよ。』  
彼女は金髪をなびかせて笑顔を見せた。ジヨバンニは顔を真っ赤に

して固まってしまっ。

こんな事を言われたら落ちない男は居ないだろう。

『ところで2人共、イガート隊だよ。』

俺が聞くと、2人の視線はこちらに来た。

『そうよ。私が二番機のサラ・エイジア。少尉よ』

『俺が3番機のジヨバンニ・ウォーレスです。同じく少尉。イタリアンです。』

『じゃあ俺よりずっと上かあ。俺は才崎軍曹です。あの、聞きたいことがあるんです。』

『何かしら？空軍転属？それともGPKに来るの？』

『いえ、貴方達の隊長さんについてです。武田古と、どんな関係ですか？』

『隊長ねえ。元々彼は私の後輩だったのよ。』

『後輩？』

『そ、イガート隊は元々私が居たスウェーデン空軍の1つの小隊。

GPKに左遷された時に彼と会ったの。その頃はまだ、隊長のベンと先輩のアマンダがいたわ…。』

彼女の表情が変わった。声のトーンも下がり、喋り方もゆっくりになる。

『実戦経験が無くて、やっと小隊に入れたと思ったらすぐにGPKに左遷されて…イギリスに着陸してすぐに彼と会ったわ。訓練飛行直後の彼に私が話し掛けたの。』

『へえ…それって確か、GPKが活動停止してる期間だった？』

『そう。ロシア側のスパイが紛れ込んで、此处、日本に来るのが遅れていたの。その Spanien で彼は空軍になっていたわ。』

話しかけた時、彼はまだ飛行機に乗り始めて3日…それなのにもうスティックを握って離着陸をこなしてたわ。』

ジヨバンニも顔を落とした。彼も別の出会い方があったんだろう。

『初任員って聞いた時は、何がなんだかさっぱりだったわ。日本の』



代表として来てる彼に生意気な口きいて、隊長に怒られたの。

でも彼は笑って話を続けてくれたわ。『俺も判らないことだらけだからな』って、うちの隊に入ってくれたの。それが始まりだったわ。訓練飛行では初のコンバットフライトなのに私と2度も相打ち。隊長にこっぴどく叱られたわ・・・でも、もうその隊長もアマンダも居ないの。』

『・・・戦死、だよな。事務報告に来てた。』

GPKの移設が決まったのは9月の末。

俺がジョンと大臣暗殺を企てている時期とピッタリ一致する。

『そう・・・本部がカナダに設置される事が決定されて、大西洋の横断中に中国の空母と交戦したの。その際にEMPミサイルで隊長達は・・・死んだわ。』

『その時に俺の部隊、ペガサス隊の隊長も殺された。俺が一人で戸惑っていたら、あの人俺について来いって命令したんだ。その時から俺もイガート隊に加わる事になって、今がある。』  
『凄いいめぐり合わせだ。日本でポーッと戦っていた俺とはスケールが違う。』

黙っていると、足音が聞こえてきた。こっちのドアに真直ぐ向かってくる。

『失礼します・・・』

低姿勢な女性が入ってきた。ブロンドのロングヘアで、年端も行かない顔着きをしている。

『あ、あの、えつと・・・』

『彼女が無線の管制官、ケイト・サトー。隊長の恋人さん・・・よ。』

『こ、こ、恋人だなんてそんな！臆病だから、私がただ着いていつてるだけです！』

彼女は顔を真っ赤にして首を振った。

『君、日本語喋ってたよね。』

『は、はい！貴方がその才崎さんですか?!』

どうやらプライベートの事を聞いている以上、ジョンが言っていた恋人で間違いない。

「・・・そうだよ。俺が才崎大智、武田の・・・恋敵だ。」  
愛の顔を思い出す。その度に、アイツの病室での絶望に落ちたような表情が思い浮かんだ。

「今度会ったら伝えてくれないか、すまなかった。って」  
「・・・なんだか気になる話だな。」

「そうね、できれば英語で聞きたいところね。」

「じゃあ、英語で話そうか・・・」

彼らに懺悔する様に、全ての事を話した。

要らないはずの高校時代の出来事も、自衛隊とのめぐり合わせも、妻の愛がアイツの初恋の人だった事も。

「へえ、隊長にそんなことが。」

「ハイスクールじゃ根暗だったなんて、とても信じられないわね。確かに口は悪いけど。」

イガート隊の2人は意外そうな顔をした。

「有難う御座います。でも、才崎さん。こういうのも複雑なんです  
が・・・」

彼女は真剣な眼差しでこつちをみて、深く頭を下げた。

「彼がGPKに来てくれなかったら私、今どうなっていたか判りません。気分は良くないかも知れませんが・・・貴方に感謝します！」

複雑な気分だった。

俺の力じゃない。愛が勝手に俺を選んだだけなのに、その廻り合わせなのに、勝手に感謝されるというのがだ。

「アイツは何て言ってるんだ？」

「・・・わ、わかりません。自分の感想は全然言わない人なんで・・・」

「アイツらしいな。」

中身は変わっていないらしい。やはり直接会って話をしないと駄目のようだ。

「ところで3人共・・・武田がネパール上空で撃墜されたって話聞いた？」

忘れてた話題を放り投げる。

「は、はあ！？撃墜！？」「何の話?!」「どういう事ですか?!」

口をそろえて3人は驚いた。余りの迫力に腰が抜けてしまう。

「そ、そのシザース隊の人から聞いたんだ。君達が任務に出る3分前にそう来たって・・・。」

「ちよつと来て！本部に問い合わせないと！」

「え？あ、ちよつと?!」

腕を掴まれ、猛ダツシユで彼らは将校の元へと向かう。

「ちよつと司令！うちの隊長はどうなってるんですか?!」

荒々しくドアを開き、敬礼も無しにサラは部屋に入った。

「ああ、これから報告だったんだがな。無事だそうだよ。今ロシアにいるそうだ。」

「ロシア?!捕まったの?!捕虜交換の予定は?!」

「いや、ネパールで中国側の反政府テロに会ったそうだ。その時に

ロシアの少女を保護して、そのまま代替機でロシアに行ったらしい。」

「それから!？」

サラの剣幕は物凄かったが、流星将校といったところか。意に介さない落ち着いた表情で言葉を返している。

「それ以上は無いが・・・とにかく無事だそうだ。国籍で差別をしない姿勢に世界の軍部が驚いているとかなんとか。」

「ちよつと・・・どういうこと?」

「もしかして俺達よりデカイ手柄立ててない?」

サラとジヨバンニは顔をあわせた。

「というかテロに遭って置きながら平然と保護して連れ帰る神経が判らない……」

「アイツならやりかねん気がしてきた……」

段々武田の存在が雲の上になってきた。

## 6話「帰郷」(前書き)

本土を完全に奪還した自衛隊と米軍とGPKの連合軍。  
戦局が安定し、大智は一度交代で休暇に入ることになった。

## 6話「帰郷」

サラ達はいつでも機体に乗り込めるようにハンガーに居座っている。対して俺達は見張りぐらいしかやる事が無い。重たいライフルを2つも装備し、欠伸をかく。

「なあ大智。スナイパーライフルとアサルトライフル両方持って重たくないのか？」

「いや、すげー重たいよ。ただ、その他の装備はあんまり持ってないからな。」

無線機は小型のもので、イヤホンを接続するタイプの物だ。後は弾と包帯ぐらいしか持ってない。

救いだっただのがスナイパーライフルがボルトアクションでマガジンが不要な点だ。

「しっかしな〜この新しい銃の性能を早く試してみたいぜ。」  
合成樹脂製のフレームが曇った光を反射する。すべすべしてそうな触り心地だった。

「あのオッサンは武器商人かな？あのコンテナの中はまるで別世界だったけど・・・」

「中古品とか言ってたしな。多分そうなんだろ。」  
気になることも無く、ただ空港を歩き回っていた。

「こんなところに侵入者なんてではすないしな〜」  
空港のソファアに秋田は寝転がる。

「そういつてると来るんだよ。フラグたてんな。」

「んなゲームじゃあるめーし、大体そんなこといつてたら皆死ぬだろうが。」

「別に死亡フラグとはいってねーよ。」

俺もソファアに座ると、エレベーターのドアが開いた。中からパーカーを来た30代ぐらいの女性が出てくる。

最初はなんの違和感もなく、彼女が歩くのをボーッとみていた。しかし、エレベーターへの電力供給は行われていないはずなのを思い出す。

「ちょ、ちょっとまった！そのアンタ！」

「いぎッ・・・しまった・・・」

呼びかけると彼女は肩をすくめて苦笑いする。

「どうしたんだエレベーターからでてきて！まさかずっと閉じ込められてたとか?!」

「あ、あはは。そうそう。巻き込まれちゃってね。」

黒髪だが良く見たら外人の顔をしていた。それにしても今の今までエレベーターに閉じ込められてたなんて...

「中でどうやって生きてたんです？具合は悪くありませんか？」

「だ、大丈夫ですよ。非常用の食糧がバツクに入ってますね。」

「1日ぐらいでしたけど。」

「そうですか・・・それは・・・」

健康なのを見てホッと胸を撫で下ろしたのだが、秋田が銃を構えた。「な、なんですか兵隊さん？」

「変だ。変電所は1月前から制圧されてたし、奴らが撤退する頃にはもう此処に電力は無かったはずだ。少なくともエレベーターには1週間も閉じ込められてたはずだぞ？」

「た・・・確かに。」

今でもエレベーターとエスカレーターは節電のために機能していない。

「もしかして去り際に敵軍が置いて行ったスパイかも・・・」

「そ、そんな！住民票もあります！免許証も！」

彼女はバッグから免許証をだして、俺に渡した。名前は加藤・リーシャ・沙織。34歳のアメリカ系ハーフだ。

「・・・本物かどうか問い合わせよう。大智、そいつを連れて来てくれ。先に行つて来る。」

秋田は免許証を持って電信室まで小走りで走っていった。

「信じて下さらないのですか？」

「うん．．．不自然な点があるとちよつとなあ．．．俺も疑いたくは無いんだけど．．．」

とりあえず銃のグリップだけは握っておいたが、どうにも撃つ気にはなれない。

「パスポートは？空港に来てるなら持つてるはずだけど．．．」

「もちろん持つてますよ！」

彼女はわかつていたかの様にすぐに渡した。

「．．．イギリスか。」

パスポートの内容はイギリス行き。でも逆にそれが怪しい。

こんな戦時中に旅行で、しかも占領下の新潟空港を選ぶ上に、電力の通じてないエレベーターから現れる。

これでは信じたくても信じられないのが最もだ。

「職業は？」

「ま．．．」

彼女は一瞬目を見開いた。焦った様な、何かを失敗した顔だ。

「ま？」

「まだないというか．．．今は世界旅行中で3年ぶりに家に帰ってきたんですよ。」

「なるほど、旅人だから職についてないと．．．」

彼女の言う事はもつともらしく、嘘をつく様な顔でもなければ、嘘をついている様な声色でもない。

待合室に行く途中で、突如大きな歓声が上がった。廊下に兵士達が飛び出してくる。

「聞いたか！本土防衛成功だってよ！」

「GPKの増援が効いたな！やったぜ！」

嬉しい速報だ。まだ戦争が終わったわけでは無いが、これで日本の家が每晚崩れることはなくなる。

「良かったですね。」

彼女もこの速報には喜んでいるみたいだ。



「そういえば君は日本人なのか？」  
「もちろんです。大正時代から家系は続いていますし、ハーフなのは私の両親からです。疑われるなんて酷いですよ！」  
「うーん・・・そうかぁ・・・」  
日本本土で生まれ育ったとなると、とてもスパイとは思えない。

待合室に入り、秋田を待つこと30分。

「・・・免許証もパスポートも本物だ。家が大正時代から続いているのもどうやらマジだ。」  
「ほーらぁ、言ったじゃないですか！」  
彼女は怒るが、秋田はまだ疑っている。

「うー、でも煮え切らないんだよね・・・エレベーターが・・・。」  
「で、で、でも。私の疑いは証明されたはずですよ！」  
エレベーターの件には焦っている。一体どういう意図なのだろうか？  
「まあ判ったよ。でもあんまりうるつくなよ。」  
「判ってますって。アクシデントには旅で慣れてますよ！」

彼女は頬を膨らませ、真直ぐ外へでていった。  
「変な人だったな。」  
「ああ。凄く変な人だった。」  
「どこも変じゃないですよー！」  
遠くで叫ばれた。どんな耳をしているんだか・・・。

それきり空港に居る間は一般人をみることは殆ど無かった。  
エレベーターをくまなくチェックしたが、特に何も無い。何処の階もドアは閉まっており、入ることも出ることも不可能だった。  
しかし、そんなことはすぐにどうでもよくなった。

気がつけば既に1ヶ月が経つ。新潟空港にはGPKの増援が多く寄せられ、俺達の分の食糧配給が減って腹が減ってエレベーター所じやない。

2015年 3月

本腰を入れたGPKは通信を回復させ、部隊を中国地方と沖縄の2つへ集中させ始め、俺達の空港も空軍の異動の命令がでた。

いの一番に援護に来てくれた3つの部隊は沖縄へと飛んでいく。

滑走路を出て行くのは可変翼部隊、日本人のナガノという人が隊長のハンマー隊だ。

「日本人もGPKにたくさん居るんだな。」

見張り中、一人滑走路を眺めて見送っていると、いつの間にか誰かが横に立っていた。

「そうだな。一杯居る。」

「貴方は？」

「・・・ま、会ったのは2年も前だしな。覚えてないかも知れない。」

笑顔でヘルメットを取ると、彼は山本さんだった。

「久しぶり。中々暴れてるそうじゃないか。」

「あ、あの時は有難う御座いますう・・・」

忙しかった為に存在をすっかり忘れていた。自衛隊の参加を促してくれた優しい人だった。

「なに、俺もイギリスに飛んでてね。お互い大変だったみたいだ。

はは。」

彼は笑いながらライフルの薬室を覗く。

「しばらく見ないと思ったら貴方も海外へ行ってたんですか。」

「ああ、大変だったよ。ヘリが撃墜されるわ、SASと共同作戦と

か。」

「ヘリが撃墜！よく生きてましたね。」

「ま、そこは奇蹟だったよ。その直後何があったと思う？」

彼はもつたいぶる様に聞いた。こっちも笑いながら聞き返す。

「さあ？何があったんでしょう。」

「武田君が助けてくれたよ。めぐり合わせつてのはあるもんだな。」  
こんなに意図的な偶然なら、本当にあるのかも知れない。再会は叶う。そんな気が、革新に変わってきた。

「SASとは俺も一緒に動きましたよ。内閣暗殺の件で。」

「あれは君だったのか！いや凄いな。まさか歴史を変えるとは。」

「無茶振り振られただけですけどねえ・・・。」

「いやいや、君達2人は本当に何かしてくれそうだよ。」

滑走路に別の部隊が降りてきた。駐車場には新しい機甲部隊が駐留し、顔の知らない仲間が沢山顔を見せる。

「自衛隊はまた撤退らしいな。」

「隊長。」

後ろから話し掛けたのは隊長だった。

「さ、迎えが着てる。行こう。」

「迎え？」

「此処から俺達は仕事を外れるのさ。第9条により、韓国本土侵略は自衛隊には参加できない。後はGPKに任せるんだ。」

後ろを振り返れば自衛隊の兵士達は皆トラックに乗り込んでいた。足が無い奴も居れば、腕が千切れている奴もいる。

「自衛隊は疲弊している。いや、日本は既に枯れているんだ。」

山本さんも少しやつれたような気がする。隊長も、秋田もだ。

「俺達も1年中戦ってたからな。よく生き残ってこれたもんだ。」

「さ、帰るぞ。」

「帰るつて？本部に？」

皆帰る気らしい。顔を見回すと、しかめっ面をされてしまった。

「・・・一番帰らなきゃいけない奴がコレだ。新妻に会って来い！」

「いでっ！？」

ケツを蹴られ、トラックの中に叩き込まれる。

「さ、揺れるぞ！」

隊長の掛け声と共にトラックが動き出した。

俺は振り返り屈強な男達に見送られてトラックに揺られていった。

・・・

## 5時間後

「あれ・・・此処って・・・」

俺が一番最初に自衛隊に志願した、さいたま市の駐屯地だ。

「ほら、邪魔だからさっさと出てけ。」

知らない兵士にトラックから追い出される。北とは違い、雪が無く乾燥気味の空気が鼻腔を通った。

「あれ？秋田は？」

「他ならもうでてったよ。アンタもとつと行っちゃまいな！」

まるで嫌いな動物を追い払うかのような扱いだ。

「忘れもんだよ！」

でかい拳銃を放り投げられ、渡された。

「これ俺のじゃ・・・」

「誰のでもいいからさっさといきな！忙しいんだこっちは！」

駐屯地の門をでて、一人ぽつんと取り残される。

とりあえずヘルメットを取った。訓練時代には丸坊主だったのが、剃る時間もなく4ヶ月。気がつけばかなり伸びていた。

車は昔と同じ様に入り乱れ、自転車で子供達が話しながら下校していた。曇りの空に、日が暮れ始めた。薄暗い中に電灯がつき始める。家は秩父、駅まで遠ければ金も持っていない。どこか行くあては無いかと佇んでいると、目の前で車が止まった。

ドアが開き、女性がこちらに寄ってくる。

「・・・やっぱり才崎君ね!？」

「どちら様？」

「武田古の姉『仁美』です……彼に！弟には会いました？！」  
凄い剣幕で近寄ってきた。近くで見ると、随分やつれた顔をしている。

「ま、まだです。でも無事だそうで……」

「そう……そう……無事……なのね。」

力なく彼女は膝から崩れた。受け止めようとしても体にまるで力が入っていない。

「大丈夫ですか?!」

「ごめんなさい……なんとか……」

「家に送ります。車借りますよ！」

武田の家は覚えている。彼女を助手席に乗せて懐かしさの残る道を走らせた。

車を車庫に入れ、家の中に上がらせてもらう。無数のダンボールと線香の匂いだ。家は静まり返り、電気も無い。

彼女は何も言わずに居間に座った。隣の小さな和室に見える質素な仏壇。

「……そんな……!」

そこにあつた写真は武田の両親だった。出ていたダンボールは御通夜を済ませた後のもの。

「父は空爆で、母は病気で……弟は出て行って、私の彼もうちの通帳を全部持って夜逃げしたわ……」

まるで幽霊の様に座ったまま目を落として動かない武田の姉。独り身になっているみたいだった。

「そっぴゃあいつ借金地獄だって……」

「最初はそうでもなかったの。ただ高めのローンで、私達が働けばすぐに返せた……」

「え……」

「学校でイラ着いてたでしょ……私が彼に貢ぎ続けたの。家にも帰らずに、勝手に金借りて行く内に、何時しか払えなくなってた。」

彼女は小さく笑い始めた。

「弟のバイト代もくすねた事もあったわ。ふふ、惨めよね。去年弟がバレンタインに1億も寄こしてくれたのに・・・返済する前に彼氏に奪われて夜逃げされて。あは・・・あははは・・・」  
酒に浸る金も無い。余りに不憫だ。

「しっかりとしてください！うちに来れば飯ぐらいは食わせて上げれます！」

「うふ、うふふ。優しいのね。でも結構よ。当然だと思ってるから。あは、はははは！」

涙を流しながら笑う姿は見るに耐えなかった。

「電話借ります！」

携帯電話を開いた。着信数は150、全て同じで借金取りからだった。

（こんなになるもんなのか・・・！）

気が狂うのも判らないではない。自殺する人の気持ちが始めて判った。愛の電話番号を入れて電話を掛ける。

・・・もしもし？どちらさま？

「愛か？俺だ！大智だ！」

・・・大智君？！今どこにいるの？！

「今、武田の家だ！事情は後で説明する！車で迎えに来てくれないか？！」

う、うん。判った！

通話が切れると、彼女は俺に抱きついてきた。

「有難う・・・本当に有難う・・・」

「・・・俺にも責任があります。あなたを独り身にさせた責任が・・・！」

彼女はしばらく泣き続けた。疲れていたのだろう、その内に眠ってしまい、愛がやってくる。

「大智君！」

「愛、この人を運んで！」

「た、武田君のお姉さん……」

「家で面倒みてやってくれ！放っておけない！」

「……うん、そうね！」

車に眠ったままの彼女を乗せて、俺達は秩父まで帰ってきた。

「ただいまー。」

仁美さんを担いだままドアを開けて中へ入る。

「おかえり。あなた。」

「はは……そんな感動的な帰宅じゃなかったなあ。」

「そうね。でも現実はそのなもののかも。」

彼女をベッドに寝かせ、居間のソファーに彼女と隣同士で座った。

目を合わせると照れくさくて逸らしてしまう。だが、彼女が抱きついてきた。

「2人きりで子供もいるのに、恥かしがっちゃって……」

「……そうだね。」

彼女の頭を抱き返す。甘いシャンプーの匂いが鼻をくすぐった。暖かい……銃の硝煙ばかり嗅いでたのが嘘の様だ。

「大智……？だい……ん？」

意識が遠くなっていた。ただ彼女の暖かさに溺れていく。

……

朝日とフライパンの音、そしてうるさいカラスの声に目が覚めた。

寝覚めはいいが本当につるさい。

「起きた？最近あの電柱に住み着いちゃってね。ごめんなさい。」  
彼女が朝食を作ってくれていた。

「アー！アー！」

「つるさいなあ……」

カラスと目が合った。首をかしげる仕草は可愛いが、つるさい事を自覚していない様で腹が立つ。

「コンニチワ！」

睨み合っていると挨拶してきた。

「喋ったあ！？」

「そうそう、たまに喋るのよね。段々可愛く見えてくるのよ。」

「ふん……」

「モーニング！マウントオールコーヒーハツバイチューー！ビョー  
ン！」

どうやらCMの声を覚えてしまっているらしい。

「そういえば何時頃疎開から戻ったんだ？」

2年前、家の近所の道路を見張っている時に、彼女は家を離れたはずだった。

「去年よ。むしろ疎開した長野県の方が危なかったわー。空爆の音がたまに聞こえてくるのよ。」

「へえ……疎開になってなかったじゃん。」

「まあね。でも生きてて良かった。」

テーブルに座ると朝食を置いてくれた。目玉焼きにトースト。いたって普通だ。

「何時頃まで居るの？」

「判らない。そのうち招集が掛かるんじゃないかな。」

「そう。長いといいな。できるならこのままずっと……」

愛は柔らかに笑みを浮かべて俺の手を握った。目の前のソファーには武田の姉が居る。疲れた表情で眠ったままだ。

「……このままずっと……この人は独りなのかな。」



「わからない、あいつが戻らなきゃね。」

あいつと会う本当の理由もできた。無理にでも連れて帰って家族を幸せにさせてやることだ。

髪の毛を口に垂らして仁美さんが起き上がった。

「あれ……」

「起きました？朝食ですよ。」

「あ……有難う。でも要らないわ。」

彼女は髪をバサツとなびかせた。ちよつとギャルっぽさが残るが綺麗な人だ。

「遠慮されると逆に処理が面倒なの。食べちゃって。」

「……ごめんなさい。頂きます。」

ちゃんと厚意を受け取ってくれた様だ。

「美味しい……」

涙目で彼女はサラダを頬張り始めた。かなり空腹だったのだろう。

「困った事があつたらすぐ相談してください。俺と武田の仲です。無関係なはずがありませんからね。」

「有難う御座います。これから仕事があるので……」

「まあシャワーぐらいは浴びていったら？」

「……有難う。使わせてもらいます。」

彼女は風呂場へと歩いていった。

「ウエーン！」

「おおっと忘れてた。竜道竜道……」

「タツミチ？」

彼女は赤ん坊を抱きかかえて持つてくる。

「そ、この子の名前……私達一家が龍の様な長い道にも耐えられるように……」

「それで竜道か……」

「うん。あなたと一緒に決められなくて、ごめんね。」

「いや、それでいいよ。きっと俺よりも立派な男に育ってくれるぞ。」

「

「・・・それだと息子に浮気しちゃっわ。うふふ。」

愛は目の前で胸をさらけだした。

「いつ・・・!」

「?」

なんの惜しげもなく竜道に母乳を吸わせる。当たり前といえば当たり前なのだが・・・

「むふっ・・・大智君ったら、スケべなんだから。」

「えあうぐうくすみません。」

「後で、ね。」

彼女はウィンクをして舌を小さくだした。情けない事に下半身が反応してしまう。

久々だったせいか、朝から夕方までずっとベッドで暴れまわっていた。

この2年間、本当に厳しい出来事ばかりだった。だが、65分隊の仲間は誰一人として死なずに家にいる。

自衛隊の海外侵攻は禁止されている。このまま戦況がよければ、俺はずっと愛と一緒に居られる事になる。

だが、逆に武田に会うことは無いだろう。時期が来れば、無理にでも戦争に戻らねばならない・・・。

2015年 7月

『中韓連合は一度戦争を取りやめ、停戦の装いをみせています。ロシアとネパールの国交回復中に、

中国人グループによる反戦派によるロシア要人への攻撃が鍵と見られ、中国側の国交の雲行きが悪くなったと述べられています。

これに対して米英は、攻撃をしておきながら停戦などと我田引水。

とコメントし、本土侵略の検討を率先して薦めており、今後の日本

政府がどう判断すべきかが悩まれています。』

テレビでもラジオでも、内閣暗殺の件は世界中で騒がれていた。もう1年前にもなるというのに、まだ次の首相が決まっていなかったね。」「  
「凄い事になったね。」「

「そうだな。」「

「ねえ、その銃は何?」

思わず持って帰ってきてしまった銃が3つ。GPKの補給の時に貰った突撃銃と、ボルトアクションの狙撃銃、そしてトラックに忘れてあった大きな拳銃だ。

「ああ?これ?高級品らしいよ。」「

銃なのは見れば判る。ただ、種類を言っても判らないだろう。

「へえ・・・危ないから家で振り回さないでね。」「

「判ってるよ。押入れの奥にでも閉まっておくか・・・」「

「あー!ちよつと待つ・・・。」「

押入れを開くと布団が飛び出てきた。まるで漫画だ。

「もー!待ってっていったのに!」

「整理ぐらいしろよ・・・。」「

そういえば見えないところはズボラだったのを忘れてた。後でトイレ掃除しなくちゃ・・・

10月

3ヶ月経って尚、大滝隊長からは何の連絡も無い。竜道は乳歯が並び、立ち上がって膝の上に乗っかろうとしてくる。

「おーし、トイレだ!竜道こっち!」

手を引つ張ってトイレへ行こうとすると、すぐに手を振り解く。

「こっちだぞ〜。竜道、ほら。」「

手を叩いても注意を向けるどころか、そっぽを向いてしまった。

「はいはい、パパどいて。竜道ーこっちよー!」

愛が呼ぶと笑いながらそつちへ行ってしまった。

「やっぱり家にいなかった所為かなあ・・・」

「多分ね。ま、そのうち何とかなるわよ。」

「そつちな。そんなもんだよな。」

愛はなれた手つきで竜道をトイレに連れて行く。そろそろ離乳食の時期にもなってきた。

2年間も世話ができなかった分、甘えさせてやりたい。それ以前に2年間も愛に竜道を押し付けていた自分が情けなくて仕方なかった。「ハア・・・他に仕事があればなあ・・・」

溜息をついて愚痴をもらした。戦場に出ている方はもっと疲れると言いたい、それとコレとは別の話だ。

電話が鳴った。2人はトイレトレーニング中なので当然俺が電話に出る。

「もしもし？才崎ですけど？」

おう、才崎。秋田だ。休暇の期間が決まったぞ。

「そつか。何時までなんだ？」

これで家族と一緒に居られる時間が決まるのだ。緊張せずには居られない。

状況の悪化によつちや緊急で出される場合もあるが、3年間だ。

「さ、三年？そんなに出来るもんなのか？」

普通は半年ぐらいだろう。とはいえ3年もあれば戦争が終るんじゃないだろうか。

俺達は内閣を始末した件がある。ほとぼりが冷めるまで待機だそつだ。ま、喜んでいいんじゃないか？

「そつだな・・・ところでお前は何してるんだ？」

あ？俺か？俺は・・・別に何もしちゃいないさ。

何か表情が暗い言い方だったが、詮索はしないでおつ。

「そつか。連絡ありがとな。」

どういたまして〜そんじゃまたな。

通話が切れた。秋田は一体何をしているのだろう。

「電話なんだった？」

「休暇は3年だつてさ。緊急が入らない限り。」

「そっか・・・よかった。3年も休みがあるんだ。」

彼女は安心してくれたみたいだ。

「ぱぱ、どう〜どう〜！」

ズボンの裾にしがみ付いて竜道がこちらを見上げていた。

「ん？」

「抱っこよ。落さずに持ち上げてあげてね。」

ついに懐いてくれたのか、俺は竜道の脇を抱えて胸まで持ち上げる。

「でんわ、でんわー」

受話器に手を伸ばして、俺の真似をしたかつたみたいだ。

「はは、可愛いな。」

なんて無邪気なんだろうか。頭を撫でていると、愛も密着してきた。

彼女は余り胸は無いが、すごく暖かい・・・。

「生きてて・・・よかったね・・・」

愛は竜道のオデコにキスをした。

・・・

11月。

段々疎開に出ていたご近所さんも戻ってきた。子育ては大変だが、愛が居てくれるおかげで苦ではない。

「そっいえば愛、給料は振り込まれてるのか？」

「大丈夫よ、心配しないで。ちゃんと来てる。」

「そっか。よかった。」

明細を見れば、年収に直して500万、結構な額だ。命掛けた割に

は全然合わないけど、愛が安定して生きていられるのは嬉しい。

ピンポーン

給与明細を見ていたら来客だ。

「はい。どちら様・・・」

ドアに向かって歩き出した矢先。

ピンポーンピンポーンピンピピンポーン

凄いい連打だ。じゃなくて一体こんなことをするのは誰だ？

「こら、ゆり、やめなさいってば。」

女性の声だ。ドアを開けてみると、そこには竜道と同じぐらいの子供を抱きかかえた30代ぐらいの女性が居た。

「どちら様？」

「あ、すぐ側の花屋の高橋です。覚えていらつしやいますか？」

抱きかかえてる子供はインターホンに目一杯手を伸ばしていた。犯人は赤ん坊みたいだ。

「あー高橋さん！どうしました？」

愛が廊下の奥で声を上げ、竜道を抱えてやってくる。

「帰ってこれたんです。隣人さんはまだ居ないのでしょいか・・・」

「ええ、でもそのうち帰ってくると思うわ。」

2人は世間話を始め、竜道と友里恵ちゃんは家の中にあがっていった。

世間話で俺は完全に蚊帳の外。2人のお守りをすることにし、いつの間にか退屈で寝てしまった。

寝心地が悪い。何か鼻に詰まったような感覚だ。

「竜道、汚いから止めなさい。」

「おーおー。」

急に鼻の奥がスー・スーする。目を覚ましてみれば唇に鼻水がべつと  
りついていた。そして竜道の指にも。

「だ、大智君。ティツシュティツシュ！」

どうやら竜道が鼻の穴に指を突っ込んでいたらしい。今度は酸っぱ  
い味からどこかで味わった味に変わった。

「は、鼻血か・・・」

両鼻から大量の鼻血がでていた。かなり奥まで指を突っ込んでいた  
みたいだ。

「もー竜道！駄目でしょ！」

愛が表情を変えただけで竜道の顔も変わってしまった。

「えぐ・・・うゝええええ！」

「なあ愛。まだ物心もついてないんだから叱らなくてもいいだろ。」

「こついうのは早い段階からやっておかないと・・・」

「まあまあ、それも子供だから可愛いじゃないか。」

笑顔を見せると竜道は助けを見せるように俺に手を伸ばした。竜道  
が愛を見る目は、怖いものを見る目。なぜだか知らないけれど、そ  
んな気がした。

竜道を受け取って抱き寄せると、涙をポロポロ流して愛の方を見つ  
める。

「もつ、甘い人なんだから。でもそこに惚れちゃったからなあ・・・」

苦笑いしながら彼女は竜道の頭を撫でた。

子育ては大変だ。でも、立った時や喋った時は嬉しい気分になる。  
だけど時折、見ててとても寂しい気分になるのは何故だろう？愛と  
一緒にいるのは凄く楽しいし、心が落ち着く。

それでもなんだか竜道を見てて不安になる。まるで泣いている竜道  
の涙が自分の様にみえてくるのだ。

過保護な親とはこんなものなのだろうか？物心もついていない子供  
の涙が、自分のものと投影するものなのか？

鼻血が竜道の頬に滴り落ちた。まるで血の涙を流している様に見える。

血を見ると、戦争の時のことを思い出した。最近のものから過去の記憶へと。

思い出している間はずっと竜道の顔を眺めていた。子供と血。どす黒い色は蒼アザを思い出す。

「……………大智君？」

いつの間にか手が震えていた。涙も出ていた。思い出してしまった。竜道がずり落ちそうになり、愛が受け止めた。2人は戸惑いながら俺の顔を覗いている。

「どうしたの……………」

背中がジンジンと痛む。まるで身長が縮んでしまったかのように、俯いて見える床は小さかった。

蘇る恐怖。時計の音。明るい夕日。

寒い。肩に血が通っていない様な気分だ。

気がついていたらうづくまっていた。頭を抑え、毛布に包まり、寝れもしないのに目を瞑っていた。

コチコチと時計の音がする。毛布の中の暗闇は死を連想させるかのように長かった。

……………

何時間経ったか判らない。時計以外の物音が聞こえた。

「ガーガー！オウイエー！」

カラスの声だ。毛布からでてみると、首をかしげてこっちを見てい



る。

「ガンバレニッポー！アサヒスーパードライ！」

「朝か・・・」

「オウイエー！」

バサバサと羽音を立ててカラスは巢に戻った。

「落ち着いた？」

愛が寝室のドアを開けた。おかゆを入れてくれていたみたいだ。

「やっぱり、思い出しちゃったんだね。」

目を合わせずに側に座った。彼女はそれ以上口を開かない。

今になってわかった。当時は当然だと思っていた事が実は何より辛かった事だったと。

「大丈夫？」

「ああ。」

しかし寝覚めは良かった。

明るい日差しが目の前にあり、大事な人が前にいる。

今俺は本当に幸せになっているんだと、過去と今の温度差が判らせていた。

失いたくない。彼女を、竜道を、今ある俺達の幸福を。同じ様に幸せを求めて努力している人達の命を助けたい。

無我夢中で彼女を抱きしめた。強く、強く。

「ひゃ?!」

「ありがとう。もう迷わないよ。」

「大智・・・君？」

「武田が君に執着を持たなかった意味。今になって本当に理解できた。あいつは優しすぎたんだ・・・」

過去を克服して本当に強い男にしてくれたのは他でもないアイツだった。

助けられていたのは、本当は俺だったんだ。

彼女の目を、今なら逸らさずに見ることが出来る。この幸せを俺は誇りに思っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7359y/>

---

さながらそれは竜の道

2012年1月4日01時49分発行